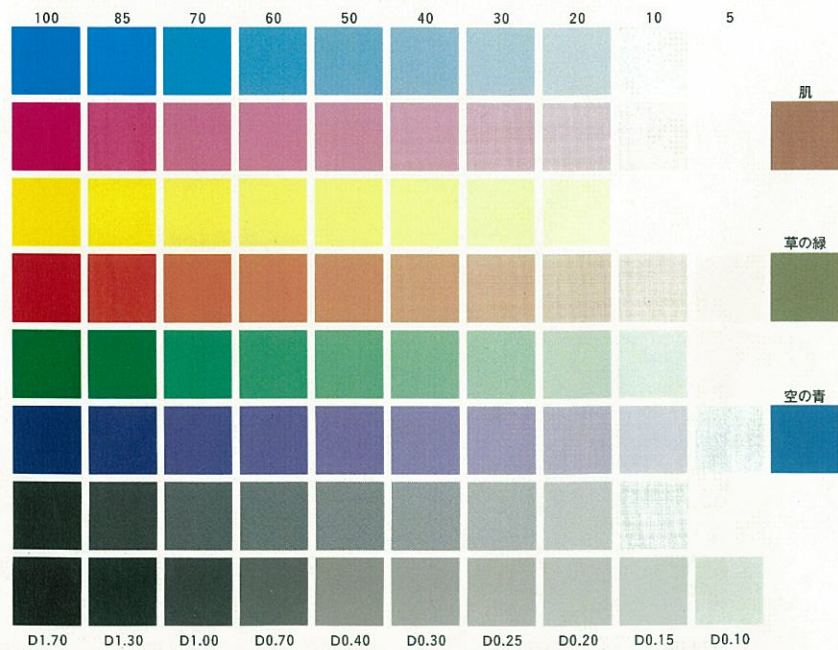


We conduct many of these
 We conduct many of these
 We conduct many of these



We conduct many of these
 We conduct many of these
 We conduct many of these



目次

序 1

参考文献 5

参考文献 6

古フランス語研究

— Marie de FRANCE の言語を中心に —

第1部 概論 8

1-1 語源 8

1-2 主語人称代名詞 20

1-3 付加形名詞の位置 25

1-4 非格受代名詞の位置
 — 格に契り文の場合 — 39

1-5 未完文について 50

第1部終註 61

第2部 語法 65

2-1 否定副詞 65

2-2 指示詞 83

2-3 前置法形について 92

2-4 連文分詞の一致 101

第2部終註 110

第3部 文体-意味論的考察 114

3-1 Tuisment と Vouloiment 114

3-2 名詞形容詞 "vermeil" について 122

3-3 詩の形態の記述について 127

第3部終註 138

終語 140

本田 忠 雄

目 次

序	1
参照テキスト	5
参考文献	6
第Ⅰ部 構文	8
1-1 語順	8
1-2 主語人称代名詞	20
1-3 付加形容詞の位置	28
1-4 非強勢代名詞の位置 — 特に疑問文の場合 —	39
1-5 条件文について	50
第Ⅰ部後註	61
第Ⅱ部 語法	65
2-1 否定表現	65
2-2 指示詞	83
2-3 前過去形について	92
2-4 過去分詞の一致	101
第Ⅱ部後註	110
第Ⅲ部 文体・意味論的考察	114
3-1 Tutoiement と Vouvoiement	114
3-2 品質形容詞 "vermeil" について	122
3-3 愛の葛藤の記述について	127
第Ⅲ部後註	138
結語	140

序

フランス語を歴史的に遡れば、まずはラテン語に到達するという事は周知の事実であろう。もっとも更に年代を遡すれば印欧祖語に行きつくのであるが、フランス語、イタリア語、スペイン語などロマンス諸言語が共通の源とするものは、古代ローマの言語であったラテン語である。しかしCICEROやVERGILIUSが著作に用いた古典ラテン語がそのまま伝えられたのではなく、民衆が日常使用していた話し言葉のラテン語、すなわち俗ラテン語がガリアにおいて時代とともに変化しフランス語となったのである。この俗ラテン語については、その全貌を知ることはできないが、古典ラテン語との間に発音に関して、また語彙や文法の面でもかなりの相違があったと考えられる。

ローマ文化の衰退、社会の活力低下、交易の縮小などが原因し、ガリアにおける俗ラテン語の語彙も乏しいものとなるが、この欠如はゲルマンの侵入者たちによりもたらされた語、また古典ラテン語その他からの借用で徐々に補われていく。ガリアの地でこのように形成されていった言語はいつ頃からフランス語と呼ぶにふさわしいものとなったのであろうか。今に伝わる俗語で書かれた最古の文献が9世紀中葉の*Semments de Strasbourg*であることから、この頃からフランス語としての歴史が始まるといわれる。しかし文学作品と呼ぶに値するものの出現は11世紀の*Vie de Saint Alexis*を待たねばならなかった。その後数々のすぐれた作品が書かれるが、13世紀末頃までを古フランス語の時代と定めるのが妥当であろう。

古フランス語期には地方貴族の勢力が強く、中央集権による国家統一は未だ果たされず、言語も多くの方言が並存していた。北フランスに限定しても、イル・ド・フランス方言、シャンパーニュ方言、ロレーヌ方言、ブルゴーニュ方言、ノルマンディー方言、ピカルディー方言、ワロニー方言などの存在が認められる。従ってひとくちに古フランス語といっても、これらすべての諸方言に共通した特徴の総体を記述することはかなり困難であるといえよう。特に語形論を問題とする場合、ラテン語より継承した形は時代により地域によりさまざまな様相を呈するのである。

近代フランス語と大きく異なる古フランス語の特徴の一つは、名詞や形容詞が格体系を有するという点であろう。ラテン語において存在した6つの格が古フランス語では主格と被制格に減少し、14世紀に至ると格体系は消滅する。もっともアングロ・ノルマン方言（イングランドにおける古フランス語の方言）では大陸よりも格体系の崩壊現象が早く始まり、すでに12世紀のテキストで主格に代わる被制格の使用が見られるが、いずれにせよかつては男性名詞の語尾につく-sが主格単数または被制格複数といった二重の機能を保持していたのである。言語の進展の歴史は音韻法則に基づく音韻の変化と、それを抑制し、可能な限り語形を統一し単一化しようとする類推作用の闘いの歴史でもあるが、後者が優勢となる以前の段階にある古フランス語においては、動詞の活用に関しても語幹母音

の交替するものが多く見られる。例えば近代フランス語においては規則的な活用をする parler や trouver といった動詞でも、古くは je parole / nous parlons, je treuve / nous trouvons のごとく厄介な活用形態を有する。フランス語学習者を最も悩ますものは動詞の形態や用法であることはしばしば指摘されるが、古フランス語に接するとき、それはいっそうの多様性と複雑さを呈するのである。

しかしこのように難解な言語で書かれたフランス中世文学には、われわれの想像力をかき立て、遠い昔にいざなう独特の魅力が存在する。勇壯な武者たちの合戦、騎士と貴婦人の恋、神秘的で不可思議な出来事など夢とロマンに満ち溢れた世界が展開される。

フランス中世文学は聖人伝や武勲詩とともに夜明けを迎えることになるが、12世紀半ばになると封建制度の基礎は固まり、宮廷生活も豊かになるとともに女性の地位も向上し、恋愛をテーマにした宮廷文学ないしは騎士道恋愛文学とも呼ばれるものが発達してくる。この文学の主流をなすものはブルターニュ系の物語で、Chrétien de TROYESの諸作品や、BÉROUL や THOMAS によるトリスタンとイゾーの宿命的な愛の物語もこの系列に属する。

本論は主として、12世紀後半に書かれたであろうと思える Marie de FRANCE の *Lais* を言語の面から分析したものであるが、この頃に書かれた文学作品の中に、作者自身が Marie という自らの名を作品中にとどめている作品が3篇認められる。それらは *Lais*、*Fables*、*Espurgatoire Saint Patriz* であるが、後世の研究者たちがこれらの Marie が同一人物であろうと推測した結果、作品が献上されている人物の名や詩句の意味内容などをもとに作者の特定化が試みられた。*Fables* のエピローグに「私の名はマリ、生まれはフランス」という詩句が認められるとともに、この寓話集が英語からの翻訳で、Guillaume 伯なる人物のために編まれたものであることが記されている。また *Lais* のプロローグにも、作者はこの物語集を「気高き王」に献上したいとの意志を明記している。これらの記述から作者はフランスに生まれ、イギリスに渡り、プランタジネット王朝の宮廷と深いつながりを持つ女性ではないかといった推測がなされ、幾人かの人物がその候補に上った。まず Louis 7世と Aliénor d'Aquitaine の娘である Marie de Champagne が、続いて Geoffroi Plantagenet の私生児で1181年から1215年の間に Shaftesbury の尼僧院長であった人物などが次々に作者と同一人物ではないかと検討が加えられた。しかしいずれも憶測の域を出るものではなく、作者の人物像や生涯については依然として謎に包まれたままである。

Lais が献上された「気高き王」は恐らくヘンリー2世（在位1154～1189）であろうというところに研究者の見解がほぼ一致している。*Fables* のエピローグに認められる Guillaume 伯なる人物については数名が候補に上り、その特定化には困難を伴うものではあるが、近年の研究では、1167年から1189年まで Essex 伯であった Guillaume de Mandeville ではないかといった説が有力視されつつある。

作者や作品が献上されている人物に関して上述の如く不明な部分が多く残存する現状においては、作品の成立年代を確定することもやはり困難であるといわざるをえない。従ってかなり概略的ではあるが、現段階では *Lais* の成立は1170年前後、*Espurgatoire Saint Patriz* は

1189年以後、*Fables* が編まれたのはその中間で1180年頃ではないかということになっている。

中世においては、ブルターニュ出身のジョングルーたちがロートやハーブといった楽器を用いて“lai”と呼ばれる歌を唄っていたといわれる。これらの歌の内容についてはよく分かってはいないが、抒情的なものであったり、また物語風のものでもあっただろうと考えられる。Marie は当時よく行われていたようなラテン語作品の翻案を書くよりも、こういった歌謡作品のいくつかをフランス語の韻文で改作し、それをヘンリー2世に献上しようと考えたらしい。

ところで Marie de FRANCE の *Lais* においては“aventure”という語が重要なキーワードであるように思える。aventure は現実と超自然の接合点、あるいは現実を断ち切る異様な出来事もしくは運命とでもいい得るような概念であろうか。例えば *Guigemar* と題する物語における aventure は以下の如くである。

狩猟で森に入り込んだ *Guigemar* は白い牝鹿を射止めるが、放った矢が跳ね返ってきて大腿部を貫き自らも深手を負う。瀕死の鹿は *Guigemar* の運命を予言する。船着場へ辿りついた彼はそこで豪華な船に乗り込む。漕ぎ手がいないにもかかわらずその船は彼を見知らぬ土地へと運び、そこで一人の女性に巡り合わせることで鹿の予言は実現へと向かう。牝鹿はその女性の化身ということであろうか。*Guigemar* にはもはやその aventure を受け入れるしか道はない。彼はその女性との暫しの別離の後、多くの苦難を経て最後にはついに合一を果たす。Marie は物語の場面を殆どブルターニュに設定しているが、ブルターニュはこういった aventure で豊かに育まれた土地である。古来その地に住んだケルト人たちは瞑想的で魔法や黄泉の国への旅、妖精と人間との恋などを題材にした民話を好んで伝承している。Marie は彼らが耳にした aventure を記憶に留めるべく lai がつくられたと述べている。つまりなんらかの驚異的な出来事をもとに口承の物語がつくれ、それを題材にして中世に韻文の物語が編まれたということになる。Marie はブルターニュに伝わる歌謡作品の lai (ケルト語で「歌」を意味する laid に由来) を文学における1つのジャンルにまで発展させた先覚者といえるであろう。

Marie の *Lais* は5種類の写本により現在に伝えられているが、*Prologue* と12編の物語がすべて備わったものはH写本のみで、ロンドンの大英博物館が所蔵する Harley 978である。これは13世紀中葉のアングロ・ノルマン方言で書かれたもので、校訂者たちはすべてこれを底本に校訂本を編纂している。そして現在に至るまで、何種類もの版本が出版された。古くは Karl WARNKE の版本、比較的最近では、“C. F. M. A”叢書に収められている RYCHNER 版。また “Lettres gothiques” 叢書にある Laurence HARF-LANGNER の版もあるが、当論文においてはH写本を可能な限り忠実に再現しようと努めた Alfred EWERT の版本を主として分析の資料に使用した。

Marie de FRANCE という中世作家に関しては極めて多くのすぐれた研究が今までになされてきたし、現在でもなおそれは継続している。しかしながらこれらの研究の多くは文学

的な面からのアプローチが殆どであり、言語の面から総合的にその作品を解明しようとする試みはあまりなされていない。この拙論はささやかではあるが、そういった現在に至る研究上の手薄な部分に対して可能な限り実証的な分析を加えようとするものである。

本研究は大きく分けて3部より構成されている。第I部は古フランス語の構文に関する考察、第II部は語法に関する考察、第III部は文体論・意味論的考察である。

本論の内容に関連する既発表の論文は以下に示すとおりである。

第I部 構文

Marie de FRANCE の短詩における語順の問題 ——*Le Fresne* を中心として——

昭和48年5月 「フランス語学研究」第7号 日本フランス語学研究会 pp.81-94

Marie de FRANCE の短詩における主語人称代名詞の使用と省略について ——*Bisclavret* を中心として—— 昭和46年10月 「リュテス」第6号 大阪市立大学フランス文学会 pp.1-14

Marie de FRANCE における付加形容詞の位置について

昭和58年2月 「関西大学文学論集」第32巻第3号 関西大学文学会 pp.23-38

Ancien français における補語人称代名詞の位置について ——とくに疑問文の場合——

昭和59年11月 「関西大学文学論集」第34巻第1号 関西大学文学会 pp.25-40

古フランス語における条件文について —— Marie de FRANCE の場合 ——

平成11年2月 「仏語仏文学」第26号 関西大学フランス語フランス文学会 pp.21-34

第II部 語法

Marie de FRANCE の短詩における否定表現について

昭和49年2月 「関西大学文学論集」第23巻第2・3号 関西大学文学会 pp.41-66

Erec et Enide における否定表現について —— Marie de FRANCE との比較 ——

昭和50年12月 「仏語仏文学」第8号 関西大学仏文学会 pp.171-190

Marie de FRANCE における前過去形について

昭和53年9月 「関西大学文学論集」第28巻第1号 関西大学文学会 pp.1-13

Ancien français の指示詞に関する一考察

昭和56年2月 「関西大学文学論集」第30巻第3号 関西大学文学会 pp.29-43

古フランス語における過去分詞の一致について

平成7年3月 「関西大学文学論集」第44巻第1~4号 関西大学文学会 pp.87-100

第III部 文体論・意味論的考察

Marie de FRANCE における *tutoiement* と *vouvoiement*

平成元年12月 「仏語仏文学」第18号 関西大学仏文学会 pp.49-62

形容詞 "*vermeil* " についての一考察

平成7年9月 (TLLMF) 第6号 大阪市立大学大学院森本研究室 pp.47-52

Lais における愛の葛藤の記述に関する一考察

[参照テキスト]

- Aucassin et Nicolette*, édité par Mario ROQUES, 2^e éd., "C. F. M. A.", Champion, Paris, 1936.
- BÉROUL, *The Romance of Tristan*, edited by Alfred EWERT, Basil Blackwell, Oxford, 1971.
- La Chanson de Roland*, edited by F. WHITEHEAD, Basil Blackwell, Oxford, 1970.
- Chrétien de TROYES, "C. F. M. A.", Honoré Champion, Paris :
- Erec et Enide*, publié par M. ROQUES, 1973.
- Cligés*, publié par A. MICHA, 1970.
- Le Chevalier de la Charete*, publié par M. ROQUES, 1972.
- Le Chevalier au Lion (Yvain)*, publié par M. ROQUES, 1974.
- Le conte du Graal (Perceval)*, publié par F. LECOY, 1975.
- Le Roman d'Eneas*, édité par J.-J. SALVERDA DE GRAVE, "C. F. M. A.", Paris, Champion, Tome I 1964, Tome II 1929.
- Floire et Blancheflor*, seconde version, M. M. PELAN, Editions Ophrys, Paris.
- Guillaume de LORRIS et Jean de MEUN, *Le Roman de la Rose*, publié par Félix LECOY, "C. F. M. A.", Champion, Paris, Tome I 1970. Tome II 1966. Tome III 1970.
- Lancelot*, édité par A. MICHA, Coll. "Textes Littéraires Français", Paris-Genève, Droz, Tome I et II 1978. Tome IV 1979. Tome V 1980.
- Marie de FRANCE, *Lais*, edited by Alfred EWERT, Basil Blackwell, Oxford, 1963.
- Marie de FRANCE, *Lais*, publié par Jean RYCHNER, "C. F. M. A.", Paris, Champion, 1971.
- Marie de FRANCE, *Lais*, traduits, présentés et annotés par Laurence HARF-LANCER, texte édité par Karl WARNKE, Coll. "Lettres Gothiques", Librairie Générale Française, 1990.
- Marie de FRANCE, *Fables*, édité par Charles BRUCKER, Peeters, Louvain, 1991.
- Marie de FRANCE, *L'Espurgatoire Saint Patriz*, édité par Yolande de PONTFARCY, Peeters, Louvain / Paris, 1995.
- OVIDE, *Art d'aimer*, établi et traduit par H. BORNEQUE, 8^e éd., revue et corrigée par Ph. HEUZÉ, Paris, Les Belles Lettres, 1999.
- OVIDE, *Héroïdes*, établi par H. BORNEQUE, 5^e éd., revue, corrigée et augmentée par D. PORTE, Paris, Les Belles Lettres, 1999.
- OVIDE, *Remèdes à l'amour*, établi et traduit par H. BORNEQUE, 2^e éd., Paris, Les Belles Lettres, 1961.
- La Prise d'Orange*, édité par Claude RÉGNIER, 4^e éd., Paris, Klincksieck, 1972.
- La Queste del Saint Graal*, édité par Albert PAUPHLET, "C. F. M. A.", Paris, Champion, 1965.
- La Vie de Saint Alexis*, édité par Chr. STOLEY, Coll. "Textes Littéraires Français", Paris-Genève, Droz & Minard, 1968.

[参考文献]

- ANGLADE, J., *Grammaire élémentaire de l'ancien français*, Collection U, Paris, Armand Colin, 1965.
- BADEL, P.-Y., *Introduction à la vie littéraire du Moyen Age*, Paris, Dunod, 1997.
- BOURCIEZ, E., *Éléments de linguistique romane*, 5^e éd., Paris, Klincksieck, 1956.
- BRUNOT, F., *Histoire de la langue française des origines à nos jours*, nouvelle éd., Paris, A. Colin, Tome I - Tome XIII, 1917-1969.
- BRUNOT, F., *La Pensée et la langue*, 3^e éd., Paris, Masson, 1953.
- BRUNOT, F., et BRUNEAU, Ch., *Précis de grammaire historique de la langue française*, 3^e éd., Paris, Masson, 1969.
- DARMESTER, A., *A Historical French Grammar*, London, MacMillan, 1934.
- DARMESTER, A., *Cours de grammaire historique de la langue française*, 4^e partie : Syntaxe, 6^e éd., Paris, Delagrave.
- DAUZAT, A., *Histoire de la langue française*, Paris, Payot, 1930.
- ERNOUT, A., et THOMAS, F., *Syntaxe latine*, 2^e éd., Paris, Klincksieck, 1964.
- FARAL, E., *Recherches sur les sources latines des contes et romans courtois du Moyen Age*, Paris, Champion, 1983.
- FOULET, L., *Petite syntaxe de l'ancien français*, 3^e éd., Paris, Champion, 1966.
- GARDNER, R., & GREENE, M. A., *A brief description of Middle French syntax*, Chapel Hill, The University of North Carolina Press, 1958.
- GOUGHENHEIM, G., *Grammaire de la langue française du 16^e siècle*, Paris, Editions A. & J. Picard, 1973.
- GREIMAS, A. J., *Dictionnaire de l'ancien français jusqu'au milieu du XIV^e siècle*, Larousse.
- GREVISSE, M., *Le Bon Usage*, 8^e éd., Gembloux, J. Duculot, S. A., 1964.
- GREVISSE, M., *Le Bon Usage*, 12^e éd., refondue par A. GOOSSE, Paris-Gembloux, Duculot, 1986.
- GUIRAUD, P., *L'ancien français*, Collection "QUE SAIS-JE" No 1056, Paris, P. U. F., 1965.
- GUIRAUD, P., *Le moyen français*, Collection "QUE SAIS-JE" No 1086, Paris, P. U. F., 1966.
- GUIRAUD, P., "L'assiette du nom dans la chanson de Roland, II. --- Le démonstratif", dans *Romania* 88, 1967.
- HAASE, A., *Syntaxe française du XVII^e siècle*, 4^e éd., Paris, Delagrave, 1935.
- LEBSANFT, F., "Le problème du mélange du « tu » et du « vous » en ancien français", dans *Romania* 108, 1987.
- MARCHELLO-NIZIA, Ch., *Histoire de la langue française aux XIV^e et XV^e siècles*, Paris, Dunod, 1992.
- MÉNARD, Ph., *Manuel du français du moyen âge*, 1. syntaxe de l'ancien français, nouvelle éd., Bordeaux, SOBODI, 1973.
- MÉNARD, Ph., *Syntaxe de l'ancien français*, 3^e éd., Bordeaux, Bière, 1988.
- MÉNARD, Ph., *Manuel d'ancien français*, 2^e éd., Bordeaux, SOBODI, 1968.

- MOIGNET, G., *Grammaire de l'ancien français, Morphologie-Syntaxe*, Paris, Klincksieck, 1973.
- NYROP, Kr., *Grammaire historique de la langue française*, 6 vol., Copenhagen-Leipzig-Londres-New York-Paris, 1899-1930.
- OHARA TOBIN, P. d., *Les lais anonymes des XII^e et XIII^e siècles*, Genève, Droz, 1976.
- POPE, M. K., *From Latin to Modern French with especial consideration of Anglo-Norman, Phonology and morphology*, Manchester University Press, 1952.
- PRICE, G., *The French language : present and past*, London, Edward Arnold, 1971.
- PRICE, G., "La transformation du système français des démonstratifs", dans *Zeitschrift für romanische Philologie* 85, 1969.
- ROHLFS, G., *From Vulgar Latin to Old French*, translated from the German by V. Almazan & L. McCarthy, Detroit, Wayne State University Press, 1970.
- TOBLER, A., et LOMMATZSCH, E., *Altfranzösisches Wörterbuch*, Franz Steiner, Verlag Wiesbaden GMBH, Stuttgart.
- WAGNER, R.-L., *Les phrases hypothétiques commençant par « si » dans la langue française, des origines à la fin du XVI^e siècle*, Paris, Droz, 1939.
- WARTBURG, W. von, *Évolution et Structure de la langue française*, 7^e éd., Berne, A. Francke, 1965.
- WARTBURG, W. von, *Problèmes et méthodes de la linguistique*, Paris, P. U. F., 1969.
- YVON, H., "Étude de syntaxe historique --- *ci* et *cist*, articles démonstratifs ---", dans *Romania* 72, 1951.
- YVON, H., "Essai de syntaxe historique --- *ci* et *cist*, pronoms démonstratifs ---", dans *Romania* 73, 1952.
- YVON, H., "Les expressions négatives dans « *La Queste del Saint Graal* »", dans *Romania* 80, 1959.
- YVON, H., "Les expressions négatives dans « *La Vie de Saint Louis* » de Joinville", dans *Romania* 81, 1960.
- YVON, H., "Les expressions négatives dans « *La Conquête de Constantinople* » de Villehardouin", dans *Romania* 81, 1960.
- ZINK, M., *Introduction à la littérature française du Moyen Age*, Librairie Générale Française, 1993.
- 朝倉季雄、『フランス文法事典』、白水社、1955。
- 朝倉季雄 編、『フランス語学文庫 8 動詞 I』、白水社、1964。
- 今村護郎、『講座心理学 第14巻 生理学的心理学』、東京大学出版会、1970。
- 大脇義一、『感情の心理学』、培風館、昭和33年11月。
- 三木 治、『フランス中世文学の研究』、三木 治先生著作刊行会、昭和52年。
- 安井 洋、『表情と感情の研究』、南江堂書店、昭和5年6月。
- 安田一郎、『感情の心理学 —— 脳と情動 —— 』、青土社、1993。
- 吉川左紀子、益谷 真、中村 真 共編、『顔と心 —— 顔の心理学入門 —— 』サイエンス社、1993。

第 I 部 構文

1-1 語順

名詞、冠詞、形容詞その他に格変化を有する古フランス語は、文中における語順が極めて自由であり、主語—動詞—補語（または属詞）といったいわゆる論理的な語順が要求される近代フランス語に比し対照的な相違を提示している。すなわち古フランス語においては多くの場合、文中における位置の如何を問わず、主格と被制格の区別が主語や補語を決定し得るのである。しかしこの2格体系が徐々に崩れて行く過程において、語順がその役割にとって代わり、格変化がまったく存在しない近代フランス語の構文では主語や補語の識別がその動詞との位置関係において行われるということが一般的となった。

ところで古フランス語における格変化の崩壊現象はいつ頃から始まったのであろうか。Albert DAUZAT は、格の使用は14世紀とともにテキストの中から姿を消すが、話し言葉の慣用ではそれ以前に消滅していたであろうと述べている¹⁾。また M. K. POPE も、Ile-de-France および Champagne では、概ね13世紀を通じて格体系が保持されているが、14世紀で格の使用に一貫性が認められるのは北部地方の作家たちに限られると論じている²⁾。一方アングロ・ノルマン方言においては、これより以前に曲用体系が混乱していたようであり、これについてもPOPE は、英語体系との接触で重大な影響を蒙り、13世紀にその崩壊は完全なものとなったと述べている³⁾。

ここでは、制作時期が12世紀末であると推定されるMarie de FRANCEの *Lais* を対象に、13世紀中葉のアングロ・ノルマン方言による写本をもとに校訂されたテキストを用いて、特に *Le Fresne* を取り上げ、その語順を検討することにより格変化の混乱とどの程度の関連があるのか、あるいは他の要因がより強く作用しているのか否かを考察してみたい。

*
* *

近代フランス語の厳格なる語順は、ラテン語の自由なそれと比較するときにも著しい相違を示す。古典ラテン語の自由な語順については「ある程度の習慣ないしは偏りが認められるものの、なんらの厳密さを持たない」⁴⁾といわれる。6つの格が健在する限りにおいて、語順にはまったく統辞論的機能が存在しないのである。しかし話し言葉の領域では、すでに語末の -m の無声化や *paenultima* または *antepaenultima* に落ちるアクセントが最終音節を特に弱化したことなどにより次第に格体系が解体し、なお漸次増大する前置詞の使用と相まって、ラテン語の曲用は古フランス語に見られるような2格体系へと導かれていったのである⁵⁾。ロマンス諸言語における2格曲用のシステムはこのようにして形成され、更にその後それが消滅することになるが、この衰退現象が名詞などの統辞論的機能を文中の語順により示すという傾向と平行関係にあることは前述した通りである。

古フランス語の作品にはラテン語の持つ柔軟性を引き継いで、種々変化に富んだ語順を

見出すことができるが、中期フランス語の時期に達すると語順固定化への動きが一段と強くなる。このことに関して Ferdinand BRUNOT はつぎの如く述べている：

Sans doute, on trouve souvent encore en moyen français le sujet après le verbe. Mais il peut déjà être question d'inversions, c'est-à-dire, somme toute, de dérogations à l'usage ordinaire. [...] Malgré des milliers d'exemples, que l'imitation du latin multipliait, l'ordre moderne s'imposait de plus en plus.⁶⁾

主語が文を開き、動詞が第2番目の位置を占め、続いて補語ないしは属詞がくるという近代フランス語のいわゆる論理的な語順が確立されたのは勿論17世紀であるが、これについても BRUNOT はつぎのように論じている：

Au XVII^e siècle, le dernier pas vers la fixité fut fait. L'ordre dit «logique» devint obligatoire. Les grammairiens le préconisent comme répondant à l'ordre même de la pensée. Bien loin de se plaindre de la rigidité de cette forme directe, ils en tirent vanité. [...] On peut donc considérer que, dans le français de l'époque classique, le sujet se présente normalement à la même place que dans la langue moderne ; le personnel sujet est devenu comme une préflexion de conjugaison, qui ne se met après le verbe que dans des cas déterminés et qui ne s'en éloigne jamais. Le sujet nominal a sa place normale en tête de la phrase.⁷⁾

*
* *

本論に入る前に語順についての歴史的な流れを概観したが、Lucien FOLET は古フランス語の文章構造をつぎの6タイプに分類している⁸⁾。

- | | | |
|-------------|-----------|------------|
| I. S—V—(C) | II. S—C—V | III. C—S—V |
| IV. V—S—(C) | V. V—C—S | VI. C—V—S |
- S = Sujet V = Verbe C = Complément (Attribut)

古フランス語では上記いずれのタイプも見出し得るが、これらは主語が動詞に先行するI、II、IIIの構文と、動詞が主語に先行するIV、V、VIのいわゆる倒置文に二大別できる。そしてこの倒置、非倒置の割合は時代や作品によりかなりの偏りが認められるであろう。ここではまずこの観点から *Le Fresne* を検討してみよう。

Le Fresne は8音綴で518行の短い物語であり、使用されている動詞は全体で546例あるが、これより主語を伴わない命令法の動詞17例と⁹⁾、殆ど常に主語を伴わない非人称動詞40例を除外し¹⁰⁾、残余の489例に関して分析を加えることとする。考察の対象とした489例の動詞はつぎに示す如く4通りに分類できるが、これらに便宜上 [A]、[B]、[C]、[D] なる記号を付し順次に検討を加えてみよう。

[A] 独立節・主節において主語を伴う例 :	135例
[B] 独立節・主節において主語を伴わない例 :	207例
[C] 従属節において主語を伴う例 :	103例
[D] 従属節において主語を伴わない例 :	44例

(表1-1.1)

[A] における語順

La meschine vit le muster,
 Les turs, les murs e le clocher: (vv. 155-156)
 Ele comence s'oreisun. (v. 161)
 Tu es ma fille, bele amie! (v. 450)
 Jeo qui que le pailë est soens. (v. 426)

上記4例は FOULET の分類で I のタイプに属する構文であり、いうまでもなく近代フランス語においても主要をなす語順である。 *Le Fresne* でもかかる語順は頻繁に用いられており、[A] における構文の半数近く (58例) はこの語順に相当する。

S—C—V の語順については38例存在するが、その内33例は補語が非強勢代名詞の形で現れる。

Ele meïsmes l'ad levee. (v. 227)
 L'abeesse li ad mustree. (v. 252)
 La dameisele l'ad veü ; (v. 400)

なお非強勢代名詞以外のものが補語となる S—C—V の構文は主節には5例しか存在しない。しかしこれらの多くは補語が行の始めに位置していることから、それが強調されているものとも考えられる。

La gent quë en la meisun erent
 Cele parole recorderent. (vv. 49-50)
 L'abeesse, kil me bailla,
 A garder le me comanda ; (vv. 437-438)

C—S—V の語順は主として関係詞節に多い構文であり、独立節、主節ではつぎに示す1例のみ存在する。

Le Freisne cele fu celee ; (v. 349)

仮に上記の文を多く見られる S—V—C に配列すれば、つぎの行 (Sis amis ad l'autre espusee.) との脚韻に関して不都合が生じ、また C—V—S の語順に転換すると *cele, celee* といった相連続する語に類似した綴字が反復し不調和音が生ずる恐れがあるため、主節では殊に稀な C—S—V の語順が敢えて採用されたのではないだろうか。

つぎにV—S—(C)の語順は近代フランス語においても疑問文として存在するが、古フランス語においては平叙文でも稀ではない。

Bien surent cil tut a scient
Que ele est nee de haute gent. (vv. 209-210)
E ja est ceo la dameisele
Que tant est pruz e sage e bele, (vv. 481-482)
En Bretaine jadis mancier
Dui chevaler, veisin esteient ; (vv. 3-4)

C—V—Sの語順は近代フランス語のいわゆる論理的な構文とはまったく逆に配列されたものである。主語を後置して補語を文頭に置くこの語順においては、特に補語を強調しようとする作者の意図が感じられる構文であるといえよう。これは古フランス語において多く認められる語順であるといわれるが¹¹⁾、*Le Fresne* では後述する如く、文頭になんらかの補語が位置する構文では主語が用いられていない場合が多く、従ってC—V—Sの語順は比較的少ないといえる。

Le paile e l'anel li bailla
Cil que primes li enveia ; (vv. 299-300)
E Le Freisne l'apelet hum. (v. 230)

なおこれ以外にFOULETがVのタイプに分類するV—C—Sの構文については、調査対象には使用されておらず、古フランス語では最も稀な語順であると考えられる¹²⁾。

[B]における語順

ここでの構文はつぎに示すとおり、動詞が文頭に位置するか、ないしはその前に接続詞、否定辞neなどの小辞が先行する(a)のタイプと、補語あるいは副詞などで文章が開かれる(b)のタイプに分けて考えてみたい。

V—(C) (a)
C—V またはC'—V—(C) (b)
C' = Complément circonstanciel など

古フランス語では動詞や非強勢代名詞が文頭にくることを回避しようとする傾向があるため¹³⁾、以下に記すような(a)に属する文は特に少ない。

Quidat ke aukun les eüst pris
En larecin e ileoc mis ; (vv. 185-186)
N'ert mic bons, ceo li sembla ; (v. 401)

主語のない構文の殆どは、なんらかの補語が文頭に置かれる(b)の語順を形成し、こ

れがこの作品で最も多用されているタイプである。

- S'espuse li unt amenee. (v. 363)
- Les chamberleins i apela, (v. 393)
- De tutes femmes mesparlai. (v. 80)
- Prochein furent, de une cuntree; (v. 7)
- Soventefeiz i repeira, (v. 271)
- Entre ses braz ad pris l'enfant, (v. 171)
- Durement sereit curuciee. (v. 284)
- Desus le mist, puis le lessa; (v. 173)
- Richement vus cunseillera. (v. 288)
- A sun chastel l'en ad menee. (v. 292)

以上、独立節および主節における構文につき、その典型となるものを例示したが、それらは次表に示すような頻度で使用されている。

[A] : 135例		
S—V—(C)	58例	} 97例 (71.9%) ¹⁴⁾
S—C—V	38例	
C—S—V	1例	
V—S—(C)	18例	} 38例 (28.1%) ¹⁵⁾
C—V—S	20例	
[B] : 207例		
V—(C)	15例 (7.2%)
C—V	122例	} 192例 (92.8%)
C'—V—(C)	70例	

(表 1—1.2)

[C] における語順

調査を進めた *Le Fresne* においては、従属接続詞や関係代名詞により導かれる従属節中で主語と動詞が倒置された実例は認められず、従って [C] における語順は変化に乏しいと
いい得る。

まず主格の関係代名詞により導かれる関係詞節での語順は S—V—(C) あるいは S—C—V で、後者の方がやや優勢である。

- Une fille ad, quē¹⁶⁾ est suen heir : (v. 333)
- Lié sereient s'il eüst heir,
- Quē après lui puüst aveir

Sa terē e sun heritage ; (vv. 319-321)
Une fille ot que vedve esteit ; (v. 193)
Cil que le message ot porté
A sun seignur ad tut cunté. (vv. 57-58)
Cest e un anel me baillèrent
Cil ki a nurir me enveierent. (vv. 439-440)

直接目的格の関係代名詞に後続する構文では、すべてC—S—Vの語順が認められる。

Le lai del Freisne vus dirai
Sulunc le cunte que jeo sai. (vv. 1-2)
L'enfant mist jus que ele aporta, (v. 159)
La meschine mut s'esjoï
De l'aventure ke ele oï. (vv. 491-492)

最も頻繁に使用される従属接続詞は que, tant que, ainz que など que もしくは que を含むものであるが、これらに続く場合も、また他の従属接続詞 (quant, si, cum, etc.) に後続するときも、使用される語順はS—V—(C) またはS—C—Vであり、他の語順は存在しない。

Bien sachent tuit verciement
Que ele est nee de bone gent. (vv. 133-134)
Quant ele sot kē il la prist,
Unques peiur semblant ne fist : (vv. 351-352)
Si il nen ad l'amur de li,
Mut se tendrat a maubailli. (vv. 255-256)
L'abbeesse le comaundat
Que devant li seit aporté
Tut issi cum il fu trové. (vv. 216-218)
Lungement ot od lui esté,
Tant que li chevaler fiufé
A mut grant mal li aturnerent : (vv. 313-315)
Ne dute mes, bien seit e creit
Que ele memes sa fille esteit ; (vv. 447-448)

従属節中で主語を有する構文は、それらを導く関係代名詞または接続詞との関係において次表の如く要約し得る。

	S—V— (C)	S—C—V	C—S—V
関係代名詞 主格 <i>ki, que</i>	11	15	
直接目的格 <i>que</i>			16
その他	4		
従属接続詞 <i>que, tant que, etc.</i>	16	9	
<i>quant</i>	7	2	
<i>si</i>	7	2	
<i>cum</i>	2	1	
その他	8	3	
TOTAL	55	32	16

(表 1—1.3)

【D】における語順

従属節中、主語の存在しない構文は実例数が少ないが、44例中37例までは節の終わりに動詞が位置する。すなわち接続詞ないしは関係代名詞の後に目的補語や状況補語が続き、動詞で節が終止する傾向が強い。

Quant la priere out finee,

Ariere sei se est regardee. (vv. 165-166)

Si mun conseil crere volez,

Ensemble od mei vus en vendrez. (vv. 285-286)

Pur ceo que al freisne fu trovee,

Le Freisne li mistrent a nun, (vv. 228-229)

Nostre fille ai ci coneue,

Que par ma folie oi perdue ; (vv. 479-480)

*
* *

不定法構文および複合時称における語順

【A】～【D】の順序に従い、それぞれの場合における代表的な語順を列挙してきたが、周知のとおり古フランス語の構文は複雑で、この作品においても、すでに引用したような文が更に変形して現れることもしばしばある。まず不定法構文において主動詞と不定詞の間に別の要素が介入する場合がある。

Iloc purrat vile trover. (v. 146)

Mut poëz tere od li aveir. (v. 334)

また補語不定法の目的補語が主動詞より前にも出ることもある。

L'aventure li veut cunter

De l'enfant cum il le trovat. (vv. 214-215)

De la pucele oï parler; (v. 247)

つぎに示す例は近代フランス語の不定法構文とは逆に配列されたものである。

L'abeïe crestre vodra; (v. 262)

これらの不定法構文は、特に強調したい要素を文頭に置こうとする作者の意図、押韻や音調との関連、そして動詞や非強勢代名詞が文頭に立つことを回避しようとする言語習慣などの要因がときには重なり合うことによって、その語順が変形したものと考えられる。

つぎに動詞が複合時称におかれているとき、韻律上の理由などから助動詞と過去分詞の間に文中の他の要素が介入する場合は少なくない。近代フランス語においても、しばしば副詞などが助動詞と過去分詞の間に割り込むことがあるが¹⁷⁾、*Le Fresne* においては副詞に限らず目的補語や前置詞を伴う状況補語、そしてときには主語などが頻繁に介入する。

Sis amis ad l'autre espusee. (v. 350)

Sa merë est od li alce; (v. 364)

Pus l'ad de sun leit aleitë. (v. 206)

Si l'ad a la dame mustré. (v. 221)

これらの例は、その直前または直後の行と韻を踏むため過去分詞が助動詞と分離したものであるが、複合時称の構文にはつぎに示すような過去分詞が助動詞の前にも出る用例もあり¹⁸⁾、いっそう語順を複雑なものにしている。

Eschaufë l'ad e bien baigné; (v. 205)

Kar mcintefeiz veü l'aveit. (v. 396)

複合時称における助動詞と過去分詞の結合または分離の状況は*Le Fresne* の場合、つぎのような結果となる。

	[複合過去形の場合]			[その他の複合時称の場合]		
	主節	従属節	合計	主節	従属節	合計
実例数	53	19	72	9	8	17
結合例	27	15	42	8	7	15
分離例	26	4	30	1	1	2

(表 1—1.4)

上記の結果より、複合過去形の場合に殊に主節において助動詞と過去分詞の分離が顕著であることが確認できる。

格体系の混乱について

まずつぎに示す2つの文を比較すると、

Le chamberlenc apele a sei.
 'Di mei,' fait ele, ' par ta fei,
 U fu *cest bon paile* trovez?' (vv. 419-421)
 La dame l'aveit apelee,
 E ele est devant li alee ;
 De sun mauntel se desfubla,
 E la mere l'areisuna :
 'Bele amie, nel me celez!
 U fu *cist bons pailles* trovez?' (vv. 427-432)

最初の文は、ある貴婦人が下僕を呼びつけ2人称単数形を用いて語っている場面であるが、ここでは主語の *cest bon paile* に格の崩れが認められる。後の文は、同じ人物が先の下僕よりも身分の高い婦人に対して2人称複数形で話しているのであるが、同じ主語の *cist bons pailles* に主格形が意識されている。これは偶然の結果とも考えられるし、またこの用例だけで判断することは適切ではないが、当時丁寧なことは遣いをする場合に、話し手はある程度格変化について意識していたかも知れないという可能性が残る点で興味があるといえよう。

テキストを通じては、校訂者 EWERT も指摘する如く¹⁹⁾、格の混乱がかなり目につく。

まず主格形が被制格形に代わって用いられている例は極めて少ない²⁰⁾。

A sun genre cunseilera
 Què a un *produm* la marit ; (vv. 370-371)

Le Fresne に関して格の混乱が特に顕著な点は、主格に代わる被制格の使用と、男性主格単数形に付加されたアナロジーによる -s であろう。格変化の崩壊の程度を知る上に一つの指標となる主語男性名詞について調査すると、作品中、格変化をしないものを除外し男性名詞が主語として用いられているケースは43例あるが、その内、格変化が守られているのは19例にとどまり、残りの24例では、名詞またはそれに伴う冠詞、付加形容詞などいずれか1つ以上に崩れが認められる。独立節もしくは主節における主語男性名詞のみを抽出し、語順との関連において比較するとつぎのような結果が得られる。

	実例数	格遵守	格混乱
S—V型構文	25	9	16
V—S型構文	9	6	3
TOTAL	34	15	19

(表1—1.5)

用例数が不十分であることと、主節の主語男性名詞を中心とした名詞統合のみを問題としたため即断は出来ないが、上表の結果から、近代的語順であるS—V型構文では混乱の傾向が、古フランス語に多いV—S型のいわゆる倒置文では遵守の傾向がやや認められる。なお *Lais* の一篇 *Bisclavret* においてもほぼ同様の傾向が確かめられる²¹⁾。

S—V型構文における遵守の例

Li riches hum sist al manger; (v. 19)

Li sire en ad Deu mercié; (v. 23)

Li produm l'apelat avant. (v. 196)

S—V型構文における混乱の例

Le chevalers ad graanté

Que en lur conseil femme prendra; (vv. 328-329)

Sun pere ne volt plus atendre; (v. 493)

なおS—V型構文において格が混乱している16例の中には、つぎに示すような類推による-sが付加されたことによるものが6例含まれており、特にsireに代わるsiresが多く見られる。

Sis sires est liez e joianz; (v. 12)

Sis sires maunde ses amis; (v. 360)

E li peres li ad donec, (v. 506)

V—S型構文における遵守の例

En Bretagne jadis maneient

Dui cheualer, veisin esteient; (vv. 3-4)

A sa meisun vet li portiers, (v. 219)

V—S型構文における混乱の例

Grant joie nus ad Deu donec,

Ainz que li pechez fust dublez. (vv. 488-489)

また属詞についても、主格に代わる被制格の使用がしばしば認められる。

E il e ele en sunt humez. (v. 36)

Dolent en fu, ne sot quei faire; (v. 60)

従属節中にも主格に代わり被制格が用いられている例は存在する。

Unques ne fu ne ja nen iert

Ne n'avendrat cel' aventure

Que a une sule porteüre

Quë une femme deus fiz eit,

Si deus hummes ne li unt fait. (vv. 38-42)

E ja est ceo la dameisele

Que tant est pruz e sage e bele,

Ke li *chevaler* ad amee

Ki sa serur ad espusee. (vv. 481-484)

この他、nuls に代わる nul (v. 241)。cist に代わる cest (v. 32, 421) なども認められるが、概して冠詞や形容詞において格の形が崩れていても、それらにより限定される名詞の格が健在であったり、また名詞に崩れがあるときにも、冠詞や形容詞などの格形によって名詞の機能が明瞭となるケースが多い。

*
* *

当報告の如き限られた範囲内での調査では、蒐集できる用例の数が少なく、従ってこの時代に共通していい得るようななんらかの結論を引出すことは差し控えなければならないであろう。従ってここでは Marie de FRANCE の *Le Fresne* に限定し、調査結果をもとにその特徴を要約するにとどめる。

まず従属節中の語順については、主語がときに使用されないという事実を別にすると、近代フランス語と著しく異なった点は少ない。関係詞節においては関係代名詞の機能に応じて、S—V—(C)、S—C—V または C—S—V の語順が用いられており、従属接続詞に続く文中でも多くは S—V—(C) の語順を形成する。そして主語が存在する限り、必ずそれは動詞よりも前に位置している²³⁾。

独立節ないしは主節において主語が存在する構文は近代的な語順が優位を占める。従って主語が使用される限りにおいては、その主語は多くの場合文頭に位置する。主語が動詞の後に置かれるいわゆる倒置文は38例しかなく、この中には近代フランス語においても倒置される挿入節の11例と、疑問による倒置構文が6例含まれていることを考慮に入れると、V—S型構文がS—V型構文に比し頻度が低いことが窺える。

逆に主語が使用されない場合は、補語ないしは副詞などが文頭にくる構文が90%以上を占める。稀には副詞の後でも倒置が起こらないこともあるため²³⁾、これらがすべて倒置文に類するものと規定することはできないであろう。しかし文頭の補語や副詞が倒置を引き起こすことは古フランス語の極めて支配的な傾向であるため²⁴⁾、これらの大部分はV—S型構文である可能性が高い。そして倒置によって主語人称代名詞が言外に置かれたものと考えられる。この結果、語順は主語の有無と密接な関係にあることが理解できよう。

考察の対象とした *Le Fresne* についても、特に独立節・主節において主語のない構文が多くの割合を占めることは前掲の表1—1.1からも明白である。Marie de FRANCE の *Lais* は節および文が短く、数行にも跨る長文は稀であり、しかも8音綴であるため、文中に無駄な表現が介入する余地が殆どないといえる。枝葉を落として文章を簡潔に書くには主語を使用しないことが一つの手段となる。そのためには、動詞が多くの場合第2番目の位置を占める古フランス語の性質上²⁵⁾、補語ないしは副詞などを文頭に置くことが自然であり、

従って表1—1.2に見られる如くC—VあるいはC'—V—(C)なる構文が高い比率を示すことになるのであろう。

また一般にいわれる格の崩れと語順との関連については、*Le Fresne*に関する限り極めて微妙である。当報告においても表1—1.5の結果から、その関係を否定することはできないが、S—V型構文における格の混乱(16例)の中には、“s analogique”が付加されたことによるものが6例も含まれていることと、更にこの物語の主要な語順は補語ないしは副詞などが最初に位置する構文であることを考慮に入れると、名詞を主語として文頭に使用した場合にその統辞論的機能を明確化するため、特に格の形が意識されているとも考えられる。従って格体系の崩壊が語順に重大な影響をおよぼしているとは断定できない。*Le Fresne*においても同時代の他のアングロ・ノルマン方言によるテキスト同様、格体系にかなりの混乱は見られるが、語順との相関関係は稀薄であるといえよう。

語順に関連する他の要素としては押韻の問題がある。詩の分野では近代フランス語においてさえかなり自由な語順が許容されていることを思えば、古フランス語の韻文作品については押韻の必要上いっそう自由な語順が可能であったらう。本論においても不定法構文や複合時称の構文で、ときに語順が変形する原因の一つに脚韻の問題があることは既述したとおりである。また当報告においては特に取り扱わなかったが、状況補語が文中のさまざまな位置に使用されることにより、文章に変化を持たせるとともに押韻の必要性をも充たしている。従ってこの種の作品の語順に関しては韻律上のファクターを無視することはできないであろう。このため散文についての調査を実施すれば、大幅に相違した結果が出るものと推測し得る。

また語順が自由であるということは、作者が特に強く訴えたいと思う要素を、例えば文頭に置くことなどにより強調し得るのであるから、厳格な語順が守られる近代フランス語に比し、古フランス語では文体的な効果を語順に求めることがより以上に可能であったらう。*Le Fresne*の語順を構成するものは、主語の有無、韻、リズム、音調、それに作者自身の文体的な意図などの諸要素が有機的に絡み合っており、格体系の混乱にはまだそれ程強い影響は受けていないように思われる。

[使用テキスト]

Marie de FRANCE, *Lais*, edited by Alfred EWERT, Basil Blackwell, Oxford, 1963.

1-2 主語人称代名詞

フランスの中世文学に属する作品に一度なりとも触れたことのあるものなら、その言語が近代フランス語と種々の点において異なっていることに気づくであろう。中でも顕著な相違点として主語人称代名詞の用法を挙げる事が出来る。近代フランス語における主語人称代名詞は、特別な場合を除くと、殆ど常に動詞とともに用いられ、それはすでに動詞と一体をなすものとなったと見なすこともできよう。しかしかかる現象も大体17世紀以降のことであり、16世紀の作品にはしばしば主語を省略した文章が見うけられる²⁶⁾。古フランス語になると省略の頻度はいっそう高く²⁷⁾、現代の読者にとっては、この繰り返される「省略と使用」がときとして戸惑いの原因になるのである。しかしこのような事実も作者の単なる気紛れで起こるものではなく、そこにはある程度の法則性の如きものが存在するのは当然といえよう。ここでは Marie de FRANCE の *Bisclaret* を対象にし、古フランス語の主語人称代名詞に関して若干の考察を試みたい。

*
* *

最初に主語人称代名詞の使用に関する歴史的な過程を一瞥すると、古典ラテン語においては、「動詞の形態がすべてそれ自体に主語を含んでおり、"lego" は "je lis"、"legis" は "tu lis"、"legit" は "il lit" ... を意味する。1・2人称の人称代名詞は強調や対立を示す理由がある場合以外は、正しいことばの中には示されない：*egone istuc dixi tibi?* (Plaute, Mercator, 761)。そしてこのような場合には、それは概して文頭に置かれるのである²⁸⁾。更にまた「ラテン語では3人称に特別な人称代名詞はなく、動詞の形態が持つ自立性により、主語はなんらの指示もなく変化し得る：*neque robigo frumenta atque arbores corrumpit, neque non tempestive florent.* (Varron, Res rusticae I, I, 6)」²⁹⁾。

初期ロマンス語においても「主語人称代名詞はラテン語と同じく、概ね動詞の中に含まれていた。しかしながら特に強調する必要性がなくとも、それをを用いようとする習慣が、殊にガリア地域において若干発達した³⁰⁾」といわれる。

時代が進み11世紀を過ぎると、フランス語史の中にも文学作品が多く登場するが、主語人称代名詞は依然として使用されることは稀であった。Kr. NYROP はこの事実をつぎのように述べている：

Il faut pourtant remarquer qu'au moyen âge on se passait ordinairement d'un pronom sujet, parce que les terminaisons verbales n'avaient pas encore subi d'aplanissement.³¹⁾

事実、初期聖人伝や武勲詩には主語が存在しない文が頻繁に見られる。

Fud baptizét, si out num Alexis. (*La Vie de Saint Alexis*, v. 31)

En ceste tere ad asez osteiet ;

En France, ad Ais, s'en deit ben repairer. (*La Chanson de Roland*, vv. 35-36)

Si li ad dit : " Mult estes bele e clere !

Tant vus avrai en curt a rei portee ! (*Ibid.*, vv. 445-446)

このような主語代名詞を使用しない言語習慣は、時代の進行とともに徐々に衰微し、「12世紀にはその使用が一般化する」³²⁾と Joseph ANGLADE は述べている。しかしまた Pierre GUIRAUD : *Le moyen français* によると、「事態は混乱していた。すなわちある場合には近代語法に従い主語代名詞が用いられ、また別の場合には古語法に則してそれが省かれたり、また古語法でもそれが必要であるような個所で省略が行われることもある」³³⁾とある。かかる事実が、当時フランス語がおかれていた混乱した状態を示すものに他ならないと考えられる。16世紀には主語代名詞が一時期使用から省略へと逆方向を辿るが、これはラテン語法に対する "imitation savante" であって³⁴⁾、「Malherbe 以後はずっと、主語代名詞の使用が大方の構文において絶対的な規則となる」³⁵⁾のである。

近代フランス語における主語人称代名詞と動詞の緊密なる膠着関係は、イタリア語やスペイン語など、他のロマンス諸言語には見られない特徴である。すなわち動詞の活用語尾の無音化に伴い、かつては文字と音声の両面で弁別が可能であった人称が区別できなくなってきたため、主語人称代名詞を付加することにより、その行為者を明確化したものである。しかしこの主語人称代名詞の常なる使用は、ラテン語より派生した諸言語の中でも、フランス語が最もその影響を強く受けたといわれるゲルマン語の語法と関係が深いともいわれる³⁶⁾。

*
* *

主語人称代名詞の使用・省略に関する経緯を時代の流れとともに概括的に辿ってみると、個々の作家や作品により事情はそれぞれ異なるが、大体12世紀中葉を境としてそれ以前は省略の傾向が強く、以後は極めて微妙な状況を提示しつつ16世紀にまで至っているように思われる。そこで当報告においては、その使用・省略が微妙な段階に達すると思える12世紀の後半に成立したであろう Marie de FRANCE の *Lais* に注目し、検討を加えてみた。

テキストとして用いた *Biscarret* は318行で完結する8音綴の短い物語であるが、その中に用いられている動詞は341例である。これから主語人称代名詞以外の品詞（例えば名詞、指示代名詞、関係代名詞、疑問代名詞等）が主語に置かれている場合の78例を除き、またこの物語においては常に主語が省略されている命令法の動詞20例、および常に主語人称代名詞を伴う挿入句の9例³⁷⁾、更に非人称動詞の13例、計120例を考察の対象から除外し、残余の221例について、すなわち主語人称代名詞が使用されている用例およびそれが省略されている用例に関して分析を試みてみよう。

上記221例の用例をまず物語体の部分に見られる155例と、会話体の部分に見られる66例に区分し、使用・省略の比率を調べてみると以下のような結果となる。

物語体における用例：155例

主語を伴う用例：32例 (20.6%) 主語を伴わない用例：123例 (79.4%)

会話体における用例：66例

主語を伴う用例：28例 (42.4%) 主語を伴わない用例：38例 (57.6%)

(表 1—2.1)

物語体における155例の動詞は約8割の123例までが主語を伴わず、残りの32例は主語人称代名詞とともに使用されている。この比は約4対1であるのに対して、会話体における66例の動詞については、6割弱の38例に主語が用いられておらず、28例に主語人称代名詞が見られる。そしてこの比は約3対2となる。この結果いずれの場合においても、人称代名詞は「省略」が「使用」を上回っているが、物語体において遥かに省略の度合いが高く、逆に会話体では使用の機会がかなりあるといえる。

また上表1—2.1の用例を人称・数により分類すると、以下の如き結果が得られる。

物 語 体			会 話 体	
主語代名詞あり	主語代名詞なし		主語代名詞あり	主語代名詞なし
2	5	1人称単数	17	18
0	0	2人称単数	0	0
29	105	3人称単数	4	8
0	0	1人称複数	0	3
0	1	2人称複数	6	9
1	12	3人称複数	1	0
32	123	TOTAL	28	38

(表 1—2.2)

用例数が僅少であるため即断はできないが、物語体における3人称主語代名詞が単数、複数ともに省略される機会が多いことが判明する。

Puis que ses dras li ot toluz,

Ne fud en sun país veüz ; (*Bisclaurez*, vv. 271-272)

Asez fu quis e demandez,

Mes n'en porent mie trover ; (*Ibid.*, vv. 130-131)

Deus feiz le vout mordrē al jur. (*Ibid.*, v.203)

Sur le demeine lit al rei

Truevent dormant le chevaler. (*Ibid.*, vv. 298-299)

また1人称単数においては、殊に会話体で使用と省略が相拮抗していることが認められる。

Sire, *jeo* sui en tel effrei

Les jurs quant vus partez de mei, (*Ibid.*, vv. 43-44)

Dame, *jeo* devienç bisclavret : (*Ibid.*, v. 63)

Jamés n'avreie mes sucurs,

De si k'il me fussent rendu. (*Ibid.*, vv. 76-77)

M'amur e mun cors vus otrei,

Vostre drue fetes de mei ! (*Ibid.*, vv. 115-116)

前掲の表1—2.2において、2人称単数形に使用例が認められないのは調査範囲が狭いためであり、因みに同じ *Lais* に含まれる *Guigemar* の最初の200行中には4例の2人称単数形におかれた動詞が見られる²⁸⁾。これらすべては会話体に用いられているが、その内、主語人称代名詞を伴うものが3例、これを省略したものが1例という結果が認められる。

E *tu* referas taunt pur li, (*Guigemar*, v. 118)

Jamais n'aies *tu* medecine !

Ne par herbe ne par racine

Ne par mire ne par pociun

N'avras *tu* jamés garisun

De la plaie ke as en la quisse, (*Ibid.*, vv. 109-113)

従って1・2人称の単数形では、主語人称代名詞の使用の機会がかなり多いことが認められる。また逆に1・2人称の複数形においては、省略の方が優勢であるように思える。

Dites le mei, si ferez bien ! (*Bisclavret*, v. 86)

Ja n'i avrez nul cuntredit ; (*Ibid.*, v. 114)

Ceo est la femme al chevaler

Que taunt par suliez avoir chier,

Que lung tens ad esté perduz,

Ne seümes qu' est devenuz. (*Ibid.*, vv. 251-254)

Meinte merveille avum veü

Quë en Bretagne est avenu. (*Ibid.*, vv. 259-260)

S'il devient hum, bien le verums. (*Ibid.*, v. 292)

Ne savez mie que ceo munte : (*Ibid.*, v. 287)

L'aventure ke avez oïe

Veraie fu, n'en dutez mie. (*Ibid.*, vv. 315-316)

会話体における主語人称代名詞の使用が物語体における使用よりも頻繁であるという調

査結果は、中世における話し言葉の状況がある程度反映しているのではないだろうか。勿論このような作品の分析を通して当時の口語について論及することは極めて問題が多く、危険を伴うものであることは考慮しなければならないが、音を媒体として耳から入るイメージは文字を媒体として視覚に訴えるイメージに比し、瞬時的で永続性に乏しい。従ってより正確に情報を伝達するためには、文字を媒体とする場合よりも多くの形態素をメッセージに導入しなければならない。会話体と物語体における主語人称代名詞の使用頻度の差異もこのような問題が関連しているのではないだろうか。

つぎに主語人称代名詞の使用や省略が、どのような構文で多く起こるのかという点に関して検討を進めてみよう。この作品で主語人称代名詞を伴う動詞は60例あるが、物語体および会話体において、それぞれ独立節または主節に用いられている用例 (a) と、従属節中に用いられている用例 (b) に区分し、その比率を検討するとつぎようになる。

主語人称代名詞を伴う用例：60例

物語体における用例：32例 [(a) 9例 (28.1%) (b) 23例 (71.9%)]

会話体における用例：28例 [(a) 12例 (42.9%) (b) 16例 (57.1%)]

(表 1—2.3)

更に主語人称代名詞を伴わない161例の動詞を同様に分類するとつぎようになる。

主語人称代名詞を伴わない用例：161例

物語体における用例：123例 [(a) 101例 (82.1%) (b) 22例 (17.9%)]

会話体における用例：38例 [(a) 29例 (76.3%) (b) 9例 (23.7%)]

(表 1—2.4)

上記の2つの表を比較することにより、主語人称代名詞の使用は従属節で頻繁で、逆に省略は独立節・主節に偏る傾向があることが判明する。

また従属節中に見られる主語人称代名詞は、若干の接続詞あるいは関係代名詞と特に緊密な関連があるように思われる。すなわち物語体の部分で従属節中に使用されている主語人称代名詞23例は、10例までが *que(=ke)* または *de si que* といった *que* を含む接続詞、あるいは関係代名詞に後続している。

Il ne saveit ne ne quidot

Que il le deüst trover si pres. (Bisclavret, vv. 194-195)

Bien s'aparceit que il l'amout. (Ibid., v. 184)

Tute la veie ke il tint

Vers la forest li enseigna ; (Ibid., vv. 122-123)

A lui cururent tuteur
E li chien e li veneür,
Tant que pur poi ne l'eurent pris
E tut deciré e maumis,
De si qu'il ad le rei choisi ; (Ibid., vv.141-145)

更に cum, si tost cum, tant cum など cum に続く従属節中には 6 例の主語人称代名詞が見られる。

Oiez *cum il est bien vengiez ! (Ibid., v. 234)*
Si tost cum il pot aver aise,
Tute sa tere li rendi ; (*Ibid., vv. 302-303*)
Tant cum il est en cele rage,
Hummes devure, grant mal fait,
Es granz forez converse e vait. (*Ibid., vv. 10-12*)

quant に後続する節にも 4 例の主語人称代名詞が用いられている。

Quant il l'oi, si l'acola,
Vers lui la traist, si la beisa. (*Ibid., vv. 37-38*)
Quant il l'urent devant lui mise,
Ne se prist garde en nule guise. (*Ibid., vv. 279-280*)

その他、si に続く場合が 2 例、coment に続く場合が 1 例それぞれ認められる。

N'est merveille *s'il le haï. (Ibid., v. 218)*
Tant par destresce e par poür
Tut li cunta de sun seignur :
Coment ele l'aveit trahi (Ibid., vv. 265-267)

一方、会話体の部分で従属節中に用いられている人称代名詞 16 例は、7 例までが si に続く従属節中に見られる。

Si jeo n'en ai hastif cunfort,
Bien tost en puis aver la mort. (*Ibid., vv. 47-48*)
Mal m'en vendra, *si jol vus di, (Ibid., v. 54)*

そして que あるいは tant que など que に従属する節には 4 例が集まっている。

Mun escient *que vus amez,*
E si si est, vus meserrez. (*Ibid., vv. 51-52*)
Par cele fei *ke jeo vus dei,*
Aukun curuz ad il vers li,
E vers sun seignur autresi. (*Ibid., vv. 248-250*)
Mes dras i met suz le buissun,
Tant que jeo revienç a meisun. (Ibid., vv. 95-96)

その他、u に続く例が 2 例、unt (< lat. unde)、quant および kar に続く例が各 1 例見られる。

Kar me dites *u nus* alez,
U nus estes, u conversez ! (*Ibid.*, vv. 49-50)
 Lez le chemin par *unt jeo* vois,
 Une vielz chapele i esteit, (*Ibid.*, vv. 90-91)

上述した接続詞や関係代名詞に後続する用例は次表の如く整理することができる。

物語体	会話体
que (conjonctions) : 7 que (pronoms relatifs) : 3 cum : 6 quant : 4 si : 2 coment : 1	si : 7 que (conjonctions) : 3 que (pronom relatif) : 1 u : 2 unt : 1 quant : 1 kar : 1
TOTAL : 23	TOTAL : 16

(表 1—2.5)

以上の結果から、主語人称代名詞は que, si, cum, quant 等の接続詞や関係代名詞に導かれる従属節で多用される傾向があることが認められる。

独立節・主節における主語人称代名詞については文中の他の諸要素との位置関係、すなわち語順に極めて関係が深い。古フランス語は動詞や非強勢人称代名詞が文頭にくることを回避しようとする傾向がある³⁹⁾。従ってかかる語順を避けるために文頭に主語代名詞が置かれるケースは少なくない。

Il l'aveit pris par sun estrié,
La jambe li baise e le pié. (*Bisclavret*, vv. 147-148)
Ele ad sen de hume, merci crie. (*Ibid.*, v. 154)
Ele chaï demeintenaunt. (*Guigemar*, v. 96)
Il la receit entre ses braz ; (*Ibid.*, v. 737)

また「強調」や「対立」を示す文、動詞のない文にも主語人称代名詞が使用される。

Il amot li e ele lui ; (*Bisclavret*, v. 23)
Il la salue e ele lui ; (*Guigemar*, v. 475)

しかしながら古フランス語においては、動詞や非強勢代名詞が文頭に出ることを回避す

るために文頭に置かれる主語人称代名詞も、主語の強調に用いられる主語人称代名詞も *Forme tonique* であるため、実際には文頭における主語人称代名詞が真に *Valeur emphatique* を含むものか否か若干の疑問が残ることもあり得る。

主語人称代名詞の省略については、DARMESTERE によるとつぎのような語で始まる文中で起こる⁴⁰⁾。①非強勢代名詞を除く *Régime direct* または *Régime indirect*、②分詞や形容詞による属詞、③語尾変化をしない語。

Cest afere les ore ester ; (Bisclavret, v. 13)

La femme ad del país ostec

E chacie de la cuntree. (Ibid., vv. 305-306)

A tuz les suens ad comaundé

Que sur s'amur le gardent bien

E il ne mesfacent de rien, (Ibid., vv. 170-172)

A la beste durrai ma pes ; (Ibid., v. 159)

Beaus chevalers e bons esteit

E noblement se cuntencit. (Ibid., vv. 17-18)

Gelus esteit a desmesure ; (Guigemar, v. 213)

Al hafne vient, la neif trova :

Atachie fu al rochier

U ele se voleit neier. (Ibid., vv. 678-680)

Ensemble od lui tuz jurs alout ; (Bisclavret, v. 183)

Ja li eüst mut grant leid fait,

Ne fust li reis ki l'apela, (Ibid., vv. 200-201)

Tresbien quidat e bien creeit

Que la beste Bisclavret seit. (Ibid., vv. 273-274)

被制格におかれた名詞、あるいは副詞などが文頭にくると古フランス語では多くの場合、主語と動詞の倒置が起こる。そしてこのとき、もし主語が人称代名詞であれば省略が頻繁に行われる。Lucien FOULET : *Petite syntaxe de l'ancien français* は倒置および非倒置における主語省略の比率を統計をもって示している⁴¹⁾。

*
* *

当報告の如き限られた範囲での調査をもってしては、古フランス語すべてに通ずるような結論は差し控えなければならないことは当然であるが、考察の対象とした *Bisclavret* の主語人称代名詞の用法に関しては、おおよそつぎのようにいうことができるであろう。

この物語においては、主語人称代名詞が省略から使用へと向かう過程の一段階を提示してはいるが、全体として省略の傾向が強く、殊に物語体の部分でそれが顕著に示されてい

る。

また人称・数による偏りについては、3人称において単数、複数ともに省略が多く、1・2人称では単数で使用がかなり頻繁で、複数で省略が多いように見うけられる。1・2人称の複数で省略が多いという事実は、動詞形態に特徴があり、その活用語尾から他の人称との区別が容易であるためと思える。

また主語人称代名詞は、独立節・主節におけるよりも従属節において使用頻度が高く、いくつかの接続詞や関係代名詞と特に緊密に結合しやすい。

更には、考察を試みたテキストが韻文であるため、音節数を調節するためにそれを使用したり省略するといった必要性も生ずるであろうし、同時に音調やリズムの問題もそれには関連すると考えられる。従って他の散文作品についても検討の余地は残されていると思える。

[使用テキスト]

Marie de FRANCE, *Lais*, edited by Alfred EWERT, Basil Blackwell, Oxford, 1963.

1-3 付加形容詞の位置

La langue ancienne faisait très souvent précéder le nom de son épithète.⁴³⁾ と F. BRUNOT が述べている如く、古フランス語では名詞に先行する付加形容詞が頻繁に認められる。事実、*Mercilus hom est Charles.*⁴³⁾ のように多音節の形容詞が単音節の名詞を修飾する場合は、形容詞が前置されることがしばしばであった。しかし文章のリズムや調和に対する作者の感覚が時代の進行とともにより鋭敏になり、また前置・後置により形容詞の果たす役割が微妙な陰影を投げかけるようになると、その位置も当然不確定なものとなるのである。この点に関して A. DARMESTETER は「早くも12世紀に、形容詞が特別な注意を惹きつけ、特殊な品質を示す場合は名詞に対して後置された」⁴⁴⁾ と述べている。これとは別に、物理的な性質や外面的状況を表す形容詞はすでに後置の傾向があったよう⁴⁵⁾、中期フランス語の時期を通じて後置の傾向は強まっていったと思える。

一方、近代フランス語に目を転ずるならば、評価や心に浮かぶ概略的な印象を表現する形容詞、すなわち対象物の名称の一部をなすと見なされる形容詞は名詞に対して前置されることが多く⁴⁶⁾、国籍・宗教・色彩・形状等をあらわす形容詞は後置される傾向にあるが、前置、後置いずれの場合も認められる形容詞も少なくない。近代フランス語における

付加形容詞の語順は、一般に「意味・語呂・感情・慣習・個人的趣味・表現的意図など複雑な要素によって決定されるから、語順に関する絶対的な規則は立てがたい」⁴⁷⁾と考えられている。

この小論は古フランス語における付加形容詞の位置が、特に Marie de FRANCE の *Lais* でのような状況であるかを検討しようとするものであるが、近代フランス語に比し遥かに多様な語順が見られる古フランス語では、形容詞の位置に関しても、当然一定の規準など見出し難いのではないかと予測し得る。しかしどの作家にも筆法上の傾向や趣向といったものがあり、*Lais* についても形容詞の使用に関し、まったく無原則に作者がその位置を決定しているとは到底考えられず、そこには Marie 特有の流儀ないしは様式とでもいい得るものが存在するであろうとも思えるのである。この調査で、形容詞の位置が微妙な変化の兆しを見せようとする時代の用法の一端に探りを入れることができればと考える次第である。

*
* *

最初に、品質形容詞は *Lais* においてどのような位置に出現するのか、その位置に関する種々の類型を提示すると以下ようになる。

- ① adj. + nom (adj. + adj. + nom)
Quant ele ot faite plainte issi,
L'umbre d'un grant oisel choisi
Par mi une estreite fenestre. (*Yonec*, vv. 105-107)
'Sire', fait el, 'beau duz amis,
Une chose vus demandasse
Mut volenters, si jeo osasse ; (*Bisclavret*, vv. 32-34)
- ② nom + adj. (nom + adj. + adj.)
Desque ele sot cele aventure,
Paumee chiet a tere dure. (*Chaitivel*, vv. 143-144)
Quant il i ot un poi esté
E ele l'ot bien esgardé,
Chevaler *bel e gent* devint. (*Yonec*, vv. 113-115)
- ③ adj. + article + nom
Un poi de rasuagement
Li tolist auques la dolor
Dunt il ot *pale* la colur. (*Guigemar*, vv. 422-424)
- ④ adj. + verbe + article + nom
Bon ot le vent, tost est passez. (*Eliduc*, v. 704)
- ⑤ nom + verbe + adj. (nom + verbe + adj. + adj.)

Les oilz out *veirs* e bel le vis,

Bele buche, neis ben asis. (*Equitan*, vv. 35-36)

Le paille virent *riche* e bel. (*Le Fresne*, v. 208)

以上のような語順ないしはその変形が認められるが、本稿では品質形容詞が名詞に対して前置される①の語順、および後置される②の語順を特にとりあげ考察していくこととする⁴⁰⁾。

前置に偏る形容詞

Lais において特に頻出する形容詞は *grant*, *bon*, *bel* の3種であるが、これらは殆ど常に名詞に対して前置される。中でも前置の *grant* は168例存在し⁴⁹⁾、最も頻度が高い。

Par ceo se puet plus esloignier

E de *grant* dolur delivrer. (*Prologue*, vv. 26-27)

Cil oiselet par *grant* duçur

Mainent lur joie en sum la flur. (*Laiistic*, vv. 61-62)

'Dame', fet il, '*grant* gre vus sai

De vostre amur, *grant* joie en ai ; (*Eliduc*, vv. 519-520)

後置に見られる *garnt* はわずかにつぎの6例にすぎない。

Les peines *granx* e la tristur (*Guigemar*, v. 826)

Ad un haut munt merveilles *grant* : (*Les Deus Amanz*, v. 9)

Ensemble funt joie mut *grant*, (*Yonec*, v. 271)

En un'autre chambre plus *grant* ; (*Ibid.*, v. 382)

Entre eus meinent joie mut *grant*. (*Chevefoil*, v. 94)

Ensemble funt joie mut *grant*. (*Eliduc*, v. 1119)

上記6例からも明らかのように、*garnt* が名詞に対して後置される場合は、名詞との間に「程度」を示す副詞が介在する場合が多く、6例中3例は '*joie mut grant*' といった表現で出現し、*Yonec*, v. 271 と *Eliduc*, v. 1119 は完全に同一文であることも確かめられる。前置の '*grant joie*' 13例には副詞 *mut* の伴う事例が1例のみであることを考慮すると、ここに見られる '*joie mut grant*' は特に大きな「歓喜」を表現するものといえるかもしれない。

grant が修飾する主要な名詞は *joie* 18例、*dolur* 11例、*honor* 10例、*doel* 9例、*bien* 8例、*pris* 8例、*poür* 7例、*peine* 6例等となっていて、これら8種の名詞で40%を超える。歓喜、恐怖、苦悩など感情や精神状態を示す抽象名詞との結合が緊密である。

grant について頻出する形容詞は *bel* であり、この場合も約10対3の比率で前置が好まれる。前置は49例。

'Lanval', fet ele, '*beaus* amis,

Pur vus vienc jeo fors de ma tere ; (*Lanval*, vv. 110-111)

Un *bel* cheval li ad doné. (*Le Fresne*, v. 24)

Par fei, jeo ne me merveil mie,

Quant si *bele* femme est perie. (*Eliäus*, vv. 1025-1026)

後置の *bel* も 15 例存在することから、前置に偏る傾向は *grant* ほど強くない。しかし *bel* が後置される場合はつぎに例示する如く、それが他の付加形容詞と併用されている事例が顕著である。

E dames truvoënt amanz

Beaus e curteis, pruz e vaillanz, (*Yonec*, vv. 97-98)

En une vile riche e *bele*

Est entree la dameisele. (*Le Fresne*, vv. 149-150)

bel が単独で後置されている例はつぎの 5 例のみである。

De sa moillier out deus enfanz,

Un fiz e une fille *bele*. (*Guigemar*, vv. 34-35)

Ele jut sur un lit mut *bel* (*Lanzal*, v. 97)

Li reis ot une fille *bele* (*Les Deus Amanz*, v. 21)

Il aveit une fille *bele*, (*Milun*, v. 23)

La meschine ot un fiz mut *bel*. (*Ibid.*, v. 95)

ここでも用例は僅少値を示すにすぎないが、同一の表現が多くの割合を占める点は前述の *grant* 後置の場合と類似の様相を呈している。

以上 64 例の *bel* が結合する被限定名詞は *ami(e)* 10 例、*semblant* 8 例、*dame* 5 例、*chevaler* 5 例等となっており、人物を示す具象名詞が多く見られる。また呼格として使用されている 15 例の *bel* はすべて前置である。

頻度第 3 位の付加形容詞は *bon* であり、59 例中 57 例が前置で現れる⁵⁰⁾。

Milun i est alé primers,

Que mut esteit *bons* chevalers.

Le *bon* chevaler demanda; (*Milun*, vv. 391-393)

Sa meschine apelat a sei,

Brenguein, que fu de *bone* fei. (*Cherefoil*, vv. 89-90)

Bon vent eurent e *bon* oré

E tut le tens aseüré. (*Eliäus*, vv. 813-814)

bon が後置されている例は下記 2 例のみであり、しかもこの両例は他の形容詞と併用されている事例であることから、*bon* の単独後置は極めて稀なものであろう。

Beaus chevalers e *bons* esteit

E noblement se cunteneit. (*Bisclavret*, vv. 17-18)

Tuz les aveirs de sa meisun

Li met li reis en abaundun,
Or e argent, chiens e chevaus

E dras de seic *bons* e beaus. (*Eliduc*, vv. 643-646)

なお *bon* が修飾する名詞で主要なものを列挙すると、*chevaler* が10例、*fei* が4例、*oré*、*merci* が各3例等となっており、*chevaler* とはかなり頻繁に結合するが、それ以外にも広範囲に種々の名詞を修飾している。

以上3種に続く頻度の形容詞は *riche*、*haut* であり、殆ど常に前置される。

Li *riches* hum requide bien
Que nuls ne li toile s'amie
Qu'il volt amer par seigneurie. (*Equitan*, vv. 146-148)
En Salerne ai une parente,
Riche femme, mut ad grant rente; (*Les Deus Amanz*, vv. 95-96)
Riches hum est de *haut* parage,
Mes mut par est de grant eage; (*Guigemar*, vv. 341-342)
Bien surent cil tut a sciënt
Que ele est nee de *haute* gent. (*Le Fresne*, vv. 209-210)

頻度5位までの形容詞は、これまでに検討した如く大きく前置に偏る傾向を持つが、これらに加えて *lung*⁵¹⁾、*vieil*、*dreit*、*duz*、*scint*、*gentil*、*vilain*、*mauveis* などが *Lais* では前置の傾向が強い。

Li dras esteit d'un *vieil* bofu; (*Le Fresne*, v. 399)
Ceo est russignol en franceis
E nihtegale en *dreit* engleis. (*Laiistic*, vv. 5-6)
Conseillez me, ma *duce* amie! (*Guigemar*, v. 458)
Un *seinz* hermites i maneit (*Eliduc*, v. 891)
Mut par esteient de grant pris
E *gentiz* hummes del país. (*Chaitivel*, vv. 39-40)
Jo sui chei' en *maués* pleit: (*Eliduc*, v. 338)
Trop començastes *vilein* plait (*Lanval*, v. 364)

後置に偏る形容詞

近代フランス語と同様に古フランス語においても、使用頻度の高い形容詞は前置される傾向が強いことは前述したとおりであるが、後置に偏る形容詞は当然使用回数が少ないため、その実態を捉えることが困難となる。*Lais* に関する限りは頻度は低い *leal*、*entier*、*dolent*、*omnipotent* などが後置に偏る傾向を見せている。

leal は5例すべてが後置で使用されている。

Equitan ot un seneschal,
Bon chevaler, pruz e leal; (*Equitan*, vv. 21-22)
Meuz vaut un povres hum leals, (*Ibid.*, v. 138)
Li chamberlenc que ele apelot
Li ad duné cunseil leal; (*Eliduc*, vv. 352-353)
Femme leale espuse avez
E sur celē autre en menez
Cuntre Deu e cuntre la lei, (*Ibid.*, vv. 835-837)
Bele, ja fuissiez vus reïne,
Ne fust l'amur leale e fine
Dunt vus m'amastes lēaument. (*Ibid.*, vv. 943-945)

entier についても、an, meis, jurs とともに用いられ、「期間」を表現する場合のみの使用であるが、常に後置で認められる。

Ensemble od eus ad sujurné,
Ceo m'est avis, un meis entier. (*Guigemar*, vv. 74-75)
Mes d'une chose ert grant ennui,
Que en la semeine le perdeit
Treis jurs entiers, que el ne saveit
U deveneit nē u alout, (*Bisclavret*, 24-27)
Issi remist un an entier,
Tant que li reis ala chacier; (*Ibid.*, vv. 135-136)
Un an entier l'ad retenu
E ceus ki sunt od lui venu, (*Eliduc*, vv. 267-268)

dolent は quor、omnipotent は Deu との結合においてのみの使用であるが、すべて後置で出現する。

Sa femme en ot le queor dolent, (*Eliduc*, v. 718)
Mut ai pur vus mun quor dolent. (*Ibid.*, v. 946)
Mut ai pur lui mun quor dolent; (*Ibid.*, v. 1094)
E prie Deu omnipotent
Qu'il li dunast hastive mort (*Guigemar*, vv. 624-625)
Pur amur Deu omnipotent,
Di mei cument ad nun tun pere! (*Milun*, v. 436-437)
Ensemble od eus se dune e rent
Pur servir Deu omnipotent. (*Eliduc*, vv. 1163-1164)

主として騎士の勇壮さ、逞しさを強調するために使用される pruz, vaillant, fier といった形容詞は *Lais* においては後置されることが多い。しかしこれらは相互に、ないしは他の形

容詞とともに1つの名詞を修飾すべく併用されている事例が殆どであり、単独後置の例は極めて稀である⁵²⁾。

Mes mut erent de grant beauté
E chevalers *pruz* e *vaillanz*,
Larges, curteis e despendanz ; (*Chaitivel*, vv. 36-38)
En Bretaine ot un chevalier
Pruz e curteis, hardi e *fier* ; (*Eliduc*, vv. 5-6)
Tant produerne *vaillant* e sage
Unt asaié icel afaire (*Les Deus Amanz*, vv. 152-153)
Mut par esteit bons chevaliers
Francs e hardiz, curteis e *fiers*, (*Milun*, vv. 13-14)

国名・地名に関する形容詞も近代フランス語と同様に後置される。

Le covertur tut sabelin
Vols fu du purpre *alexandrin*. (*Guigemar*, vv. 181-182)
Covert de purpre *alexandrine*, (*Lanval*, v. 102)
Quant il ierent en cel esfrei,
Deus puceles de gent cunrei ----
Vestues de deus pailles freis,
Chevauchent deus muls *espanneis* ----
Virent venir la rue aval. (*Ibid.*, vv. 509-513)
De un mut ancien lai *bretun*
Le cunte e tute la reisun
Vus dirai, si cum jeo entent
La verité, mun escient. (*Eliduc*, vv. 1-4)

形容詞的に用いられた現在分詞および過去分詞も殆ど常に後置される。

La neif virent al flot *montant*, (*Guigemar*, v. 267)
L'ewe *buillant* feit apoter,
U li senescal dut entrer. (*Equitan*, vv. 275-276)
Sur une ewe *curaunt* descent ; (*Lanval*, v. 45)
Un chevaler *dormant* trova, (*Yonec*, v. 380)
Jamés n'avra humme *vivant*. (*Eliduc*, v.517)
Del sanc trova l'erbe *muilliee*,
Dunc s'est ele mut *esmaiee* ; (*Yonec*, vv. 357-358)
Al chief, as piez e as costez
Aveit vint cirges *alumez*. (*Ibid.*, vv. 501-502)
En Seint Mallo en la cuntree

Ot une vile *renumee*. (*Laiistic*, vv. 7-8)

偏りの小さい形容詞

Lais において、ある程度の使用回数があるとともに、前置、後置いずれにおいても用いられる形容詞は極めて限られたものとなるが、その主なものは *novel* と *fin* であろう。

novel については前置 2 例、後置 5 例とやや後置が優勢である。

[前置] Lors suspirat ; en poi de tens

Li est venu *novel* purpens, (*Guigemar*, vv. 407-408)

Tristram, ki bien saveit harper,

En aveit fet un *nuvel* lai ; (*Chevrefoil*, vv. 112-113)

[後置] Flur de lis e rose *nuvele*,

Quant ele pert al tens d'esté,

Trespasot ele de beauté. (*Larval*, vv. 94-96)

La dame est en la vile entree

Tuz jurs après le sanc *novel*

Par mi le burc deske al chastel. (*Yonec*, vv. 372-374)

Darne, fetes le lai *novel*,

Si l'apelez Le Chaitivel ! (*Chaitivel*, vv. 207-208)

La turnbe *novele* trova. (*Eliduc*, v. 919)

Quant en la chapele est entree

E vit le lit a la pucele,

Que resemblot rose *nuvele*, (*Ibid.*, vv. 1010-1012)

G. MOIGNET はその著 *Grammaire de l'ancien français* で、*La Queste del Saint Graal* の同一文中における *nouveau* の前置、後置両例を引用し、その相違をつぎのように指摘している⁵³⁾。

Je nel sai mie très bien, fet Lyonel, fors tant que ce est cil qui hui a esté *noviax chevaliers*, que messire Lanclot fist hui *chevalier novel* de sa main.

MOIGNET によれば、前置 *noviax chevaliers* は *opératif* な特色を有し、*noviax* が殆ど副詞的な価値 (*nouvellement chevalier*) を持つのに反し、後置 *chevalier novel* は *résultatif* な特色 (*chevalier ayant le caractère de nouveau*) を有すると論じている。MOIGNET のいう *opératif* および *résultatif* の相違は、ある結果を生ずるに至る行動ないしは過程に着眼しているのか、もしくは結果のほうに力点があるのかの相違であろうが、このような観点から前掲 Marie の用例を考察すれば、前置の *novel* 2 例は、「すこしたって、彼には新たに考えが浮かんだ」(*Guigemar*, vv. 407-408) 「豎琴を見事に奏でることのできるトリスタンは、それをもとに新たに歌物語をつくったのである」(*Chevrefoil*, vv. 112-113) となり、後置 5 例は、「みずみずしいバラ・・・」(*Larval*, v.94, *Eliduc*, v. 1012)、「その鮮血の跡をたどり・・・」(*Yonec*, v. 373)、「その新しい歌物語を・・・」(*Chaitivel*, v. 207)、「その真新しい墓石を

・・・」(*Eliduc*, v. 919) といった解釈が成立し、MOIGNET の指摘の正当性が窺える。しかしこのような見方はすべての形容詞に適用し得る訳ではない。 *Lais* における *fin* は前置3例、後置3例と相拮抗した数値を示すが、それらの間には微妙な差異など見出し難いといえる。

〔前置〕 *Deus chandelabres de fin or* ----

Le pire valeit un tresor ----

El chief de la nef furent mis ; (*Guigemar* ; vv. 183-185)

De fin or i aveit un' unce ; (*Le Fresne*, v. 129)

Cil ne sunt mie fin curteis, (*Equitan*, v. 151)

〔後置〕 *De or fin erent li chandelier*, (*Yonec*, v. 503)

Tut fu de or fin od bones pieres,

Mut precieuses e mut chere ; (*Laüstic*, v. 151-152)

Ne fust l'amur leale e fine

Dunt vus m'amastes l'aument. (*Eliduc*, vv.944-945)

人物、事物の高貴、華麗、優雅な様子を示す形容詞 *cher*, *curteis*, *gent*, *franc*, *sage* は前置、後置いずれの位置にも現れる。しかしこれらの形容詞にほぼ共通した特徴は、単独で使用される場合は前置、他の形容詞と併用されると後置になる傾向が強いということである。

〔前置〕 *Ma chiere dame, a vus m'otrei* ! (*Equitan*, v. 169)

Asez li fait curteis respuns ; (*Milun*, v. 33)

Mut i aveit gent dameisel. (*Ibid.*, v. 295)

La dame aveit une meschine,

Que mut esteit de franche orine ; (*Le Fresne*, v. 99-100)

Sages mires aveit mandez, (*Chaitivel*, v. 173)

〔後置〕 *El li respunt : 'Bel sire chiers*, (*Guigemar*, v. 337)

Une dame de haut parage,

Franche, curteise, bele e sage ; (*Ibid.*, vv. 211-212)

Mut ot le cors bien fait e gent ; (*Lamal*, v. 100)

色彩・明暗を示す形容詞

MOIGNET は、*Les adjectifs signifiant les couleurs sont le plus souvent postposés.*⁵⁴⁾ と述べ、*vermeil* や *oscur* の例を引くとともに、*blanc* については逆に前置される傾向のあることをすでに指摘している。Marie の使用する色彩関係の形容詞は少数であり、その特徴を把握することは困難であるが、*blanc*, *vermeil* については前置、後置がほぼ均衡を保っている。

〔前置〕 *De ciprés e de blanc ivoure* ; (*Guigemar*, v. 174)

Une blanche bise feri, (*Ibid.*, v. 317)

Un cher mantel de *blanc* hermine, (*Lanval*, v. 101)

Un *blanc* palefrei chevachot, (*Ibid.*, v. 551)

Envolupé d'un *blanc* lincel; (*Milun*, v. 100)

Od ses denz ad prise une flur,

Tute de *vermeille* colur; (*Eliduc*, vv. 1047-1048)

〔後置〕 A un bel drap de cheisil *blanc*

Li osterent entour le sanc; (*Guigemar*, vv. 371-372)

De chainsil *blanc* e de chemise, (*Lanval*, v. 560)

Le col plus *blanc* que neif sur branche, (*Ibid.*, v. 564)

Uns vielz prestres *blancs* e floriz

Guardout la clef de cel postiz; (*Guigemar*, vv. 255-256)

Li sanc *vermeil* en cissi fors. (*Yonec*, v. 312)

vert については、僅少 2 例のみであるが、いずれも前置されている。

Le travers del bois est alez

Un *vert* chemin ki l'ad menz

Fors a la laundë; (*Guigemar*, vv. 145-147)

De *vert* marbre fu li muralz, (*Ibid.*, v. 221)

特に後置に偏る色彩関係の形容詞は *bis* であり、5 例すべてが後置で現れる。

En une tur de marbre *bis*. (*Guigemar*, v. 659)

En deus blians de *purpre bis*; (*Lanval*, v. 59)

Sis manteus fu de *purpre bis*; (*Ibid.*, v. 571)

Fors de la sale aveient mis

Un grant perrun de marbre *bis*, (*Ibid.*, vv. 633-634)

N'i aveit bare ne devise

Fors un haut mur de pierre *bise*. (*Laüstic*, vv. 37-38)

その他この種の形容詞では、*brun*, *blunt*, *vair*, *chanu* など僅少数の用例が後置で認められる。

Les surcilz *bruns* e bel le frunt

E le chef cresp e aukes *blunt*; (*Lanval*, vv. 567-568)

Les oilz *vairs* e la bele buche, (*Guigemar*, v. 415)

Desuz la ventaille choisi

La barbe e les chevoz *chanuz*; (*Milun*, vv. 422-423)

De cendal *purpre* sunt vestues

Tut senglement a lur char nues. (*Lanval*, 475-476)

色彩・明暗を示す形容詞の位置に関しては、全体的に見て微妙に揺れ動く不安定な状態を提示しているものの、やや後置優勢の兆候が認められる。

*
*
*

MOIGNETによると、古フランス語における品質形容詞の位置はかなり明確な意味を保持しており、前置および後置に応じて別なる機能を果たしているようである。MOIGNETはつぎのように論じている。

Antéposé, l'adjectif signifie une qualification précoce qui classe le substantif, avant sa définition précise, dans certaines catégories générales : grandeur, valeur, puissance, beauté, cadre affectif, rang social, âge, sainteté, légitimité, etc. Les adjectifs le plus couramment antéposés sont *grant, petit, bons, maus, beaux, hauts, riches, gentils, sains, vieux, jeunes, mestre, droitz, chiers*, etc. Ces mots fonctionnent comme des sortes de classificateurs. (...)

Postposé, l'adjectif apporte au substantif une caractérisation tardive, le plus souvent particularisante.⁵⁵⁾

Lais に用いられている付加形容詞を頻度順に使用位置との関係で整理すると表1—3.1のようになる。

	単 独 使 用		併 用		TOTAL
	前 置	後 置	前 置	後 置	
grant	166	5	2	1	174
bel	41	5	8	10	64
bon	50		7	2	59
riche	19		3	2	24
haut	11		1		12
curteis	3		1	6	10
lung	8	1		1	10
vieil	5		2	3	10
blanc	5	3		1	9
dreit	9				9
duz	7		2		9
pruz	1			8	9
vallant	1	1		6	8
cher	2	1	2	2	7
gent	3			4	7
nuvel	2	5			7
(以下省略)					

(表1—3.1)

この結果、頻度5位までの形容詞および lung, vieil, dreit, duz はかなり前置に偏ることが認められるが、これらはまた MOIGNET が 'classificateurs' として列挙する形容詞ともほぼ符

合することも確認し得る。総じて使用頻度の高いものほど前置を好む現象は近代フランス語と同様であるが、古フランス語の場合、これら前置を好む形容詞も、他の形容詞と併用されると後置に回る傾向がある。しかもこの傾向は形容詞により強弱があり、Marie の場合、この傾向の強い形容詞は *bel, curteis, pruz, vaillant, gent, vieil* であり、弱いもの、すなわち併用の場合でも位置があまり影響されない形容詞は *bon, duz* であることも認め得る。

後置を好む形容詞に関しては用例数が僅少であり、また 'quor dolent' や 'Deu omnipotent' に代表される如く特定の名詞との結合が目立ち、実態の把握が困難である。これについては作家や作品の枠を拡大して考察しなければならない問題であろうが、*Lais* に関する限りは、*leal, entier, bis* および国名・地名を示す形容詞、また形容詞的に使用されている現在分詞や過去分詞などが明白に後置への偏りを見せている。

古フランス語における付加形容詞の位置に関して前置が好まれる事実は、すでに多くの研究者が指摘するところであるが、Marie についてもやはり前置優勢の傾向は確認できる。しかし後置で使用されている形容詞は、実例数が少ないにもかかわらず、多様性に富み、さまざまな意味の分野に広く分布している。この現象が後置形容詞の「より詳細な定義づけの機能」と不可分の関係にあるように思えるのである。最後に *Lais* が韻文である以上、韻律上の要因も当然形容詞の位置に影響しているものと考えられる。従って散文に關しても検討の余地は残されているであろう。

〔使用テキスト〕

Marie de FRANCE, *Lais*, edited by Alfred EWERT, Basil Blackwell, Oxford, 1963.

1-4 非強勢代名詞の位置 —— 特に疑問文の場合 ——

近代フランス語における補語人称代名詞の位置に関しては、肯定命令文の場合を除き、動詞に対して前置されるという規則が確立していることは周知のとおりである。しかし古フランス語についてみると、その位置はかなり複雑であり、断定文、命令文、疑問文など個々の事例に分類して考察する必要があると思える。ここでは特に疑問文における非強勢代名詞にのみ限定し⁶¹⁾、その位置が時代や作品によりどのように変化するのか、若干の資料をもとに検討を加えてみたい。もとより調査範囲が限られているため、古フランス語における非強勢代名詞の位置に関する完全なる記述は望むべくもないが、当時の傾向の一端を窺えればと思う次第である。なお考察の対象としたテキストは以下に示す11作品である。

La Chanson de Roland

Les romans de Chrétien de TROYES

I *Erec et Enide* II *Cligés* III *Le Chevalier de la Charrete*

IV *Le Chevalier au Lion (Yvain)*

Floire et Blancheflor

La Prise d'Orange

Aucassin et Nicolette

La Queste del Saint Graal

Guillaume de LORRIS et Jean de MEUN, *Le Roman de la Rose*

Lancelot

*
* *

本論に入る前に古フランス語の断定文における非強勢人称代名詞の位置についてまず触れておく必要があると思えるが、Philippe MÉNARD はこれに関連してつぎのように述べている。

Les pronoms personnels ont une syntaxe très différente selon qu'ils appartiennent à la série atone ou à la série tonique. Les formes atones, qu'elles soient enclitiques ou proclitiques, ne peuvent se séparer du verbe. Généralement, elles *précèdent* le verbe.⁵⁷⁾

すなわちこの点に関しては、古フランス語でも近代フランス語同様、動詞に対しての前置が一般的な語順であるといえよう。ただ代名詞が不定法の補語である場合は、主動詞と不定法が一体をなすものと見なされ、それは通常、不定法の前ではなく主動詞の前に置かれるのである。

Quand un pronom personnel est complément direct ou indirect d'un *infinitif* qui est lui-même *régime d'un autre verbe*, l'usage constant en ancien français est de placer le pronom non pas devant l'infinitif, mais devant le verbe qui le régit.⁵⁸⁾

疑問文の場合、非強勢人称代名詞はどのような位置を占めるのであろうか。まず Ferdinand BRUNOT の見解を以下に引用してみよう。

Dans les phrases interrogatives, quand l'interrogation porte sur le verbe, le pronom se place généralement après : (. . .)

Lorsque l'interrogation est introduite par un pronom ou un adverbe interrogatif, l'usage est de placer le pronom personnel régime avant le verbe.⁵⁹⁾

BRUNOT は疑問詞を伴わない疑問文と、疑問詞により導入される疑問文を区別し、前者の場合は通常後置、後者の場合は前置と規定している。当報告において調査した作品についても、疑問詞のある疑問文は BRUNOT の指摘どおり、時代の新旧を問わず前置されている。

E! malvais deus, porquoi *nus* fais tel hunte? (*Roland*, v. 2582)

Et quant *le* porrons nos avoir? (*Yvain*, v. 1822)

Ha ! *biax* sire, fait *li* rois, que *me* demandés vos? (*Aucassin*, XXX-5)

A qui *m'en* puis je pleindre, a qui,

fors a vos, filz, que j'ai tant chier? (*Rose*, vv. 12846-47)

Coment *li* forferoit on? fait mes sire Yvain. (*Lancelot*, LXXX-21)

そこで問題となるのは疑問詞のない疑問文であるが、以後はこれに関して検討を進めてみよう。まず古フランス語では近代フランス語の語法とは異なり、なぜ疑問文中の補語人称代名詞がしばしば後置されるのであろうか。これは疑問文において好まれる語順、および非強勢人称代名詞を文頭に置くことを回避しようとする古フランス語特有の傾向と関連していることは明白である。

Il peut arriver que, par suite de l'*ellipse* ou de l'*inversion* du sujet, la forme faible du pronom, qui vient normalement après un pronom personnel sujet, un démonstratif, un relatif, un interrogatif, un indéfini, un substantif sujet ou régime, ou un adverbe, doit se trouver en tête de la phrase, ou à une reprise importante de la phrase. Or, la langue a longtemps répugné à accepter cette conséquence. Pour éviter de faire tomber sur le pronom un accent trop marqué, on préférerait le transposer après le verbe.⁶⁰⁾

考察の対象としたテキストの中でも、制作年代が最も古い時期に属する *La Chanson de Roland* (1100年前後)などは、少数例ながら後置が優勢である。

Puis *m'en* cumbatre a Carle e a Franceis? (*Roland*, v. 566)

Sire cumpain, faites *le* vos de gred? (*Ibid.*, v. 2000)

Ferut *vos* ai? car *le* me pardunez ! (*Ibid.*, v. 2005)

上記 v. 2005 の用例は文頭の過去分詞と助動詞の間に被制格代名詞が置かれているものであるが、複合時制では助動詞を基準として代名詞の位置を考慮すべきものであろうから、このような事例は前置と見なすことができよう。

12世紀後半に編まれたと目されるの Chrétien de TROYES 4 作品について調査すると、前置と後置が相拮抗した数値を提示している。

前置 : 27例 (*Erec* : v. 1110, 2590, 3338. *Cligés* : v. 683, 691, 4423, 4591, 4611, 5753. *Charrete* : v. 497, 778, 1689, 1689, 1711, 1792, 2004, 2853, 3296, 3859, 4214, 4232, 5035, 5334, 6820. *Yvain* : v. 1623, 1999, 5995.)

Ne *me* deigneriez amer,

dame? fet il : trop estes fiere. (*Erec*, vv. 3338-39)

Ja n'i pert il ne cop ne plaie,

E si *m'an* plaing? Don n'ai ge tort? (*Cligés*, vv. 683-83)

--- Ce verroiz vos, fet il, par tans.

--- *Jel* verrai? --- Voire. (*Charrete*, vv. 496-97)

E or donc ne s'antr'ainment il? (*Yvain*, v. 5995)

Chrétienに見られる前置の27例を更に詳細に検討すると、20例までが否定文であり、残余の7例についても主語あるいは副詞の *si* が文頭ないしは節のはじめに置かれていて、常になんらかの要素が非強勢代名詞を文頭から保護していることが確かめられる。しかし否定辞の *ne* には、まだ文頭を保護する要素としての機能が十分に備わっていないようであり、前掲 *Erec*, v. 3338 に見られるような否定疑問文はむしろ少なく、多くは前掲 *Yvain*, v. 5995 のように *donc* などの副詞が *ne* を補強する要素として併用されているか、もしくは *nel*, *n'en* といった contraction や *élision* を伴う形が認められるようである。

Nel savez? Nel veez vos donques? (*Charrete*, v. 1689)

N'en avez vos eü message

de la dameisele sauvage

qui letres vos en anvea? (*Yvain*, vv. 1623-25)

後置: 25例 (*Erec*: v. 1114, 1746, 3728, 5375. *Cligés*: v. 485, 496, 671, 949, 989, 1373, 5135, 5135, 6226. *Charrete*: v. 1922, 2107, 2865, 3441, 4072, 5141, 6834. *Yvain*: v. 1458, 3880, 4599, 6671, 6703)

Dirai li donc tot en apert? (*Erec*, v. 3728)

Doi les an ge blasmer? Nenil. (*Cligés*, v. 496)

Mes por Deu, savriez me vos

dire por coi ele me het? (*Charrete*, vv. 4072-73)

E avez li vos dit de moi

qui je sui? (*Yvain*, vv. 6703-04)

この結果 Chrétien では、前置と後置が接近した数値を示しているとはいえ、前置の用例はすべて文中のなんらかの要素（多くの場合は否定辞の *ne* または文の主語）が被制格代名詞に先行している事実を考慮すると、むしろその様相は *Roland* に類似したものであるといえよう。

古フランス語の非強勢代名詞が特に文頭を回避する傾向は、*Roland* や Chrétien の諸作品における疑問文の調査結果にも顕著に示されていることを確認したが、このような傾向は特に古い時期に編まれたテキストに端的に現れるようであり、疑問文における非強勢代名詞の位置も13世紀頃を境として、徐々に後置から前置へと変化していくようである。

En phrase interrogative, le pronom régime est le plus souvent postposé, mais on le rencontre antéposé à partir du XIII^e siècle.⁵¹⁾

つぎに12世紀末から13世紀にかけての作品に調査対象を移行して考察してみることとする。まず *Floire et Blancheflor*, *La Prise d'Orange*, *Aucassin et Nicolette* の3作品については、該当する用例が極端に少なく、判断の資料とするには不十分であるといわざるを得ないが、調査結果に基づく数値と文例を以下に示してみよう。

Floire et Blancheflor

前置：1例

S'en iront ainsi cele gent? (v. 3371)

後置：2例

--- *Mande me il?* --- *Ooïl, par foi.* (v. 470)

Avez en vos pris nul conroi? (v. 2480)

La Prise d'Orange

前置：4例

Te tindrent onques Sarrazin en prison? (v. 216)

Ou est sa feme? la nos mosterez vos? (v.528)

Ja vos ot il en sa prison rüé? (v.576)

Voir, dit Guillelmes, or ne l'amez vos mie? (v. 631)

後置：2例

Dist Arragons: "Diz me tu verité?" (v. 766)

Iras i, frere?" dit Guillelmes le franc; (v. 1431)

上記の2作品はいずれも12世紀末に成立したものとされるが、前置例を検討すると *Orange*, v. 576, v. 631 を除き、代名詞に先行する要素のない構文が使用されている。ただし *Orange*, v. 528 は代名詞 *la* が行のはじめに位置しているのではなく、その前の文 (*Ou est sa feme?*) が文頭を保護する要素として機能しているものと解釈することも可能であろう。しかしこれらのテキストには中期フランス語的語順へと移行する前兆をすでに認めることができる。

Aucassin et Nicolette

前置：4例

Enne m'eustes vos en covent que, quant je pris les armes et j'alai a l'estor, que, se Dix me ramenoit sain et sauf, que vos me lairiés Nicolete ma douce amie tant veir que j'aroie parlé a li deus paroles ou trois? (X-47)

Je li dirai? fait cil qui plus fu enparlés des autres; (XVIII-23)

Bel enfant, fait Aucassins, enne me conssiés vos? (XXII-10)

Ba! me conssiés vos? fait Aucassins. (XXIV-34)

後置：3例

Avés le me vos tolué ne enblee? (VI-9)

Avoi! pere, avés les vos oblices? (X-45)

plairoit vos oïr un son

d'Aucassin, un franc baron,

de Nicholette la prous? (XXXIX-16)

Aucassin における前置4例については代名詞に先行する要素がすべて存在し、疑問文の

構成はむしろ Chrétien に近いといえる。テキストの校訂者 Mario ROQUES は作品の制作年代を推定するにあたり、このことにも触れている：

Certaines formes ou tours paraissent relativement modernes, ainsi la forme *afferriés* (XXV 14) avec *-iés* monosyllabique, (...); ou bien la construction *ba ! me conmissiés vos* (XXIV 34) avec la forme faible du pronom en tête de la proposition ; mais l'interjection *ba* a pu entraîner cette construction, qui d'ailleurs se rencontre dans le *Saint Nicolas* de Jean Bodel, par conséquent dès les toutes premières années du XIII^e siècle, et qui a dû être employée en prose, surtout dans le langage parlé, avant d'être admise dans la littérature en vers.⁶²⁾

13世紀初頭の散文作品 *La Queste del Saint Graal* に目を転ずるならば、すでに前置の事例が後置を上回る結果が認められる。しかしここでもまだ13例の前置のうち、代名詞に先んずるなんらの要素も存在しない用例は僅少3例を数えるに過ぎず、やや古い形式の踏襲を窺わせる。

前置：13例（1-22, 18-19, 44-12, 77-31, 92-2, 92-11, 97-32, 98-11, 109-25, 168-29, 194-32, 197-8, 233-10）

Ha ! mesire Galaad, *me* lairez vos dont ci? (44-12)

En non Dieu, firent il, donc *se* metroit en trop grant peril qui s'i aseroit? (77-31)

Vos avoie je riens meffet por quoi vos la deussiez mener a mort? (97-32)

Perceval, ne *m'en* feroiz vos plus? (98-11)

Le me creantez vos, fet ele, come loiaux chevaliers? (109-25)

Sire, fet Hestor, *vos* a donc li chevaliers bleicié ainsi come vos dites? (197-8)

後置：5例

Ha ! Diex, faudra *me* ja mes ceste dolor? (58-22)

E li preudons li dist : "Conois *la* tu?" (112-17)

Biax amis, fet messires Gauvains, savriez *nos* vos ici pres enseignier ne hermitage ne religion? (151-29)

Coment? fet Lyonel, volez *le* vos rescorre? (191-5)

Ha ! Boort, lairez *m'i* vos morir? (192-16)

13世紀に2人の作者により書かれたとされる *Le Roman de la Rose* になると、韻文ではあるがかなり中期フランス語的構成法が顕著に現れてくる。すなわち5例の後置例に対して17例の前置例が存在し、先行要素ゼロの前置例は5例にのぼる。

前置：17例（v. 2894, 3262, 4015, 4133, 5235, 5705, 5801, 7808, 8523, 11383, 11955, 12222, 16403, 16449, 16450, 16479, 20864）

S'Amors le tient pris en ses giez

et le fet a vos obeïr,

l'en devez vos por ce haïr? (vv. 3260-62)
Courtoisie me fist il? (v. 4133)
Ne te sovient il pas d'Orace,
qui tant ot de sen et de grace? (vv. 5705-06)
Leur apparaille il si bons gages
aus fols dom il prent les homages? (vv. 5801-02)
Vos ai je por ce retenu,
por moi dire honte et ledure? (vv. 12222-23)
En volez vos meilleurs hostages? (v. 16450)

後置：5例

Doivent se il ci arester? (v. 2297)
S'Amors le fet par force amer,
devez l'en vos por ce blasmer? (vv. 3247-48)
Sez en tu le mean eslire
qui te puist aidier et soffire? (vv. 4205-06)
Quenois le tu point? --- Oil, dame. (v. 4223)
Quenois le tu de plus? (v. 4228)

21750行に達するこの長編で、古い語法とされる後置の用例が、すべて冒頭から4200余行の間に集中していることも興味深い。使用したテキストの校訂者 Félix LECOY は Guillaume de LORRIS が4027行までを執筆し、以後は Jean de MEUN の手になるものと想定しているので、後者のごく最初の部分にも後置例は見られるのであるが、作品の後半80%を占める部分にはまったく使用例がない。しかし執筆年代にかなりの間隔があるといわれるこの作品の前後の2部分について、語法上このような差異が存在するとしても、それはむしろ当然のことといえよう。

La Queste del Saint Graal と制作時期において殆ど開きはないであろうと考えられる13世紀の散文小説 *Lancelot* を検討すると、Tome I, II では54例中13例の後置が認められるのに比し、Tome IV, V では48例中、後置の出現は4例の僅少値を示すに過ぎない。各巻に見られる用例数は以下のとおりである。

	Tome I	Tome II	Tome IV	Tome V	TOTAL
前置	6	35	27	17	85
後置	3	10	3	1	17

(表1—4.1)

前置：85例 (II-12, III-7, VII-11, XXIX-17, XXXI-1, XXXII-13, XXXVI-12, 32, XXXVII-10, XXXVIII-40, XXXIX-15, XL-5, 15, 16, XLIV-11, 20, XLV-1, 39, 41,

XLVII-14, 16, XLVIII-28, XLIX-34, L-5, 19, 19, 42, LIII-9, LIV-36, LVI-2, LVII-4, LXI-18, 20, LXII-9, 9, LXV-13, LXVII-5, 9, 19, LXVIII-5, LXIX-13, LXXI-8, 8, 9, 16, 18, 29, 31, 33, 33, 34, LXXII-20, 33, LXXVI-9, 17, LXXVIII-20, 43, LXXIX-16, 30, LXXX-10, LXXXI-11, 27, LXXXIII-18, 42, 65, 75, LXXXIV-20, 47, LXXXVI-11, 11, 13, LXXXVIII-3, 15, 18, 30, XCI-10, 25, XCIII-47, XCIV-7, XCV-18, 28, 31, XCVI-14, XCIX-17, 29)

Sire, *me* covendra il dire ces lettres en oiance? (III-7)

Ne *vos* combatrois vos plus a moi? (XL-16)

Me creantés vos loialment, fet cil, que vos en ferois vostre puissance? (LXVII-5)

Ha, dame, fait il, nus estranges hons *le* porroit il amander? (LXXI-18)

Le me feriez vos donc a force? (LXXI-33)

Dame, *vos* souvient il del couvenant que nos eusmes entre moi et vos? (LXXVIII-43)

Vos atandrons nos, sire? font li chevalier. (LXXXVI-13)

Biaux amis, *nos* savroies tu enseingner le millor ostel de la vile? (XCV-31)

後置 : 17例 (XVI-11, XXX-9, XXXIII-2, XXXVI-10, 24, XXXVII-1, 8, 10, 24, XXXIX-21, 37, XLI-2, 3, LXXI-27, 61, LXXVIII-42, XCIX-31)

Avoi, sire chevaliers, leisserois *me* vos issi? (XXXIII-2)

Creantes *le me* tu? fet Lancelos. (XXXVI-24)

Otroiez *me* vos, fet ele, vostre amor? (XLI-3)

Ha, sire, fait la dame, poise *vos* il donques? (LXXVIII-42)

Connoissiez *me* vos? (XCIX-31)

Alexandre MICHA 校訂によるこのテキストについては、使用された写本や作品の成立時期に関して Tome I, II および IV, V の間にどのような相違があるのか、更に検討を加えなければならないが、疑問文中に見られる非強勢代名詞の位置に関する限りはかなりの差異が認められる。すなわち後置の出現頻度を比較すれば、Tome I では前置 2 に対して後置 1、Tome II が 7 対 2 であるのに比し、Tome IV は 9 対 1、Tome V は 17 対 1 となり、巻数が大きくなるにつれ前置が圧倒的に優勢となる。また Tome IV, V には合わせて 12 例の先行要素ゼロの前置例が存在するなど Tome I, II に比較し、かなり中期フランス語的語順に接近していることが窺える。

*
* *

この報告においては 12~13 世紀の 8 作品を対象に、疑問詞のない疑問文中に認められる非強勢代名詞の位置が動詞に対して前置か後置かを検討してきたが、これらの結果は次ページの表 1—4.2 に示すとおりである。

ここで再度、古フランス語が文頭において非強勢要素を回避する傾向について考えてみるため MÉNARD の見解を引用してみよう。

Une habitude rythmique veut qu'en AF un élément tonique, et non un élément atone, se

trouve en tête de phrase. C'est là une loi très générale qui régit toute la syntaxe médiévale. Elle souffre quelques exceptions à mesure que la syntaxe médiévale évolue vers la syntaxe moderne. Afin d'éviter la présence de formes atones en tête de phrase, on utilise des adverbes toniques comme *si, atant, adont* « alors », *or* « maintenant, donc », *car* « donc », (avec valeur d'insistance), etc.⁶⁴⁾

古フランス語のこのような *habitude rythmique* は疑問文をも当然支配するものであるが、MÉNARD は更に続けてつぎのように論ずる。

Comme l'ancienne langue refuse de placer une forme faible en tête de phrase, la structure de l'interrogative diffère profondément en AF et en FM. Toutefois, dès le XIII^e siècle, on trouve quelques exemples du nouveau système qui va se répandre en MF (avec pronom atone à l'initiale).⁶⁵⁾

	前置例	後置例	合計	先行要素による前置例の分類 ⁶⁵⁾									
				ne	副詞・副詞句	主語	目的補語	過去分詞	従属節	間投詞・呼格名詞	et	ゼロ	
<i>La Chanson de Roland</i> (vers)	1	2	3					1					
<i>Les romans de Chrétien</i> (vers)	27	25	52	20	1	6							
<i>Floire et Blancheflor</i> (vers)	1	2	3										1
<i>La Prise d'Orange</i> (vers)	4	2	6	1	1								2
<i>Aucassin et Nicolette</i> (vers, prose)	4	3	7		2	1				1			
<i>La Queste del Saint Graal</i> (prose)	13	5	18	4	1	2				3			3
<i>Le Roman de la Rose</i> (vers)	17	5	22	4	2		1		3	2			5
<i>Lancelot</i> (prose)	I, II	41	13	54	19	6			1	10			5
	IV, V	44	4	48	11	3	2	2	1	9	4		12

(表 1—4.2)

このような MÉNARD の見解を総合すると、非強勢代名詞を伴う疑問文の語順に関して

は、それら代名詞が先行要素なしに文頭を占める頻度が高くなるほど、より近代的な語順に接近していると推測することも可能であろう。これらの点を考慮し、前掲の表1—4.2を検討するならば、13世紀の散文小説 *Lancelot* の特に Tome IV, V が先行要素ゼロの前置例が最多であり、加えて等位接続詞 *et* は文頭を保護する機能が十分であるとはいい難いゆえ⁶⁶⁾、これに後続する事例なども考慮すると、最も近代的な語順に接近している作品といえる。また間投詞、呼格名詞、従属節なども、それらの後には通常 *virgule* が置かれ、後続の非強勢代名詞との間に若干のポーズがあるものと思えるので、やはり文頭補語機能は不十分であろうと考えられる。このことは *Chrétien* にはそのような要素のみで非強勢代名詞を文頭から保護する疑問文の例が存在しないことから推測し得るのである。これらを勘案するならば、*Lancelot* にとどまらず、*Graal* および *Rose* までも含め、明確に中期フランス語へと向かう進展を認めることができよう。また代名詞の位置に変化が現れるのは13世紀からと一般にいわれているが、当報告で調査した12世紀末の作品 (*Floire, Orange*) にはすでにその傾向が存在するようである。

すべての用例を検討した結果、非強勢代名詞は否定疑問文で常に前置されることが確認できるゆえ、否定の事例を除外し、前置・後置の比率を比較するとともに、肯定の前置例中に占める先行要素ゼロの用例を割合で示せば表1—4.3のとおりとなる。なお用例数が不十分な *Roland, Floire, Orange, Aucassin* はこれを割愛して示す。

この結果12世紀の *Chrétien* は明らかに後置優勢で、しかも前置用例中に先行要素ゼロの例が皆無という古フランス語としての特徴が顕著に示されているのに比し、13世紀の *Graal, Rose, Lancelot*, は一転して前置優勢となり、とりわけ *Lancelot* IV, V ではその比が9対1を示す。 *Graal* と *Lancelot* I, II は近似した数値を示しているが、*Rose* は韻文でありながらも、これらよりもやや近代的な語順への進展が窺える。これは特に *Jean de MEUN* が書いたであろうとされる部分に影響されたものといえよう。

	前置	後置	先行要素ゼロ／前置
<i>Chrétien</i>	21.9%	78.1%	0%
<i>Graal</i>	64.3%	35.7%	33.3%
<i>Rose</i>	70.6%	29.4%	33.3%
<i>Lancelot</i> I, II	62.9%	37.1%	22.7%
<i>Lancelot</i> IV, V	89.2%	10.8%	36.4%

(表1—4.3)

*
* *

connais la tu? ---- ① la connais (tu)? ---- ② tu la connais? ---- ③

古フランス語における非強勢代名詞を含む疑問文は、概ね上記①、②、③の3タイプに分類し得るが、文頭に副詞などの要素が存在する場合、12世紀以前の作品でも②のタイプが多用されるようであり、かかる要素が文頭に存在しない場合、多くは①のタイプ、またときに③のタイプが使用される。しかし中期フランス語に近づくに従って、文頭保護要素が不在であっても次第に②のタイプの語順が多くを占めるようになる。いずれにせよ古フランス語における語順の選択は文の要素と密接に関連しているといえよう。

当報告では、非強勢代名詞を含む疑問詞のない疑問文に限定し考察を試みたゆえ、かなり広範囲に調査を行ったにもかかわらず、収集し得た用例数は必ずしも十分であったとはいえない。非強勢代名詞が後置から前置へと移動するには、他にどのような要因が作用しているのか、例えば動詞や代名詞の種類により偏りがあるのかなど詳細な検討を進めるには、更に調査範囲を拡大しなければならないであろう。

[使用テキスト]

La Chanson de Roland, edited by F. WHITEHEAD, Basil Blackwell, Oxford, 1970.

Les romans de Chrétien de TROYES, Coll. "C. F. M. A.", Honoré Champion, Paris :

I *Erec et Enide*, publié par Mario ROQUES, 1973.

II *Cligés*, publié par Alexandre MICHA, 1970.

III *Le Chevalier de la Charrete*, publié par Mario ROQUES, 1972.

IV *Le Chevalier au Lion (Yvain)*, publié par Mario ROQUES, 1974.

Floire et Blancheflor, seconde version, Margaret M. PELAN, Editions Ophrys, Paris.

La Prise d'Orange, édité par Claude RÉGNIER, 4^e édition, Klincksieck, Paris, 1972.

Aucassin et Nicolette, édité par Mario ROQUES, 2^e édition, Coll. "C. F. M. A.", Champion, Paris, 1936.

La Queste del Saint Graal, édité par Albert PAUPHLET, Coll. "C. F. M. A.", Champion, Paris, 1965.

Guillaume de LORRIS et Jean de MEUN, *Le Roman de la Rose*, publié par Félix LECOY, Coll. "C. F. M. A.", Champion, Paris : Tome I, 1970. Tome II, 1966. Tome III, 1970.

Lancelot, édité par Alexandre MICHA, Coll. "Textes Littéraires Français", Droz, Paris-Genève : Tome I, 1978. Tome II, 1978. Tome IV, 1979. Tome V, 1980.

1-5 条件文について

1-5-1 はじめに

Lucien FOULET は、古フランス語で「接続法の用法が現代語の慣用から最もかけ離れているのは条件文においてである」⁶⁷⁾と述べている。

S'il faisait beau, nous sortirions.

S'il avait fait beau, nous serions sortis.

上記のような文では、条件は直説法半過去または大過去によって、その帰結は条件法現在または過去形によって示されることは周知の事実であろう。しかし FOULET によると、このような構成の条件文は古フランス語では必ずしも頻繁に認められるタイプではないようだ。

Ces constructions sont connues du vieux français, mais ce ne sont pas les plus fréquentes en pareil cas. On préfère mettre l'imparfait du subjonctif dans les deux propositions, surtout, semble-t-il, quand on veut présenter la condition comme irréalisable.⁶⁸⁾

すなわち前提節、帰結節ともに接続法半過去を用いた条件文が古フランス語では好んで使用される形式であり、しかもこのタイプの文が過去に關しても未来に關しても用いられる。つまり古フランス語における前提節の接続法半過去は、近代フランス語における前提節の直説法大過去にも半過去にも相当し、古フランス語における帰結節の接続法半過去は、近代フランス語における帰結節の条件法過去にも現在にも相当することになる。従って、古フランス語におけるこの形式の条件文が過去を表すか、あるいは現在・未来を表すかを決定する要素は文脈や前後関係であるということになる。

接続詞 « Si » により導入される条件文のタイプについては、Ferdinand BRUNOT が時代ごとにこれを区分して提示している⁶⁹⁾、それを参照することで条件文の史の変遷の過程を辿ることができるが、Robert-Léon WAGNER は BRUNOT の示すリストの簡便さを評価しつつも、それが持つ欠点にも触れ、テキストにより多用な様相を提示するこの構文の複雑さを既にわれわれに示している⁷⁰⁾。

古フランス語の条件文には確かに FOULET の指摘するとおり、両方の節に接続法半過去を用いたタイプの構文が多く認められるが、この形式以外にも幾多の叙法・時称の組み合わせが存在し、これに関してはかなり複雑な問題が含まれている。当報告は12世紀末から13世紀初頭の間に成立したであろうと推測される Marie de FRANCE の2作品、*Lais* および *Fables* を調査し、Marie が « Si » により導入される条件文をどのように使用しているかを考察することで、当時の言語の状況の一端を窺おうとするものである。

1-5-2 古フランス語の条件文のタイプ

古フランス語の条件文について Philippe MÉNARD は、それを仮定の形式に基づき以下のように3種に大別している⁷¹⁾。

(1) L'hypothèse porte sur un présent-futur indubitable.

前提節には直説法現在が、帰結節にはその意味に応じて未来形、命令法あるいは直説

法現在が使用される。

(2) L'hypothèse porte sur un présent-futur problématique.

近代フランス語と同様に、前提節の内容に関して可能と非現実が厳密に区別されないのに加えて、現在と未来も区別されないで、文意は文脈に依存する。この場合にはつぎに示す2つのタイプの構文が頻繁に使用される。

Type 1. 前提節：接続法半過去 — 帰結節：接続法半過去

Type 2. 前提節：直説法半過去 — 帰結節：条件法現在

(3) L'hypothèse porte sur le passé.

過去の非現実を表す条件文には、つぎの2つのタイプの4構文が主として用いられる。

Type 1. 前提節：接続法半過去 — 帰結節：接続法半過去

Type 2. (a) 前提節：接続法半過去 — 帰結節：接続法大過去

(b) 前提節：接続法大過去 — 帰結節：接続法半過去

(c) 前提節：接続法大過去 — 帰結節：接続法大過去

古フランス語の条件文における叙法・時称の組み合わせは、上記以外にも多種存在するが、それらについては後述（次節参照）する。いずれにせよ、条件文にはラテン語にはない形態の、いわゆる条件法⁷²⁾が参入することで、それは古フランス語の時期にいつそう複雑な様相を呈するようになる。このように錯綜した体系は中期フランス語の時期を通じて継承され⁷³⁾、16世紀においてもなお、例えば今日では一般的な直説法大過去と条件法過去を組み合わせた構文の使用は稀で、それが広く用いられるようになるのは17世紀のことであるといわれる⁷⁴⁾。

1-5-3 Marie de FRANCE における条件文の使用例

Marie の作とされる *Lais* および *Fables* における条件文を前述の MÉNARD の分類に従い考察を進めると、以下のような状況が認められる。

(1) L'hypothèse porte sur un présent-futur indubitable.

この種の条件文は両作品に極めて多数存在する。

Les morz ferai ensevelir,

E si li nafrez poet garir,

Volenters m'en entremetrai

E bons mires li baillera. (*Chaitivel*, vv. 161-164)

'Deus,' fait ele, 'par tun seint nun,

Sire, si te vient a pleisir,

Cest enfant garde de perir.' (*Le Fresne*, vv. 162-164)

Si jeo n'en ai hastif cunfort,

Bien tost en puis aver la mort. (*Bislaoret*, vv. 47-48)

s'il nes *tient* aukes en destreit,
ne *ferunt* pur lui tort ne dreit ; (*Fables*, 18, vv. 49-50)
si nuls l'en *veut* doner lüer
ne par pramesse losenger
que sun seignur deive traïr,
nel *veile* mie cunsentir ; (*Fables*, 20, vv. 31-34)

ラテン語では前提節に未来形が頻繁に使用されるが、古フランス語では稀で⁷⁵⁾、Marieにおいてもそのような事例は極めて少数である。

Si vus *murrez*, jeo voil murir ; (*Guigemar*, v. 549)

また前提節における接続法現在の使用はアングロ・ノルマンのテキストに見られる方言上の特徴であると MÉNARD は指摘しているが⁷⁶⁾、この方言に属する調査対象の両作品には、そのような事例は存在しない。ただし前提節が並置される場合、第2の節に接続法現在を用いた条件文は若干例認められる。

S'ele refuse ma priere
E tant *seit* orgoilluse e fiere,
Dunc m'estuet il a doel murir
E de cest mal tuz jurs languir. (*Guigemar*, vv. 403-406)
Si il le receit bonement
E joius *seit* del mandement,
Seüre seez de s'amur ! (*Eliduc*, vv. 359-361)

(2) L'hypothèse porte sur un présent-futur problématique.

この範疇に分類し得る条件文も多数見られるが主要な構文はつぎの3タイプである。

- ① 前提節：接続法半過去 — 帰結節：接続法半過去
- ② 前提節：直説法半過去 — 帰結節：条件法現在
- ③ 前提節：接続法半過去 — 帰結節：条件法現在

①の構文に関する MÉNARD の記述は以下のとおりである。

Type à la fois ancien et littéraire qui n'établit aucune chronologie entre ses deux membres et marque une modalité intemporelle (puisque le subjonctif ne distingue pas le passé, le présent et le futur). Il reste longtemps en usage, notamment dans les textes en vers qui sont d'une syntaxe traditionnelle.⁷⁷⁾

両方の節に接続法半過去を使用するこの構文は、古フランス語の条件文の典型的なタイプであり、調査対象の両作品にも多数認められる。

'Sire,' fait el, 'beau duz amis,
Une chose vus *demandasse*
Mut volenters, si jeo *osasse* ; (*Bisclavret*, vv. 32-34)
Si jo *puisse* od gent parler

E en deduit od eus aler,
 Jo li *mustrasse* beu semblant,
 Tut n'en eüsse jeo talent. (*Yonec*, vv. 77-80)
 s'il humme *veüst* baisser vers tere,
 prendre bastun u piere quere,
 dunc s'en *deüst* aillurs voler,
 que cil nel poüst encumbrer. (*Fables*, 92, vv. 5-8)

②はいわゆる近代的なタイプの条件文である。BRUNOT は、この構文の出現を12世紀とするが⁷⁸⁾、極めて古い時代のテキストにも認められるもので、13世紀の散文作品において頻繁に用いられるようになったともいわれる⁷⁹⁾。調査対象はいずれも韻文作品ではあるが、既にこの構文が多用されている。

Nule femme nel *desferait*,
 Si force u cutel n'i *meteit*. (*Guigemar*, vv. 565-566)
 Si jeo *poete* liu vecir
 Que jeo te püisse mener,
 Jeo te *ferie* a li parler. (*Milun*, vv. 194-196)
 s'il *ert* ataint, pendu *sereit*. (*Fables*, 25, v. 12)
 Si vus *plesait* a remüer
 e sur un autre fust voler,
 jeo *chanterie* mut plus bel; (*Fables*, 66, vv. 9-11)

条件文に接続法半過去を使用することで、仮定の非現実性を強調したり、語気を緩和したり、あるいは仮定に敬意、焦燥、後悔、願望といったような情意的ニュアンスを付与しようとする繊細な作家たちもいたようではあるが、通常は、①および②の間になんら意味上の差異は存在しない⁸⁰⁾。

③は①と②の混合型で、特にアングロ・ノルマン方言のテキストに多く見られるタイプであるといわれるが⁸¹⁾、調査対象の両作品にも相当数の事例が認められる。

Cest' amur *sereit* covenable,
 Si vus amdui *feussez* estable. (*Guigemar*, vv. 451-452)
 S'ele *sentist* ceo ke jeo sent,
 Jeo *perdreie* ceste dolor. (*Equitan*, vv. 96-97)
 Si plus *eüssez* de cumpainie,
 si en *seriez* vus bien servie. (*Fables*, 9, vv. 13-14)
 mes une rien te di pur veir :
 s'il *alast* a ma volenté,
 ti oil *sereient* ja crevé! (*Fables*, 30, vv. 28-30)

上記①②③の構文に加えて、以下のような別のタイプ (⑤～⑩) の構文も若干例存在す

る。

⑤ 前提節：直説法大過去 — 帰結節：条件法過去

この構文は近代フランス語で、過去の非現実を表す条件文に使用されるタイプであるが、この構文がそのような使用され始めるのは14世紀頃からであるようだ。条件法過去は古フランス語の条件文では極めて稀であり、それは未来における事行の完了を示すといわれる⁸²⁾。また前提節の直説法大過去は、12・13世紀において完了（先立性）を示すべく徐々に使用され始めるが、この場合でも帰結節には条件法現在がよく使用される。すなわち条件法現在が過去を表す機能をも保持していたのである⁸³⁾。Marieに見られるつぎの用例は、前提節、帰結節ともに未来完了を示すものと解釈し得る。

S'aviez fait vostre talent,
Jeo sai de veir, ne dut nient,
Tost me avriez entrelaissiee,
Jeo sereie mut empeiree. (*Equitan*, vv. 125-128)
malement averieit enpleie
qu'il m'ad nurri e afeité,
si par ma garde aveit perdu
ceo dunt il m'ad lung tens peü. (*Fables*, 20, vv. 21-24)

⑥ 前提節：接続法大過去 — 帰結節：条件法現在

前提節の接続法大過去が近代フランス語のように過去の非現実の仮定を表すのではなく、ここでは未来完了を表す点で近代フランス語の用法とは異なるが、Marieにはこのタイプが2例認められる。

Si vostre sire fust finez,
Reïne e dame vus fereie ; (*Equitan*, vv. 226-227)
'Dame, ceo ne dirai jeo pas ;
Kar si jes eüsse perduz
E de ceo feusse aparceüz,
Bisclavret sereie a tuz jurs ; (*Bisclavret*, vv. 72-75)

⑦ 前提節：直説法半過去 — 帰結節：条件法過去

前述の⑤と同様、条件法過去が未来完了を表す構文である。

De ceo vus dirai ja la somme :
A tuz jurs m'avriez perdue,
Se ceste amur esteit seüe ; (*Lanval*, vv. 146-148)

⑧ 前提節：接続法半過去 — 帰結節：接続法大過去

この構文においても接続法大過去は未来完了を表すと解釈できる。

Si m'amie leüst laissier,
Jeol vus eüsse vendu cher.' (*Eliduc*, vv. 845-846)

⑨ 前提節：直説法半過去 — 帰結節：接続法半過去

Mes li remandast sun pleisir,
E s'il nel *voleit* retenir,
Cunduit li *donast* par sa tere ; (*Eliduc*, vv. 115-117)
L'ewe comencē a laper ;
tresbien quida en sun penser,
si l'ewe de la mare *ert* mendre,
que le furmage *peüst* bien prendre. (*Fables*, 58, vv. 9-12)

⑩ 前提節：接続法半過去 — 帰結節：条件法過去

前述の⑤および⑦と同様、条件法過去が未来完了を表す構文である。

tost *serait* mort, s'il *fust* brusez. (*Fables*, 52, v. 15)

(3) L'hypothèse porte sur le passé.

古フランス語の条件文で過去の非現実を表す場合に使用される主要な構文は、MÉNARDの分類に従えば4種類(1—5—2の(3)参照)であるが、そのうち前提節、帰結節ともに接続法半過去を用いたタイプが Marie のテキストでは多数を占める。

① 前提節：接続法半過去 — 帰結節：接続法半過去

S'il *seüst* quei ele senteit
E cum l'amur la destreineit,
Mut en *fust* liez, mun escient ; (*Guigemar*, vv. 419-421)
Ensemble od li la relevee
Demurat tresque a la vespree,
E plus i *fust*, sē il *poüst*
E s'amie lui *cunsentist*. (*Laval*, vv. 155-158)
S'il ne vus *vosist* mut grant bien,
Il ne *vosist* del vostre rien. (*Eliduc*, vv. 435-436)
Li liuns respunt que verité dist :
s'il queor *eüst*, ja n'i *venist*. (*Fables*, 70, vv. 65-66)

④ 前提節：接続法大過去 — 帰結節：接続法大過去

近代フランス語でも文語に時折認められるこの構文の出現は比較的新しく、それは古フランス語では殆ど使用されなかったようだが、14世紀頃から発展し、15・16世紀に広く用いられるに至ったと一般的には考えられている⁸¹⁾。しかし Marie のテキストには、既にこのタイプが4例認められることは注目に値するであろう。

Si cele ne *eüst* tenue,
Ele *fust* a tere *chaüe*. (*Guigemar*, vv. 767-768)
n'*eüssent* pas del mal *eü*,
s'il *eüssent* dunc conseil *creü*. (*Fables*, 17, vv. 27-28)

mut eust grant avoir guainé,
 si ele ne l'eüst forsconseillé. (*Fables*, 72, vv. 115-116)
 Si li cheverol l'ust recuilli
 en la meisun ensemble od li,
 mangié l'eust e devoré. (*Fables*, 89, vv. 19-21)

- ⑥ 前提節：接続法大過去 — 帰結節：条件法現在
 この混合型構文もアングロ・ノルマンのテキストに多く見られるといわれる⁸⁵⁾。

Il n'unt pas tuz le bref oï
 ki vient del rei, jol vus afi :
 ne m'estuereit pas remüer,
 si tuz l'eüssent oï cunter. (*Fables*, 61, vv. 29-32)
 Mut fereie ke desleaus,
 trop sereie mauveis e faus,
 si jeo encuntre vostre santé
 lur eüsse le quor issi emblé. (*Fables*, 70, vv. 61-64)

- ⑩ 前提節：接続法大過去 — 帰結節：接続法半過去
 hum me deüst trercher la teste,
 si encuntre le mal mun seignur
 eüsse fet tel deshonor. (*Fables*, 70, vv. 40-42)

(4) 不均衡構文

以上これまでに述べてきたどの構文にも属さない叙法・時称の組み合わせが古フランス語の条件文には多数認められる。これらの使用については表現上の豊かさの追求など、種々の理由が考えられるであろうが、MÉNARD はこの種の構文を一括して "phénomènes d'asymétrie" と称している⁸⁶⁾。Marie におけるこれに類する主要なタイプは以下のとおりである。

- 1) 前提節：接続法半過去 — 帰結節：直説法半過去
 Traire voleit, si mes eüst,
 Ainz ke d'iluec se remeüst. (*Guigemar*, vv. 87-88)
 El le quidot del tut avoir
 E retenir, s'ele peüst; (*Eliduc*, vv. 582-583)

- 2) 前提節：接続法半過去 — 帰結節：直説法単純未来
 Ja ne prendra femme a nul jur,
 Ne pur avoir ne pur amur,
 S'ele ne peüst despleier
 Sa chemise sanz depescer. (*Guigemar*, vv. 647-650)
 Le chevaler ad respundu

E dit qu'ele en *ferat* sun dru,

S'en Deu *creïst* e issi *fust*

Que lur amur estre peüst. (*Yonec*, vv. 137-140)

3) 前提節: 接続法半過去 — 帰結節: 直説法単純過去

Nuls ne *pout* eissir nê entrer,

Si ceo ne *fust* od un batel,

Se busuin *eüst* al chastel. (*Guigemar*, vv. 226-228)

4) 前提節: 接続法大過去 — 帰結節: 直説法半過去

Mes ne *poëie* a vus venir

Ne fors de mun païs eissir,

Si vus ne me *eüsses requis*. (*Yonec*, vv. 131-133)

5) 前提節: 直説法半過去 — 帰結節: 直説法単純未来

Jamés, ceo dit, ne *levera*,

Si li reis ne l'en *fesent* dreit

De ceo dunt ele se pleindreit. (*Laval*, vv. 308-310)

6) 前提節: 直説法現在 — 帰結節: 条件法現在

Si jo m'en *vois* ensemble od vus,

Mis pere *avreit* e doel e ire,

Ne *vivreit* mie sanz martire. (*Les Deus Amanz*, vv. 88-90)

7) 前提節: 接続法大過去 — 帰結節: 直説法複合過去

Par un petit ne l'a *crevé*,

si li sires n'en *eüst crié*: (*Fables*, 15, vv. 31-32)

1-5-4 Marie de FRANCE における条件文の使用傾向

調査対象の2作品について、前節1-5-3の(2)および(3)において例示した構文の使用頻度を比較対照すると以下のような結果が得られる⁸⁷⁾。

[Présent-futur problématique]

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	Total
<i>Lais</i>	15	14	11		1	2	1	1	2			47
<i>Fables</i>	5	13	7		1				1		1	28
Total	20	27	18		2	2	1	1	3		1	75

(表1-5.1)

[Passé irréel]

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	Total
<i>Lais</i>	9			1								10
<i>Fables</i>	1			3		2				1		7
Total	10			4		2				1		17

(表 1—5.2)

用例の総数が十分とはいえず、これをもって直ちに結論を導くには早計ではあるが、上記11種の条件文のうち、その主要なタイプについて更に詳細に検討すると、概略つぎのような事実が明らかとなる。

仮定が過去・現在・未来のいずれに関わるものであるかを考慮せず、また調査対象の2作品を区別せずに判断するならば、Marieにおいては、いわゆる旧タイプの条件文①が、比較的新しいタイプの②と殆ど相拮抗して使用されており、アングロ・ノルマンのテキストに多く見られるといわれる混合タイプの③および⑥については、その使用が24%程度である。

つぎに条件文の使用に関して両作品を比較検討してみると、そこにはかなり明確な差異が認められる。まず、両方の節に接続法半過去を用いた古フランス語の典型的な条件文①が*Lais*には42%用いられているが、*Fables*では、その使用が17%に過ぎない点が最も顕著な相違であろう。特に過去の非現実を表す条件文に関しては、*Lais*が殆どこのタイプを使用している(10例中9例)のに対して、*Fables*には僅か1例しか認められない。この場合、*Fables*に見られる主要な構文は、現代まで文語の中に生き残っている両節に接続法大過去を用いた構文④、もしくは接続法大過去と条件法現在を組み合わせた混合タイプ⑥である。

元来、接続法大過去は事行の完了を示す機能を持っていたが、時代の経過とともに事行が過去に属するものであることを示すに至る⁸⁰⁾。従ってこの時制におかれた動詞がテキストでアスペクト的価値を持っているか、時称的価値を持っているかを検討してみると、言語の進展状況を見定めるための一つの指標にもなるであろう。*Lais*の条件文に見られる6例の接続法大過去は、未来完了を表すものが3例、過去を表すものが3例と、その用法が相半ばするのに対し、*Fables*における11例の接続法大過去は、すべてが過去を表す例であることから、後者の言語がよりいっそう進展した状況を提示しているものと推察することができる。

また現在ないしは未来の仮定を表す条件文に関しても、*Lais*は旧タイプ、新タイプ、混合タイプがほぼ近似した使用頻度を提示するのに比し、*Fables*では直説法半過去と条件法現在を組み合わせた新タイプの構文②が好んで使用されている(46%)。これらの相違点を考慮すると、条件文の使用に関しては*Fables*が*Lais*に比較して、時期的にはかなり進行しているとの解釈も可能となる。

MÉNAÉDは、'Certains verbes longtemps réfractaires à la forme en *-rais* (ainsi *estre, avoir, devoir, poir, voloir, veoir, oïr, oser, cuidier, savoir, valoir, venir*) ont été employés pendant des siècles à l'imparfait du subjonctif, notamment dans les textes en vers.⁸⁹⁾と述べているが、Marieの条件文での状況を検証すべく、主要な時制を使用頻度の高い動詞について調査すると以下のような結果が得られる。

	subjonctif		conditionnel		indicatif	
	impft.	pl.-q.-pft.	prés.	passé	impft.	pl.-q.-pft.
1. estre	16	1	12	0	6	0
2. avoir	11	1	4	0	3	0
3. poir	14	0	1	0	2	0
4. voloir	4	0	1	0	7	0
5. faire	0	1	5	0	2	1
6. perdre	2	1	2	1	0	1
7. amer	5	0	1	0	0	0
8. devoir	4	0	1	0	1	0
9. plaire	2	0	0	0	4	0
10. saveir	4	0	1	0	1	0

(表1—5.3)

上表の結果から推察し得ることは、avoir, poir, amer, devoir, saveirなどの動詞が接続法半過去で用いられやすく、estreは用例数は多いものの、帰結節での条件法現在への偏りが顕著である。またfaireについても同様の傾向が認められる。voloir, plaireに関しては、前提節における直説法半過去への偏りが若干なりとも認められる。

近代フランス語では、接続法半過去は話し言葉において殆ど用いられることはなく、書き言葉においてさえ、その使用は極めて限定的であるといわれる⁹⁰⁾。Marieの条件文に使用されている主要な時制の人称・数に関する分布は以下のとおりで、接続法半過去は既にこの時代から3人称単数への極端な偏りの傾向を示していることが確認できる。

	1 ^e per. s.	2 ^e per. s.	3 ^e per. s.	1 ^e per. pl.	2 ^e per. pl.	3 ^e per. pl.
sub. impft.	6.3%	0%	91.0%	0%	2.7%	0%
sub. pl.-q.-pft.	23.5%	0%	52.9%	0%	5.9%	17.6%
cond. prés.	20.8%	0%	64.2%	0%	5.7%	9.4%
cond. passé	0%	0%	50.0%	0%	50.0%	0%
ind. impft.	10.6%	0%	74.5%	0%	8.5%	6.4%
ind. pl.-q.-pft.	0%	0%	50.0%	0%	50.0%	0%
Total	11.5%	0%	77.8%	0%	6.0%	4.7%

(表1—5.4)

1-5-5 おわりに

条件文の使用に関して2作品の間に認められる前述のような差異は、はたしてなにに由来するのであろうか。確かに両作品間には成立時期に関して若干の時間的な差が存在することは恐らく異論の余地はないであろう。正確な年号までは確定できないまでも、*Lais* が書かれたのは1189年以前、Marieの作とされる *Espurgatoire Saint Patriz* が1189年以後、*Fables* はその2作品の間に成立したというのが定説である。いずれにせよ、書かれた時期にあまり大きな隔たりはないものと思える *Lais* と *Fables* が、条件文の使用に関しては明瞭な相違を提示することから、はたしてこれらが同一人物の手になるものであろうかといった新たな疑問も生じる。しかしながら、それぞれの作品の性格から検討を加えるなら、こういった疑問の解消に繋がる解釈も可能であろう。すなわち *Lais* は王侯貴族の宮廷生活に題材を得た極めて文学的な作品であり、*Fables* は主として動物たちの日常の暮らしを活写したイソップに由来する物語である。従って、例えば登場人物（あるいは動物）たちが交わす会話についても、両作品間でおのずから異なったものとなるよう作者は配慮したに相違ない。種々のタイプの条件文の中で、①の構文が *Lais* に多用されるのは、文学的で伝統的といわれるこのタイプの構文が作品の性格と一致するからであり、②や④のタイプが *Fables* で高い比率を占めるのは、この作品が *Lais* に比し、より卑俗な世界を描写する寓話集であることに起因するのではないだろうか。当報告では調査対象を2作品に限定したが、新たに *Espurgatoire Saint Patriz* にまで範囲を拡大して考察を進めるなら、別なる解釈の可能性も考えられるであろう。

[使用テキスト]

Marie de FRANCE, *Lais*, edited by Alfred EWERT, Basil Blackwell, Oxford, 1963.

Marie de FRANCE, *Les Fables*, par Charles BRUCKER, Peeters, Louvain, 1991.

[第 I 部 註]

- 1) cf. A. DAUZAT, *Histoire de la langue française*, Paris, Payot, 1930, p. 345.
- 2) cf. M. K. POPE, *From Latin to Modern French with especial consideration of Anglo-Norman, Phonology and morphology*, Manchester University Press, 1952, p. 313.
- 3) cf. M. K. POPE, *Ibid.*, p. 462.
- 4) A. ERNOUT et F. THOMAS, *Syntaxe latine*, 2^e éd., Paris, Klincksieck, 1964, p. 161.
- 5) cf. A. ERNOUT et F. THOMAS, *Ibid.*, p. 9.
- 6) F. BRUNOT, *La Pensée et la langue*, 3^e éd., Paris, Masson, 1953, p. 246.
- 7) F. BRUNOT, *Ibid.*, p. 247.
- 8) L. FOULET, *Petite syntaxe de l'ancien français*, 3^e éd., Paris, Champion, 1966, § 51-§ 56.
- 9) 古フランス語では、命令法の動詞がときに主語を伴うことがあるが (cf. L. FOULET, *op. cit.*, § 311)、*Le Fresne* における命令法は主語が認められない。
- 10) 古フランス語の非人称動詞は多くの場合主語を伴わないが (cf. F. BRUNOT et Ch. BRUNEAU, *Précis de grammaire historique de la langue française*, 3^e éd., Paris, Masson, 1969, p. 266)、*Le Fresne* においては40例中つぎの2例にのみ主語が存在する。
Il n'ad si bien nun entre nus. (v. 462) *Nus savum bien qu'il i afiert :* (v. 37)
- 11) cf. W. von WARTBURG, *Évolution et structure de la langue française*, 7^e éd., Berne, A. Francke, 1965, pp. 129-130.
- 12) cf. L. FOULET, *op. cit.*, § 55.
- 13) cf. P. GUIRAUD, *L'ancien français*, Collection Que sais-je? No. 1056, Paris, Presses Universitaires de France, 1965, p. 96.
cf. G. ROHLFS, *From Vulgar Latin to Old French*, translated from German by V. ALMAZAN & L. Mc CARTHY, Detroit, Wayne State University Press, 1970, p. 106.
- 14) S-V型構文97例は、主語が名詞である場合の56例と、代名詞である場合の41例に区別できる。
- 15) V-S型構文38例は、主語が名詞である場合の16例と、代名詞である場合の22例に区別できる。
- 16) *que* は主格形としてしばしば現れる。(cf. L. FOULET, *op. cit.*, § 247)
- 17) cf. M. GREVISSE, *Le Bon Usage*, 8^e éd., Gembloux, J. Duculot, S.A., 1964, § 829.
- 18) cf. F. BRUNOT et Ch. BRUNEAU, *Précis de grammaire historique de la langue française*, 3^e éd., Paris, Masson, 1969, p. 447.
- 19) cf. M. de FRANCE, *Lais*, edited by A. EWERT, Oxford, Basil Blackwell, 1963, p. XXIV.
- 20) cf. *Li reis Marks esteit curucié, / Vers Tristram sun neuuz irié ; (Chevefoil, vv. 11-12)*
Li reis ki plus esteit grevez / E damagiez e encumbrez / Vodrat aider a sun poeir / E en soudees remaneir. (Eliduc, vv. 107-110)

21) *Bisclavret* における場合。

	実例数	格遵守	格混乱
S—V型構文	13	7	6
V—S型構文	8	6	2
TOTAL	21	13	8

22) cf. L. FOULET, *op. cit.*, § 459.

23) cf. L. FOULET, *Ibid.*, § 455.

24) cf. L. FOULET, *Ibid.*, § 450.

25) cf. F. BRUNOT et Ch. BRUNEAU, *op. cit.*, p. 448.

26) cf. A. DARMESTETER, *A Historical French grammar*, London, MacMillan, 1934, p. 619.

27) 当報告においてしばしば使用する「省略」なる用語は必ずしも適切なものではないが、これは"absence"を意味するものとする。

28) A. ERNOUT et F. THOMAS, *op. cit.*, p. 143.

29) A. ERNOUT et F. THOMAS, *Ibid.*, p. 143.

30) E. BOURCIEZ, *Éléments de linguistique romane*, 5^e éd., Paris, Klincksieck, 1956, p. 251.

31) Kr. NYROP, *Grammaire historique de la langue française*, Tome V, Copenhagen, Gyldendalske Boghandel, Nordisk Forlag, 1925, p. 206.

32) J. ANGLADE, *Grammaire élémentaire de l'ancien français*, Collection U, Paris, Armand Colin, 1965, p. 161.

33) P. GUIRAUD, *Le moyen français*, Collection QUE SAIS-JE? No 1086, Paris, Presses Universitaires de France, 1966, p. 102.

34) cf. W. von WARTBURG, *op. cit.*, p. 131.

35) A. DARMESTETER, *op. cit.*, p. 619.

36) cf. G. ROHLFS, *op. cit.*, p. 200.

37) *Bisclavret* においては fet il の 7 例および fet el の 2 例。

38) 命令法 2 人称単数形を含まない。

39) cf. G. ROHLFS, *op. cit.*, p. 106.

40) cf. A. DARMESTETER, *op. cit.*, p. 618.

41) cf. L. FOULET, *Ibid.*, p. 326.

42) F. BRUNOT, *op. cit.*, p. 638.

43) *La Chanson de Roland*, v. 370.

44) A. DARMESTETER, *op. cit.*, 1922, p. 832.

45) cf. A. DARMESTETER, *Ibid.*, p. 832.

46) cf. F. BRUNOT, *op. cit.*, pp. 639-640.

47) 朝倉季雄, 『フランス文法事典』, 白水社, 1955, p. 35.

48) 不定・所有・指示・疑問・数形容詞は考察の対象から除外した。

- 49) 前置の grant 168例の中には、比較級の greinur 2例 (*Equitan*, v. 140, *Milun*, v. 311) が含まれる。
- 50) 前置の bon 57例の中には、最上級の 2例が含まれる。
 En la flur de sun meillur pris (*Guigemar*, v. 69)
 Que c'iert le meudre chevalier (*Yonec*, v. 513)
- 51) lung に後続する名詞 8例はすべて tens であり、lung tens が副詞的に機能している。
- 52) つぎに示す vaillant は、単独で使用されている唯一の後置の事例であるが、この場合、「物質的に価値が高い」、「高価な」といった意味で使用されている点が他と異なる。
 Desuz la testè a l'enfant / Mistrent un oreiller vaillant / E desuz lui un covetur / Urlé de martre tut entour. (*Milun*, vv. 101-104)
- 53) cf. G. MOIGNET, *Grammaire de l'ancien français*, Paris, Klincksieck, 1973, p. 346.
- 54) G. MOIGNET, *Ibid.*, p. 346.
- 55) G. MOIGNET, *Ibid.*, p. 346.
- 56) 非強勢補語人称代名詞および副詞的代名詞 en, i を考察の対象とし、つぎのような強勢形代名詞は対象外とした。
 Cuide moi Amors metre an voie, / Qui les autres sialt desveier? (*Cligès*, vv. 510-511)
- 57) Ph. MÉNARD, *Manuel du français du moyen âge, I. syntaxe de l'ancien français*, nouvelle éd., Bordeaux, SOBODI, 1973, p. 55.
- 58) L. FOULET, *op. cit.*, § 187.
- 59) F. BRUNOT, *Histoire de la langue française*, 3^e éd., Paris, Armand Colin, 1924, Tome I, p. 271.
- 60) L. FOULET, *op. cit.*, § 162.
- 61) G. MOIGNET, *op. cit.*, p. 354.
- 62) *Aucassin et Nicolette*, édité par M. ROQUES, 2^e éd., Coll. "C.F.M.A.", Paris, Champion, 1963, p. XIV.
- 63) 2種以上の要素が代名詞に先行する用例の分類については、表中の左の要素を優先し(例えば否定辞 ne と副詞 donc が先行する場合には ne の項に) 分類した。
- 64) Ph. MÉNARD, *op. cit.*, p. 52.
- 65) Ph. MÉNARD, *Ibid.*, p. 59.
- 66) cf. W. von WARTBURG, *Problèmes et méthodes de la linguistique*, Paris, P. U. F., 1969, p. 101.
- 67) L. FOULET, *op. cit.*, § 303.
- 68) L. FOULET, *Ibid.*, § 303.
- 69) cf. F. BRUNOT, *Histoire de la langue française des origines à nos jours*, nouvelle éd., Paris, Armand Colin, 1966, Tome I, pp. 254-255, 346-347, 490-491.
- 70) cf. R.-L. WAGNER, *Les phrases hypothétiques commençant par "si" dans la langue française, des origines à la fin du XVI^e siècle*, Paris, Droz, 1939.

- 71) cf. Ph. MÉNARD, *Syntaxe de l'ancien français*, 3^e éd., Bordeaux, Bière, 1988, pp. 235-238.
- 72) 「条件法」といった呼称が不適切であるとの指摘は既にあり、これを "forme en -rais" という研究者も多くいるが、当報告では一応伝統的な文法用語に従った。
- 73) cf. Ch. MARCHELLO-NIZIA, *Histoire de la langue française aux XIV^e et XV^e siècles*, Paris, Dunod, 1992, pp. 289-291.
- 74) cf. F. BRUNOT et Ch. BRUNEAU, *op. cit.*, p. 512.
- 75) cf. Ph. MÉNARD, *Syntaxe de l'ancien français*, 3^e éd., Bordeaux, Bière, 1988, p. 235.
- 76) cf. Ph. MÉNARD, *Ibid.*, p. 235.
- 77) Ph. MÉNARD, *Ibid.*, p. 236.
- 78) cf. F. BRUNOT, *op. cit.*, p. 255.
- 79) cf. Ph. MÉNARD, *Syntaxe de l'ancien français*, 3^e éd., Bordeaux, Bière, 1988, p. 236.
- 80) cf. Ph. MÉNARD, *Ibid.*, p. 236.
- 81) cf. Ph. MÉNARD, *Ibid.*, p. 236.
- 82) cf. Ph. MÉNARD, *Ibid.*, p. 238.
- 83) cf. Ph. MÉNARD, *Ibid.*, p. 238.
- 84) cf. F. BRUNOT, *op. cit.*, p. 491.
- 85) cf. Ph. MÉNARD, *Syntaxe de l'ancien français*, 3^e éd., Bordeaux, Bière, 1988, p. 238.
- 86) cf. Ph. MÉNARD, *Ibid.*, p. 238.
- 87) 当報告の1-5-4に提示した数値は、1-5-3の(2)および(3)で論及した条件文の統計結果を示すものであり、1-5-3の(1)に示した「単純な仮定に基づく条件文」と1-5-3の(4)に示した「不均衡構文」の用例は含まれない。
- 88) cf. Ph. MÉNARD, *Syntaxe de l'ancien français*, 3^e éd., Bordeaux, Bière, 1988, p. 237.
- 89) cf. Ph. MÉNARD, *Ibid.*, p. 236.
- 90) cf. M. GREVISSE, *Le Bon Usage*, 8^e éd., Gembloux, J. Duculot, S.A., 1964, § 1055.

第Ⅱ部 語法

2-1 否定表現

Ferdinand BRUNOT は *La Pensée et la Langue* の中で、「否定的な返答を望むとき、non は古今を問わず用いられ (Venez-vous? Non.)、陳述は無条件で否定される。そしてこの否定の基本的形式はそれのみで十分に役割を果たす」¹⁾ と述べるとともに、non は返答の場合だけでなく、一般的否定表現においても「16世紀までは現在分詞や不定法の前で用いられ (・・・)、また être あるいは faire の人称形とも使用された」²⁾ と論述している。また同じく BRUNOT は同書で、「古語には non とは別に、音韻法則の働きにより弱められた形の ne および nen が存在し (・・・)、それらは文に否定的な意味を与えるのに十分であった」³⁾ と論じている。しかしながらフランス語における否定表現の歴史を概観すると、近代フランス語の最も一般的な否定 ne...pas の形式が確立される以前に、否定の補足辞として付加される語がさまざまな形で現れることは興味深い。ne には早くから種々の補足辞が伴い、否定表現を変化に富んだものとするのであるが、時代の流れとともにこれら補足辞の役割も多くは pas ないしは point の中に集約され、また ne のみによる否定も漸次減少し、「16世紀でもまだ pas が必須のものではなかった」⁴⁾ もの、虚辞的な pas が否定表現の補足辞として既に優位を占めていたことが確かめられる⁵⁾。

本論においては Marie de FRANCE の *Lais* を対象に、古フランス語の否定表現に関して一つの考察を試みるものであるが、特にいかなる否定の表現形式が好んで用いられているのか、否定辞 ne がどのような条件のもとで、どの程度 pas, point, mie 等の <complétifs> と結合するのか、またいかなる場合に単独で使用されるかなどの点について検討してみることとする⁶⁾。

2-1-1 NE に補足辞が伴う否定

Lais を構成する *Prologue* および12編の物語に ne (<lat. non)> は742例使用されているが、この中で ne が pas, point, mie その他、元來名詞に属する補足辞とともに用いられている事例より順次検討を加えてみよう。なお ne の全用例742という数値には、等位接続詞として使用される ne (<lat. nec)> は含まれない⁷⁾。

① ne...pas による否定

Né dutai pas, bien le saveie, (Prologue, v. 34)

Autrement ne fust pas creüz; (Guigemar, v. 258)

Il ne seit pas queils est li maus

De quei li reis sent les frīguns; (Equitan, vv. 108-109)

Jo ne voil pas ci arester. (Les Deus Amanz, v. 196)

Li chevalier n'est pas jolis; (Eliduc, v. 422)

ne...pas による否定は41例認められるが、この中には pas が ne に先行する9例が含ま

れている。

La neif erre, *pas ne demure.* (*Guigemar*, v. 621)

La dame jut ; *pas ne dormi,*

Kar mut desire sun ami. (*Yonec*, vv. 267-268)

これら *pas* が *ne* に先行する否定はすべて物語体の中に用いられていて、会話体には見られない⁸⁾。

② **ne . . . point** による否定

Mes jo creim que poi ne li vaille,

Kar n' ot en lui *point* de mesure. (*Les Deus Amanz*, vv. 178-179)

Lais には *ne . . . point* による否定が上記 1 例しか存在せず、古フランス語の特徴として *point* は < de + 名詞 > による補語を伴い、動詞の目的補語として名詞的な価値を持っている⁹⁾。

③ **ne . . . mie** による否定

Né devez mie issi parler! (*Le Fresne*, v. 46)

Sire, *ne fetes mie bien* : (*Bisclavret*, v. 283)

Esbaiz est, *ne seit que creire,*

Il *ne la quide mie a veire.* (*Lanval*, v. 199-200)

Par fei, jeo *ne me merveil mie,*

Quant si bele femme est perie. (*Eliduc*, vv. 1025-1026)

ne . . . mie による否定は 51 例認められるが、*ne . . . pas* の否定に存在するような補足辞が *ne* に先行する例は皆無である。

④ **ne . . . nient** による否定¹⁰⁾

Or l'i estut del tut entendre,

Né se purrat nient defendre : (*Equitan*, vv. 61-62)

S'amie apele mut sovent,

Mes ceo *ne li valut neent.* (*Lanval*, vv. 339-340)

Né vus esmerveilliez neent : (*Chevefoil*, v. 21)

ne . . . nient による否定 23 例中、*nient* が *ne* および動詞に対して前置されるものは 3 例を数える。

Nient ne vus en celerai. (*Guigemar*, v. 314)

Ne li vadlet plus ne li dist,

Né il *nient ne* li requist

Fors tant que del sucn li offri. (*Eliduc*, vv. 411-413)

Dame, fet il, *nent ne* vus ret

De mesprisun ne de mesfet. (*Ibid.*, vv. 727-728)

⑤ **ne . . . rien** による否定

N' ai rien el mund ki me confort. (Chaitivel, v. 160)

Cil en furent tut esgaré,

Nè li aveient rien loé. (Eliduc, vv.883-884)

ne...rienの否定は12例存在するが、つぎの1例のみrienがneおよび動詞に先行する。

Kar li reis rien ne li dona,

Ne Lanval ne li demanda. (Lanval, vv. 31-32)

⑥ **ne... chose** による否定

Mut est pensis pur sa mesaise,

Il ne veit chose ke li plaise. (Lanval, vv. 51-52)

ne... choseによる否定は上記1例のみである。

名詞に由来する否定の補足辞としては、他に *goute*, *ame* などが用いられる。しかし *Lais* に見出し得るものは前述の6種のみであり、これらの物語体および会話体における分布、neを伴うすべての否定表現に対する比率はつぎのとおりである。

	物語体	会話体	TOTAL	neの総数に対する比率
① ne... pas	29	12	41	5.5%
② ne... point	1	0	1	0.1%
③ ne... mie	25	26	51	6.9%
④ ne... nient	17	6	23	3.1%
⑤ ne... rien	6	6	12	1.6%
⑥ ne... chose	1	0	1	0.1%
TOTAL ①~⑥	79	50	129	17.4%

(表2-1.1)

表2-1.1より近代フランス語で最も一般的なne... pasによる否定が、Marie de FRANCEでは全否定(742例)の5.5%にしか達せず、主たる否定の形式ではないことが窺える。ne... pas, ne... mieの相違は方言にも関係する問題であり、pasはParisを含む中央部および西部地域の、mieは北部、東部地域の特徴を示すものである。しかし多くのテキストで両形が共存するといわれる¹¹⁾。Laisにおいても、その相違は明確ではないが、物語体では頻度が殆ど均衡しているのに比し、会話体ではne... mieの使用が優勢であることが確かめられる。否定される動詞について調査すると表2-1.2の結果が得られる。

表2-1.2に見られるとおり、ne... pas, ne... mieともestreの否定の場合に高い比率を示すが、avoirについてはne... pasの例はなく、ne... mieが2例と極端に少ない。しかもこの2例は、いずれもCeo n'i ad mie. (Guigemar, v. 311, Eliduc, v. 924)と凝結化された表現におけるものであることから、Laisではavoirが打ち消されるとき、上記の'expression figée'を例外としてpas, mieともに付加されることはないといえる。またpoeirもmieとど

もに7例用いられているが、pas との使用は認められない。このように補足辞と動詞との結合にはある程度の偏りがある。しかし pas < lat. passum および mie < lat. mica はともに種々の動詞の否定辞として使用されており、既にこれらに語源的な意味を求めることは困難であり、単に否定表現の 'renforcement' として副詞的な機能しか持っていないといえよう。

	① ne... pas	② ne... point	③ ne... mie	④ ne... nient	⑤ ne... rien	⑥ ne... chose	計
estre	10		11		1		22
voleir	7		6		1		14
poeir			7	6			13
savcir	3		4	2	1		10
faire	1		4	1			6
aveir		1	2		2		5
deveir	1		2	1			4
demurer	2		1				3
duter	1		1	1			3
(s)ublir	2		1				3
valeir				2	1		3
ccler			1	1			2
creire	2						2
escundire			2				2
remancir	1			1			2
sembler	1		1				2
tenir			1	1			2
veeir					1	1	2
その他29種	10		7	7	5		29
TOTAL	41	1	51	23	12	1	129

(表 2—1.2)

形容詞および代名詞に類する否定辞としては nul, aucun, nun などが存在するが、*Lais* では nul が形容詞あるいは代名詞として用いられている用例のみ見られる。

⑦ ne... nul (pron.) による否定

Il ne voleit nule espuser,

Ja n'en rovast oïr parler. (*Equitan*, vv. 199-200)

Nul ne la vist que ne l'amast
 E a merveille la preisast. (*Le Fresne*, vv. 241-242)
Nuls ne l'apele fors le rei: (*Lawal*, v. 443)
N' en i laissa nul remaneir. (*Les Deus Amanz*, v. 158)
Nul n' enterra ça enz fors mei. (*Yonec*, v. 179)

このような nul は30例存在するが、うち2例は forme tonique の nului が用いられている。

Celui ameine en teu manere
Que de nului ne fu sceüz,
Desturbez nē aparceüz. (*Milun*, vv. 202-204)
Ne se osot en nului fier. (*Ibid.*, v. 498)

⑧ ne . . . nul (adj.) による否定

Quant il l'urent devant lui mise,
Ne se prist garde en nule guise. (*Bisclavret*, vv. 279-280)
Pur les dames que nus veïmes
Nus n' i avum nul esgart fait. (*Lawal*, vv. 504-505)
Si n' en puis nule joie avoir
Ne de baisier ne d'acoler
Ne d'autre bien fors de parler. (*Chaitivel*, vv. 220-222)

なお nul (adj.) は rien, chose などと結合し、ne . . . nule rien, ne . . . nule chose といった形で現れることもあるが、このように補足辞が2種以上におよぶ否定表現については後述する。

ne . . . nul (pron.), ne . . . nul (adj.) による否定の使用頻度は次表のとおりである。

	物語体	会話体	TOTAL	ne の総数に対する比率
⑦ ne . . . nul (pron.)	25	5	30	4.0%
⑧ ne . . . nul (adj.)	12	11	23	3.1%
TOTAL ⑦~⑧	37	16	53	7.1%

(表2—1.3)

nul とともに用いられる動詞は poeir が最も多く、13例と約 1/4 にあたるが、pas, mie などと頻繁に使用される estre は助動詞の場合を除き使用例はない。

副詞に属する否定の補足辞としては、ja, mes, jamés, unques, plus, gueres が用いられている。周知のとおり ja, mes, unques などは本来、時の副詞として positif な価値を保持していたが、早くから ne とともに否定文で使用される機会が多く、いつしか否定の

'renforcement' としての機能を有するに至るのである。しかし *Lais* におけるこれらの語には、後述する如く時を示す働きもまだ存在することが認められる。

⑨ **ja ne** による否定

Ja pur li sucurs nen avreit. (*Lawal*, v. 466)

Ja ne la volt oïr ne creire; (*Les Deus Amanz*, v. 201)

Puis que des lais ai comencé,

Ja n'iert par mun travail laissé: (*Yonec*, vv. 1-2)

Ja ne me vodra reneer,

Ainz m'amerat e tendrat chier. (*Milun*, vv. 467-468)

ja ne による否定は32例見られるが、つぎの1例を除きすべて ja が ne に先行している。

Jeo ne puis ja repos avoir: (*Equitan*, v. 99)

⑩ **ne . . . mes** による否定¹²⁾

Ensemble vunt, *ne targent mes,*

La dame avant e ele après. (*Guigemar*, vv. 291-292)

Ne voleit mes les lui gisir. (*Bisclavet*, v. 102)

Il ne vus esveillerat meis. (*Laiistic*, v. 110)

12例見られるこの否定表現においては、いずれも ne と mes が動詞を取り囲む形式にて使用されている¹³⁾。

⑪ **jamés ne** による否定¹⁴⁾

Ki sus eüst sun chief tenu

Jamais le peil n'avreit chanu; (*Guigemar*, vv. 179-180)

Certes, *jamés ne vus faudrai,*

Richement vus conseillearai. (*Le Fresne*, vv. 287-288)

Jamés ne queor de vus partir: (*Lawal*, v. 129)

Jamés n'avra humme vivant. (*Eliduc*, v. 517)

Jamés a tere ne vendrums! (*Ibid.*, v. 834)

否定文における jamés は例示した如く殆どが ne に対して前置されており、近代フランス語に多い ne と jamés が動詞を囲むタイプは僅かに2例しか認められない。

Ne par herbe ne par racine

Ne par mire ne par pociun

N'avras tu jamés garisun

De la plaie ke as en la quisse, (*Guigemar*, vv. 110-113)

Il ne purrat jamés murir. (*Yonec*, v. 86)

⑫ **unques ne** による否定¹⁵⁾

Unc ne la purent despleier. (*Guigemar*, v. 654)

Unques garde ne s'en dona. (*Equitan*, v. 297)

Unke si bel cuple ne vi. (*Yonec*, v. 192)

37例存在する unques と ne による否定は、その大部分が単純過去形の動詞と結合し、unques は文頭に位置することが多く、動詞に対して後置されることは極めて稀である。

Freisne ne portè unke fruiz. (*Le Fresne*, v. 340)

Ele ne l'aveit unc amé

Ne de s'amur ascüré (*Bisclavet*, vv. 107-108)

⑬ **ne . . . plus** による否定

Sun pere ne volt plus atendre; (*Le Fresne*, v. 493)

Quant Milun l'ot issi parler,

Il ne poeit plus escuter; (*Milun*, vv. 469-470)

A cele feiz n'unt plus parlé. (*Eliduc*, v. 538)

ne および plus による否定は18例あり、うち8例は plus が ne の前に位置するものである。

Plus n'en oï, ne plus n'en sai,

Ne plus ne vus en cunterai. (*Chaitivel*, vv. 239-240)

Il s'est armé, plus n'i atent,

E si cumpainuns ensement. (*Eliduc*, vv. 153-154)

⑭ **ne . . . gueres** による否定¹⁶⁾

Mais ne me fust guaires de pris: (*Prologue*, v. 31)

Lanval, fet ele, bien le quit,

Vus n'amez gueres cel delit; (*Lanval*, vv. 277-278)

Mes n'i ot gueres des Engleis. (*Milun*, v. 390)

この否定表現においては8例中1例のみ、gueres が ne および動詞に対して先行している。

Quant li sires fu repeirez,

Que gueres n'esteit esluignez,

Cele li ad dit e mustré

Del chevalier la verité; (*Yonec*, vv. 279-282)

副詞に属する否定の補語は以上の6種で、これらの使用頻度は次ページに示す表2-1.4のとおりであるが、ja, jamés, unques といった時の副詞に関しては、ja, jamés が会話体で、unques が物語体での使用に偏る傾向が認められる。これは ja, jamés が未来時称の動詞と結びつきやすく、unques が過去時称（特に単純過去）の動詞と結合する機会が多いことと関連性を持っている。すなわち *Lais* の物語体における中心的な時制は単純過去形であり、未来時制の用いられる場所は殆どが会話体であるためのものと推測し得る。plus および gueres についても、物語体での使用が多く認められる。

またこれら6種の否定辞の文中での位置は、特定の時制と結びつきが緊密な否定辞、す

なわち 'la valeur temporelle' を十分に保持する副詞の ja, jamés, unques が ne と動詞に対して前置、mes, gueres が後置されるのが全般的な傾向であり、plus については前置、後置がほぼ均衡状態にあることが確かめられる。

	物語体	会話体	TOTAL	ne の総数に対する比率
⑨ ja ne	11	21	32	4.3%
⑩ ne...mes	6	6	12	1.6%
⑪ jamés ne	8	18	26	3.5%
⑫ unques ne	27	10	37	5.0%
⑬ ne...plus	16	2	18	2.4%
⑭ ne...gueres	7	1	8	1.1%
TOTAL ⑨~⑭	75	58	133	17.9%

(表 2—1.4)

これまでに述べた種々の否定の補足辞は、ときに 2 種（稀に 3 種）が同一否定文中に用いられることがある。ここではこのような否定表現について検討してみよう。まずどのような補足辞がともに用いられやすいか、その共起性の度合いを数値で示すと次ページの表 2—1.5 のようになる。この結果から、pas, point については他の補足辞とともに使用されることがなく、unques nul (adj.), unques mes, ja nul (adj.) などが親和性が高いことが窺える。2 種以上の補足辞が同時に使用される否定表現の主なる文例は以下のとおりである。

⑮ ja および他の補足辞との否定

Ja nule fiez nen ierc si ose
Que j'en ise s'il nel comande,
Si mis sires ne me demande. (Guigemar, vv. 350-352)
Ja n' i avrez nul cuntredit; (Bisclavret, v. 114)
Ja, de si que revenu seie,
N' avrai joie de rien que veie; (Eliduc, vv. 737-738)

⑯ jamés および他の補足辞との否定

Volenters otriat l'amur,
N'en partirat jamés nul jur. (Milun, vv. 31-32)
Jamés par tei ne par autrui,
De si que jeo paroge a lui,
Né li vodrai rien demander; (Eliduc, vv. 443-445)
Tant par pité, tant par amur,
Jamés n' avrai joie nul jur. (Ibid., vv. 1027-1028)

Jeo *ne* sui *mie* si suspris

Ne si destreiz pur *nule* guere

Que de ceo me deiez requere. (*Ibid.*, vv. 848-850)

Nule chose *ne* li cela. (*Bisclavret*, v. 62)

Nul hum *n'* en oï *plus* parler,

Ne jeo *n'en* sai avant cunter. (*Lanval*, vv. 645-646)

Bon orét out e süef vent,

N' i ad *mais* *ni*ent de sun repaire ; (*Guigemar*, vv. 194-195)

これら2種以上の補足辞を伴う否定表現の使用頻度は次表に示すとおりである。この結果からも、単純過去形との結合が緊密な *unques* が他の補足辞を伴い、物語体で用いられるケースが顕著であることが判明する。

	物語体	会話体	TOTAL	ne の総数に対する比率
⑮ ne...ja + x	5	6	11	1.5%
⑯ ne...jamés + x	1	2	3	0.4%
⑰ ne...unques + x	21	6	27	3.6%
⑱ その他2種の 補足辞による否定	7	4	11	1.5%
TOTAL ⑮~⑱	34	18	52	7.0%

N.B. x : nul, rien, mes, etc.

(表 2—1.6)

以上18種に分類し順次検討を加えた例は、*ne* になんらかの補足辞が伴う否定表現であったが、これらの総和は367例であり、Marie de FRANCE の *Lais* における *ne* の総数742例の49.5%に相当する。これに対して残余の375例、50.5%が *ne* 単独による否定となるが、以下はこれらに関して考察してみよう。

2-1-2 NE の単独否定

ne の単独用法については近代フランス語にもしばしば認められるが、古フランス語ではそれがいっそう広範囲に行われるといわれる。この報告においても *ne* の単独否定が、なんらかの補足辞を伴う否定を僅かながら上回る結果が出ている。そこで BRUNOT が *Histoire de la Langue française*, Tome I において、*ne* が単独で使用される種々のケースを列記した後、述べている見解を引用すると：

Enfin *ne* se rencontre en dehors de ces cas dans bien des endroits. Il suffit d'ouvrir un texte pour voir qu'il n'y a pas de règles.¹⁷⁾

Lais についても、この点に関して絶対的な規則は存在しないのであるが、単独用法の事例を検討すると、その多くはいくつかの類型に区分することが可能であり、ある程度の法則性ないしは作者 Marie de FRANCE の否定表現の傾向の如きものを探り得るように思える。近代フランス語の否定文における *ne* の単独用法の場合も考え合わせながら *Lais* の事例について考察を進めてみよう。

① *aveir* の否定

(1) *n'aveir cure, n'aveir talent, n'aveir regard*

上記の動詞句では *pas* および *mic* が付加されることはない。

Il la requert ; ele n'ad cure,

Ainz li mustre de la ceinture : (Guigemar, vv. 721-722)

Jeo n'ai cure de vus amer. (Lancel, v. 270)

Cil les virent vers eus venir,

N'aveient talent de fuir. (Chaitivel, vv. 95-96)

D'autre chose n'ot il regard. (Le Fresne, v. 187)

(2) *il n'i a . . . , il n'a . . . , n'i a . . . , n'a . . .*

人物や事物が存在しないことを意味する上記の非人称表現においては、*ne* の単独否定が非常に多く見られる。

Il n'i ad dame ne pucele

Ki n'i alast pur asaier : (Guigemar, vv. 652-653)

Il n'ot vallet en sa meisun

Ne face engin, reis u laçun,

Puis les mettent par le vergier ; (Laüstic, vv. 95-97)

N'i ot mesun, sale ne tur,

Que ne parust tute d'argent ; (Yonec, vv. 362-363)

N'i ad cclui ne voille juindre. (Chaitivel, v. 94)

N'ot el chastel hurne si os

Ki cuntre lui osast eissir

Estur ne mellee tenir. (Eliduc, vv. 100-102)

上例のように、これらの非人称表現は、目的補語が関係詞節により限定されていることが多いが、関係詞節に従わない場合でも *pas, mic* が付加されない点は近代フランス語と異なる。なお *n'ad . . . , il n'ad . . .* には、「この世の中には存在しない」とか「世界広しいえども見ることはできない」といった極めて強く存在を否定する言回しとして *suz ciel, en tut le monde, en la tere, el réaume* など場所を示す状況補語が付加されることが頻繁に認められる。しかし *i* を伴う *il n'i ad . . . , n'i ad . . .* が *suz ciel* 等前述の言回しとともに使用されることはない。従って近代フランス語の *il n'y a pas . . .* における *y* とは異なり、古フランス語の *i* には場所を指し示すかなり明確な観念が含まれていたと推測し得る。

Suz ciel n'at or ki vaille plus. (Guigemar, v. 158)

Il n'ad suz ciel empereür,

Si vus amer le voliez,

Que mut n'en deüst estre liez. (Eliduc, vv. 362-364)

N'ot tant de teus en tut le monde (Laval, v. 16)

El rüaume n'aveit sa per. (Equitan, v. 37)

N'ot en la tere chevalier

Quë aukes feüst a preisier, (Chaiivel, vv. 13-14)

(3) その他の avoir

avoir による動詞句、avoir による非人称構文の否定においては ne の単独使用が頻繁に見られる現象を観察したが、その他の avoir についても ne の単独否定が散見し得る。

Cil metent lur vie en nuncure

Que d'amur n'unt sen e mesure; (Equitan, vv. 17-18)

Del cigne firent messenger,

N'i aveient autre en parler, (Milun, vv. 281-282)

Karnel heir madle nen aveit; (Eliduc, v. 94)

② nul を意味する humme, humme ne femme などのある否定文

Né troveissez humme si os,

Si li rei pur lui n'enveiait,

Ja une feiz dedenz entrast. (Equitan, vv. 192-194)

Humme ne femme n' i trova. (Yonec, v. 376)

③ pur poi (que) . . . , pur un petit (que) . . .

上記の表現で que が使用されることもあるが、いずれにしても ne の単独否定であり、pas, mie などは付加されない。

Elidus oi quei cil dist,

Pur poi que d'ire ne mesprist. (Eliduc, vv. 841-842)

Quant les deus parz fu munté sus,

Pur un petit qu' il ne chiet jus. (Les Deus Amanz, vv. 197-198)

Ele remeint en teu manere,

Pur poi ne l'apelet arere; (Eliduc, vv. 383-384)

Pur un petit ne se pasma. (Guigemar, v. 736)

④ ne . . . que, ne . . . mais que, ne . . . fors, ne . . . si ~ nun

否定が「除外」「排除」を示す語により限定されている構文では pas, mie 等を使用されない。

Né demura ke une loëc,

Quant sa cumpaine i acurru,

Si vit la place u ele jut ; (*Eliduc*, vv. 1038-1040)
 E ne furent mais que il dui. (*Ibid.*, v. 794)
 N'ot drap vestu fors la chemise ; (*Les Deus Amanz*, v. 173)
 Il ne demure fors la seir,
 Al demain ad pris sun cungié. (*Milun*, vv. 314-315)
 Kar a sa femme aveit premis,
 Ainz qu'il turnast de sun país,
 Quë il n'amereit si li nun. (*Eliduc*, vv. 463-465)

⑤ **saveir, poeir** の否定

saveir に関しては38例の ne 単独否定に対し、pas, mic など名詞に由来する補足辞が伴う例は10例（前掲表 2—1.2参照）、nul, plus, ja が伴う場合が各1例、nul, nient が同時に伴う例が1例と、単独否定に偏る傾向が強い。

Les altres dras ne sai preisier ; (*Guigemar*, v. 177)
 En Bretagne ot quatre baruns,
 Mes jeo ne sai numer lur nuns ; (*Chaitivel*, vv. 33-34)
 Esbaiz est, ne seit que creire,
 Il ne la quide mie a veire. (*Lanval*, vv. 199-200)
 Cil li ad dit : Par fei, ne sai. (*Eliduc*, v. 433)
 Esguarez est, ne seit coment ; (*Le Fresne*, v. 257)
 Mes il ne seivent u il vunt. (*Yonec*, v. 476)
 Car jeo ne sai autre cunfort. (*Equitan*, v. 220)

poeir については ne による単独否定が35例見られるのに対して、pas が伴う例はなく、mie と7例、nient とともに6例（前掲表 2—1.2参照）と saveir 同様 ne の単独否定が優勢である。ただし、nul とはかなりしばしば用いられ、ne poeir nul は13例あり、plus（4例）、mes（3例）、jamés（2例）、ja（1例）、unques（1例）との使用例も若干認められる。単独否定の事例は以下の如きものである。

Në la peot li reis retenir ; (*Lanval*, v. 631)
 Ne poeient avant aler,
 Hoec l'esteut laissier ester. (*Les Deus Amanz*, vv. 45-46)
 Cele aventure fu cuntee,
 Në pot estre lunges celee. (*Laiistic*, vv. 157-158)
 Or m'estuvrat issi souffrir,
 Lasse, quant jeo ne puis murir. (*Milun*, vv. 149-150)

⑥ **ne (< lat. nec)** を含む構文

La reine Semiramis,
 Quant ele ot unkes plus aveir

E plus pussaunce e plus saveir,
 Né l'emperere Octovien
 N' esligasent le destre pan. (*Lanval*, vv. 82-86)
 Venuz i est, pas ne demure,
 Né trespasse terme né hure. (*Yonec*, vv. 269-270)
 Plusurs en ai oï conter,
 Nés voil laisser né oblier ; (*Prologue*, vv. 39-40)
 Tute la nuit veillat issi,
 Né resposa ne ne dormi. (*Eliduc*, vv. 331-332)
 Certes, ja femme ne prendrai
 Né pur autre ne vus larrai. (*Equitan*, vv. 223-224)
 Kar li reis rien ne li dona,
 Né Lanval ne li demanda. (*Lanval*, vv. 31-32)

同一否定文の中で主語や補語を結合するための *ne*、同一の主語を持つ等位節、異なった主語を持つ等位節の結合等に用いられる *ne* は *Lais* に 169 例見られるが、接続する諸要素の最初のもの前に多くの場合 *ne* (< lat. nec) を置かない。すなわち、例えば A, B 2 要素がともに否定される場合、*ne... ne A ne B* といった表現よりも、*ne... A ne B* の表現が好まれることなど近代フランスの慣用とは幾分異なった点も認められる。

⑦ 願望、命令を表す否定文

Né vus ennoit si jol vus di ! (*Guigemar*, v. 514)
 Né me laissez pur vus murir ! (*Equitan*, v. 174)
 Bele amie, nel me celez ! (*Le Fresne*, v. 431)
 Diva ! fet el, nel me celer ! (*Eliduc*, v. 419)

DARMESTER は主節における *pas, point* 等を伴わない *ne* の用法の一例として、願望、命令文をあげ、これは 16・17 世紀まで時代がくだっても見出し得ると述べている¹⁸⁾。Marie de FRANCE においても上例のような *ne* の単独否定による用例が認められるが、*pas, point* 以外の否定辞はかなり用いられていて、*mie, nient, nul, ja, mes, jamés* などが散見し得る。

Bele, ne me escundiez mie ! (*Guigemar*, v. 506)
 L'aventure ke avez oïe
 Veraie fu, n' en dutez mie. (*Bisclavret*, vv. 315-316)
 Né vus esmerveilliez neent : (*Cheurefoil*, v. 21)
 N' aiez de ceo nule poür ! (*Guigemar*, v. 556)
 Ja de ceo ne seez en dute ! (*Yonec*, v. 164)
 Fiz a putain, fet il, mauveis,
 Fel traître, nel dire meis ! (*Eliduc*, vv. 843-844)
 Jamais n' aies tu rmedecine ! (*Guigemar*, v. 109)

⑧ 条件節の否定

Nule femme nel desfereit,
Si force u cutel n' i meteit. (*Guigemar*, vv. 565-566)
Si cele ne l'eüst tenue,
Ele fust a tere chaüe. (*Ibid.*, vv. 767-768)
S'il ne s'en peot en curt defendre,
Il le ferat arder u pendre. (*Lanval*, vv. 327-328)
Si vus de ceo ne me creez,
Vostre chapelain demandez ; (*Yonec*, vv. 155-156)
S'il ne vus vosist mut grant bien,
Il ne vosist del vostre rien. (*Eliduc*, vv. 435-436)

si に続く条件節の否定については、近代フランス語で pas, point の付加、省略が定着せず、いずれのケースも認められるようであるが¹⁹⁾、Marie de FRANCE では例外なく ne の単独否定が採用されている。

⑨ 妨害、用心、不平等比較を表す語に続く従属節

Mes jo creim que poi ne li vaille, (*Les Deus Amanz*, v. 178)
Grant poür ad ke hum ne la veie. (*Eliduc*, v. 795)
Chacez mei tuz ces chiens arere,
Si gardez quë hum ne la fiere ! (*Bisclavret*, vv. 155-156)
Al porter ad bien defendu
Que il ne die cument il fu. (*Le Fresne*, vv. 225-226)
En sun curage se aparceit
Que autrement est k'il ne suleit ; (*Yonec*, vv. 229-230)
Mut furent plus al revenir
Qu'il n' esteient al fors cissir : (*Eliduc*, vv. 235-236)

これらはいわゆる ne explétif であり、当然近代フランス語同様 pas, point などは付加されない。

⑩ 従属接続詞 sanz ceo que, si que, que などに続く節

E mut la teneit en destreit
Sanz ceo que ele nel deserveit. (*Le Fresne*, vv. 63-64)
Al bois se met, après lui vait,
Si qu' il ne l'ad aparceü. (*Eliduc*, vv. 986-987)

古フランス語の que はしばしば種々の従属接続詞と同義で使用されるが、*Lais* ではこの語が副詞節を導く従属接続詞として用いられている場合、それに続く否定文で ne の単独用法が多く見られる。

Ele ne purrat mic aler

K' il ne la veie trespasser. (Chevefoil, vv. 45-46)
Mes nel volt mettrè a reisun,
Qu' il ne li turt a mesprisun. (Eliduc, vv. 307-308)
Femme jolive de mestier
Se deit lunc tens faire preier
Pur sei cherir, que cil ne quit
Què ele eit usé cel deduit ; (Guigemar, vv. 515-518)
Par Deu, seignurs, nus feimes mal
De nostre cumpainun Lanval,
Que tant est larges e curteis,
E sis peres est riches reis,
Que od nus ne l'avum amené. (Lanval, vv. 229-233)

なお que に続く名詞節については、ne の単独否定と ne... pas, ne... mie などによる否定が殆ど同程度に見られる。また pourquoi を意味する que の後では、1例のみではあるが、近代フランス語の如く ne の単独否定が認められる。

Deus ! qu' il ne sout la traïsun
Què aparailot le felun. (Yonec, vv. 295-296)

① 関係詞節における否定

関係詞節での否定はごく少数の例外を除き²⁰⁾、殆どが ne の単独否定である。

Suz ciel n'ad humme, s'ele amast,
Ki durement n' en amendast. (Equitan, vv. 83-84)
N'i ot estrange ne privé
A ki Lanval n' eüst doné. (Lanval, vv. 213-214)
N' i ot codre ne chastainier
U il ne mettent laz u glu,
Tant que pris l'unt e retenu. (Laüstic, vv. 98-100)
N'i ad celui ne voile juindre.²¹⁾ (Chaitivel, v. 94)

上例のように否定の主節に従属し、動詞の叙法は接続法であることが多い。なお近代フランス語でもこのような場合には、通常 pas, point などが省略される²²⁾。

本節では ne の単独否定に関して検討を加えたが、各用法における用例数を明記しなかったのは、2種以上の用法に重複して該当する用例が多数存在し、絶対的な分類を不可能にしたためである。以上11種の用法のいずれにも当てはまらないものは僅少37例であり、その主なるものを以下に例示する。

N' en turnerat, si sera prise. (Guigemar, v. 876)
Puis que ses dras li ot toluz,
Né fud en sun païs veüz ; (Bisclavret, vv. 271-272)

Pur la joie qu'il ot de li

De sun beivre *ne* li membra. (*Les Deus Amanz*, vv. 182-183)

Mes li rei *ne* li respondi. (*Eliiduc*, v. 52)

S'a m'amic esteie espusez,

Nel suffereit crestientez. (*Ibid.*, vv. 601-602)

ne の単独否定において使用されている動詞を頻度の高いものより順に示すと次表のとおりである。

aveir	89	veir	6	retenir	3	(s)ocire	2
saveir	38	(se) metre	5	venir	3	oir	2
poeir	35	laisser	4	apeler	2	requere	2
voleir	22	quidier	4	comander	2	revenir	2
estre	18	tenir	4	creire	2	suleir	2
(se) faire	12	aler	3	cunuistre	2	turner	2
amer	9	apardeveir	3	demandar	2	valeir	2
trover	7	(se) celer	3	dormir	2	その他58種	58
dire	7	demurer	3	eissir	2		
deveir	6	reposer	3	mustrer	2	TOTAL	375

(表 2—1.7)

表 2—1.7に見られるように *ne* の単独否定にて、最も多く用いられる動詞は *aveir* であり、約 1/4 を占める。

*
* *

この小論では単に Marie de FRANCE の *Lais* のみを考察の対象としたのであるから、当時の全体的な動きを論ずるには、なお広範囲の調査研究を必要とするであろう。しかしこの渾然とした否定の諸形式にもある程度の傾向ないしは作者の筆法上の癖の如きものが存在するように思える。そこで本調査に基づく結果を以下に要約してみよう。

まず近代フランス語で最も広く用いられる *ne... pas* による否定は、*Lais* で全体の6%に達せず、また1例しか認められない *ne... point* も極めて稀な存在といえよう。否定の補足辞としては *pas*, *mie*, *nient* など名詞に由来するもの、代名詞、形容詞の *nul*、副詞の *ja*, *jamés*, *unques* 等、その種類は多くを数えるが、使用頻度はかなり平均化していて、特に多用される否定辞は認められないといえる。また *pas*, *mie* には既に副詞的な機能しか存在せず、*ja*, *jamés*, *unques* などは、ともに用いられる動詞の時制に偏りがあることから、時の副詞としての機能も十分に認められる。

否定の諸形式の中で、最も頻繁に使用されるものは *ne* の単独否定であり、全否定の約半数におよぶ。これら多くの *ne* 単独否定の用例も、その約90%は、2—1—2で述べた11種の用法のいずれかに該当し、どの用法にも適合しないものは僅少値を示すに過ぎない。また次表に示す如

く、独立節・主節における ne の単独否定の比率は39.5%であるのに比し、従属節中でのそれは76.5%と遥かに高く、後者で補足辞の用いられる機会が少ない結果を示している。

	独立節・主節	従属節	Total
補足辞を伴う否定	315 (60.5%)	52 (23.5%)	367 (49.5%)
NE の単独否定	206 (39.5%)	169 (76.5%)	375 (50.5%)
Total	521	221	742

(表2—1.8)

動詞と否定辞との関係は、前掲表 2—1.2 と表 2—1.7 を比較することにより、その傾向が窺える。まず pas, mie と最も多く使用される estre は、単独否定で第5位の頻度を提示するに過ぎず、逆に pas とは結合せず、mie と極めて例外的(2例)にしか用いられることのない avoir は単独否定で約 1/4 に当たる89の使用例があり、極端な偏りを示している。これらの結果、補足辞を伴う否定と ne の単独否定とが、一見無秩序に混在しているようにも思える否定表現にも、ある程度の規則性を認めることも可能であるといえよう。更にこの問題には音節数や脚韻も関連するであろうから、同時代の散文作品との比較も残された検討事項であるように思える。

なお H. YVON は古フランス語の否定表現に関して、*La Chanson de Roland*, *La Queste del Saint Graal*, *La Vie de Saint Louis* de JOINVILLE, *La Conquete de Constantinople* de VILLEHARDOUIN をもとに、*Romania* に3回にわたり調査結果を発表しているが²³⁾、それによると否定の副詞 ne は11世紀におけるよりも14世紀初頭でより頻繁に 'mots accessoires' に伴われると述べられている。YVON による数値を示すと、JOINVILLE で1010例中567例と半数以上が ne になんらかの補足辞が付加されているのに比し、*Roland* における数値は554例中175例と 1/3 以下を示すに過ぎない。この現象は mie, pas, point の使用が増加したことに起因するものであるとしている。ne に伴う補足辞は、すべてが同じ役割を保有するものではない。すなわち、onques, jamais = nunquam ; homme, nul, personne = nemo ; chose, nient, rien, goute, mot = nihil など、それぞれの否定辞はそれぞれの意味に必要な欠くべからざるものである。しかし pas, mie, point は否定に 'la valeur d'exclusion totale' を与えることにのみ役立つのであって、その使用が拡大したと YVON は論じている。

Marie de FRANCE における調査結果を YVON による統計と比較すると、point が極端に少ないという点では *Roland* や VILLEHARDOUIN と類似しているが、pas, mie が殆ど同程度に使用されている点は *Graal* に近い。そして ne になんらかの 'mots accessoires' が伴う比率は *Roland* よりもむしろ JOINVILLE に接近しているといえる。

[使用テキスト]

Marie de FRANCE, *Lais*, edited by Alfred EWERT, Basil Blackwell, Oxford, 1963.

2-2 指示詞

古フランス語における指示詞の体系は、近称の *cist* 系列と、遠称 *cil* の系列に分かれており²⁴⁾、以下に示すような構成であったことは周知のとおりである²⁵⁾。

Cist 系列

	<i>m. s.</i>	<i>f. s.</i>	<i>n. s.</i>	<i>m. pl.</i>	<i>f. pl.</i>
cas sujet	cist	ceste		cist	
			cest		cestes
cas régime	cest	ceste		cez	
	cestui	cesti		(ces)	

Cil 系列

	<i>m. s.</i>	<i>f. s.</i>	<i>n. s.</i>	<i>m. pl.</i>	<i>f. pl.</i>
cas sujet	cil	cele		cil	
			cel		celes
cas régime	cel	cele		cels	
	celui	celi		(ceus)	

ラテン語における指示詞が、*hic, iste, ille* に基づく 3 語系列の体系を持っていたこと、また近代フランス語が *-ci, -là* といった小辞により近称・遠称の区別をつけ得るとも、指示詞そのものでは遠近を示し得ないことを考え合わせると、古フランス語のそれは丁度英語の *this ~ that* と同様、ラテン語と近代フランス語の中間的なところに位置するものといえよう。

近代フランス語の指示形容詞 (*ce, cet, cette, ces*) は *cist* 系列を継承するものであり、指示代名詞 (*celui, celle, ceux, celle*) は *cil* 系列に由来するが、古フランス語では両系列の指示詞が形容詞としても、また代名詞としても使用されていた。ただ *cist* 系列が形容詞として、*cil* 系列が代名詞として好んで用いられる傾向は、既に古くからあったといわれている²⁶⁾。ここでは12世紀末 *Marie de FRANCE* の *Lais* で、それがどのような状況であるかを検討し、同時に指示詞の体系の変遷についても見ていくこととしたい。

*
* *

まず近代フランス語の指示詞が、古フランス語とはまったく異なった体系を持つに至った経緯を概観しておくことは、論旨の展開上必要なことと思えるので、以下に略述してみよう。

古フランス語の主格および被制格のうち、近代フランス語に残るものはいうまでもなく被制格であるが²⁷⁾、指示詞の中から被制格のみを取り出すと、つぎようになる。

<i>m. s.</i>	<i>f. s.</i>	<i>m. pl.</i>	<i>f. pl.</i>
cest, cestui	ceste, cesti	cez	cestes
cel, celui	cele, celi	cels	celes

これらは元來形容詞としても、また代名詞としても使用されていたことは既述したとおりであるが、このうち *cels* が早くも12世紀に形容詞としての機能を殆ど完全に失い、*cez* がそれに代わって用いられるとともに、更に *cestes*, *celes* の形容詞としての機能も、かなり広範囲に引き継いだといわれる²⁸⁾。その結果、形容詞はつぎに示すような構成となり、もはや複数形では遠近の対立がなくなる。

<i>m. s.</i>	<i>f. s.</i>	<i>m. pl.</i>	<i>f. pl.</i>
cest	ceste		
		cez	cez
cel	cele		

更に重要な進展は、*cest* と *cel* が子音の前では使用されなくなり、代わって *ce* が登場したことである。この *ce* の由来に関しては種々の見解が存在するが²⁹⁾、これにより指示形容詞の構成は以下に示すようになる。

<i>m. s.</i> (+consonne)	<i>m. s.</i> (+voyelle)	<i>f. s.</i>	<i>m. f. pl.</i>
ce	cest	ceste	ces
	cel	cele	

複数形および子音の前の男性単数形で遠近対立がなくなった指示形容詞は、もはや1つの弱点を持った体系であるといわざるを得ない。やがては女性単数形や母音の前の男性単数形においても、遠近を示す機能が弱体化し、*cest*~*cel*, *ceste*~*cele* のうち *francien* 方言では、*cest* と *ceste* が存続して *cel*, *cele* は消滅する。そして遠近を示す機能は副詞の *ci* または *là* を付加することで保たれ、近代フランス語の指示形容詞 (*ce*, *cet*, *cette*, *ces*) が形成されるのである。

一方、指示代名詞についても、古フランス語の被制格形のみ取り出してみるとつぎのようになる。

<i>m. s.</i>	<i>f. s.</i>	<i>m. pl.</i>	<i>f. pl.</i>
cest, cestui	ceste, cesti	cez	cestes
cel, celui	cele , celi	cels	celes

上表中、太字で示した指示詞のみが、*celui*, *celle*, *ceux*, *celles* として近代フランス語に生き残り、他は消滅した。この原因については再度後段で触れるが、G. PRICE は形容詞における遠近対立の消滅が代名詞の体系に影響をおよぼしたのであろうと考える³⁰⁾。

*
* *

Marie の *Lais* に見られる指示詞は310例であるが、これらは指示形容詞136例と、指示代名詞174例に分けることができる。なお中性の指示代名詞 *ceo* (ço, c') は考察の対象から除外したため、これらの数値には含まれない。

Emplois adjectifs

指示形容詞の136例は次表に示すような分布で使用されている。

Cist 系列 (60例)

	<i>m. s.</i>	<i>f. s.</i>	<i>m. pl.</i>	<i>f. pl.</i>
cas sujet	cist 6 ³¹⁾	ceste 12	cist 0	cestes 0
cas régime	cest 21	ceste 18	ces 3	cestes 0

Cil 系列 (76例)

	<i>m. s.</i>	<i>f. s.</i>	<i>m. pl.</i>	<i>f. pl.</i>
cas sujet	cil 1	cele 2	cil 3	celes 0
cas régime	cel 37	cele 33	cels 0	celes 0

(表2—2.1)

単数形においては *cist* 系列 *cil* 系列の用例数が拮抗し、遠近を示す機能が少なくとも数字の上では保持されているように思える。主たる用例を以下に示す。

Cist 系列 cas sujet

U fu *cist* bons pailles trovez? (*Le Fresne*, v. 432)

C'est vostre pere que ici gist,

Que *cist* villarz a tort ocist. (*Yonec*, vv. 529-530)

Ne sai u jeo sui arivez,

Coment ad nun *ceste* citez. (*Guigemar*, vv. 331-332)

Verité est que *ceste* dame

Ad mut esté de bone fame.' (*Le Fresne*, vv. 47-48)

De ceo vus dirai ja la somme :

A tuz jurs m'avriez perdue,

Se *ceste* amur esteit seüe ; (*Lanval*, vv. 146-148)

なお格の不適切な使用例 (*cist* に代わる *cest* の使用) が3例認められる。

Tut en riant li dit : Amis,

Cist conseil sereit trop hastis,

De otrier vus *ceste* priere :

Jeo ne sui mie acustumere.' (*Guigemar*, vv. 509-512)

'Si m'aît Deus, jo m'esmerveil
U cest produm prist cest conseil
Que il ad mandé a mun seignur
Sa huntê e sa deshonor,
Que sa femme ad eü deus fiz. (*Le Fresne*, vv. 31-35)
'Di mei,' fait ele, 'par ta fei,
U fu cest bon paile trovez? (*Le Fresne*, vv. 420-421)

Cist 系列 cas régime

Ne me tenez a surquidie
Si vos os faire icest present. (*Prologue*, vv. 54-55)
'Sire,' la dame li respunt,
'Il nen ad joië en cest mund,
Ki n'ot le laüstic chanter. (*Laüstic*, vv. 83-85)
'Veiz tu' fet ele, 'ceste femme,
Que de beuté resemble gemme? (*Eliduc*, vv. 1021-1022)
Tant me garda ensemble od li,
Chevals e arnes me dona,
En ceste tere m'envea. (*Milun*, vv. 456-458)
また複数形には用例が極端に少なく、僅かにつぎの3例が認められる。
Chacez mei tuz ces chiens arere,
Si gardez quë hum ne la fiere ! (*Bisclavret*, vv. 155-156)
Ces quatre chevalers amoue
E chescun par sci cuveitoue ; (*Chaitivel*, vv. 149-150)
De l'aventure de ces treis
Li auntien Bretun curteis
Firent le lai pur remembrer,
Que hum nel deüst pas oblier. (*Eliduc*, vv. 1181-1184)

これら cist 系列に属する指示形容詞の殆どは会話体に見られるものであり、物語体における使用例は極端に少ない(会話体での使用例53例、物語体での使用例7例)。物語体における cist 系指示詞は、概して物語りの冒頭ないしは結末で、作者が narratrice としての立場を離れ、読者(聞き手)に直接語りかけている個所に主として用いられている。例を示せば、「このことはさておき、ビスクラヴレについての話をしたいと思います」とか、「お聞きいただいたこの話をもとに『ギジュマール』という物語が作られたのです」というような用いられ方である(*Prologue*, v. 55. *Guigemar*, v. 22, 883. *Bisclavret*, v.13. *Yonec*, v. 517, 551. *Eliduc*, v. 1181.)。これは cist 系指示詞が会話体で、あるいは少なくとも聞き手を意識した状況で使用されるということを示唆するものである。

Cil 系列 cas sujet

Cil parlemenz n'ert pas vilains. (*Lanval*, v. 252)

Tute fu blanche *cele* beste,

Perches de cerf out en la teste ; (*Guigemar*, vv. 91-92)

Cil oiselet par grant duçur

Mainent lur joie en sun la flur. (*Laiüstic*, vv. 61-62)

Cil 系列 cas régime

Grant joie en out, si li promist

Si *cel* service li fescit,

Bon gueredun de li avreit. (*Le Fresne*, vv. 118-120)

Tant produme vaillant e sage

Unt asaié *icel* affaire

Ki n'en purent a nul chef traire. (*Les Deus Amanz*, vv. 152-154)

En *cele* hogge ot une entree,

De cel sanc fu tute arusee ; (*Yonec*, vv. 347-348)

Desque ele sot *cele* aventure,

Paumee chiet a tere dure. (*Chaitivel*, vv. 143-144)

Icele nuit bon ostel tient ; (*Lanval*, v. 203)

cil 系列に属する指示形容詞76例は、61例が物語体に、15例が会話体に用いられており、この比率は cist 系指示形容詞の場合と著しい対照を示している。また被制格形の70例はすべて cel または cele であり、複数形に cels および celes はまったく使用されていない。

Emplois pronominaux

指示詞のうち174例は代名詞としての使用であるが、その中で cist 系列に属するものは僅かに3例に過ぎず、残る171例はすべて cil 系指示詞である。cist 系の3例はいずれも男性単数形で、主格形 cist が1例、被制格形 cest が2例、すべて会話体に認められる。

Cist 系列 cas sujet

'Sire, ne fetes mie bien :

Cist nel fereit pur nule rien,

Que devant vus ses dras reveste

Ne mut la semblance de beste. (*Bisclavret*, vv. 283-286)

Cist 系列 cas régime

Cest e un anel me baillèrent

Cil ki a nurir me enveierent. (*Le Fresne*, vv. 439-440)

Autre cunseil vus estuet prendre,

Kar *cest* ne voil jeo pas entendre. (*Les Deus Amanz*, vv. 93-94)

cil 系指示代名詞171例は次表のように整理し得る。

Cil 系列 (171例)

	<i>m. s.</i>	<i>f. s.</i>	<i>n. s.</i>	<i>m. pl.</i>	<i>f. pl.</i>
cas sujet	cil 45	cele 22		cil 44	celes 7
			cel 2		
cas régime	cel 1 celui 23	cele 10		ceus 14	celes 3

(表 2—2.2)

Cil 系列 cas sujet

ここでは近代フランス語の人称代名詞的な使用が顕著である。

Li senescal hastif revint,

A l'hus buta, *cele* le tint ;

Li le fiert par tel air,

Par force li estut ovrir. (*Equitan*, vv. 287-290)

N'i out fors une sule entree,

Cele fu noit e jur gardeec. (*Guigemar*, vv. 223-224)

N'ot drap vestu fors la chemise ;

Entre ses braz l'aveit *cil* prise. (*Les Deus Amanz*, vv. 173-174)

Cil unt fait sun commandement. (*Cherefoil*, v. 87)

関係詞節により意味が限定される指示詞も多く見られる。

Cil ki engendra Yuuenec

Aveit a nun Muldumarec. (*Yonec*, vv. 9-10)

Cil s'en alat ensemble od li,

Pur ki sun seigneur ot trahi. (*Bisclavret*, vv. 307-308)

Celes què al tref l'amenerent

De riches dras le cunreerent ; (*Lanval*, vv. 173-174)

Cil 系列 cas régime

男性単数被制格形としては、cel が 1 例のみで、他はすべて celui が使用されている。なお celui は直接目的格、間接目的格、所有格など用法は多岐にわたる。また形容詞としては用いられていない cels (ceus) や celes もここでは認められる。

Un aigle d'or ot desus mis ;

De *cel* ne sai dire le pris,

Ne des cordes ne des peissuns

Que del tref tienent les giruns ; (*Lamal*, vv. 87-90)

Milun oï *celui* loër

E les biens de lui recunter. (*Milun*, vv. 343-344)

Celui ad fet del suen doner,

Si l'en cumandë a aler. (*Ibid.*, vv. 223-224)

Milun saut sus, mut li fu bel :

Al dei *celui* cunuit l'anel,

Quant il li rendi sun cheval. (*Ibid.*, vv. 431-433)

Soventefeiz a lui parlerent

Que une gentil femme espusast

E de *cele* se delivrast ; (*Le Fresne*, vv. 316-318)

Mes la fiaunce prent d'*iceus*

Quë il n'iert descuvert pur eus. (*Eliduc*, vv. 905-906)

被制格指示代名詞の半数以上は、関係詞節により意味が限定されている。

La dame veille, si atent

Celui que ele eime léalment,

E dit que or purreit bien venir

E estre od li tut a leisir. (*Yonec*, vv. 303-306)

Sire, ça einz avez od vus

Cele par ki nus perissums. (*Eliduc*, vv. 832-833)

Durement plure e si maudit

Ceus ki le laüstic traïrent

E les engins e laçuns firent ; (*Laüstic*, vv. 122-124)

Ceo est la plus bele del mund,

De tutes *celes* kë i sunt.' (*Lamval*, vv. 591-592)

Cel neutre

中性の *cel* は古フランス語においても稀で、*Lais* の中にも *peot cel estre* といった locution figée の形で2度現れるだけである。

Si nus ici les atendums,

Peot *cel* estre, nus justerums ; (*Eliduc*, vv. 169-170)

Peot *cel* estre, jeo sui traïe.' (*Ibid.*, v. 432)

*
* *

古フランス語の指示詞の体系が崩壊した主要な原因の一つといわれる *cels* の形容詞としての機能の消滅は、*Marie* においても前掲の表2-2.1より窺える。ただ *ces* の使用例が少

なく（3例）、これをもって形容詞 *cels* が完全に *ces* にとって代わられているとするのは、いささか早計であるといえるかも知れない。しかし NYROP も *cels* については *Vie de St Leger* や *Eulalie* から形容詞的用法の例を引用すると、「以後のテキストでは、*cels* はもっぱら *substantif* として機能するだけである」³²⁾ と指摘しており、恐らく Marie の時期では、形容詞としての使用例はあるとしても極めて例外的なものであろうと推測し得る。

cels の形容詞的機能喪失の原因に関しては、それが *position faible* で **ces* になり、後に *cez* に吸収されたとする音韻発達説、*les, des, mes, tes, ses* に影響されたとする類推説、また音韻発達によるファクターと類推によるファクターの相乗作用によるものとする説などがあるが³³⁾、いずれにせよ「なんらかの理由により、遅くとも12世紀には、*cez* が *cels* の形容詞としての機能を受け継いだ」³⁴⁾ とする考え方に異論の余地はなさそうである。

また *cez* は非常に古くから形容詞 *cestes* および *celes* に代わり使用されているともいわれるが、Marie においても形容詞 *cestes, celes* は認められない。ただ *ces* の被限定辞がいずれも男性形であるため、更に調査の範囲を拡大してみることも必要であろう。

古フランス語も末期になると、形容詞としての *cest, cel* が子音の前では用いられなくなり、これに代わって *ce* が登場するが、*Lais* においては、このような *ce* はまだ確認できず、*cest, cel* は子音の前、母音の前を問わず、一様に使用されている。ここで *Lais* に見られる指示形容詞を被制格形について示せば以下のようなになる。

<i>m. s.</i>	<i>f. s.</i>	<i>m. pl.</i>	<i>f. pl.</i>
<i>cest</i>	<i>ceste</i>		
		<i>ces</i>	
<i>cel</i>	<i>cele</i>		

上記のとおり Marie では女性複数形に使用例はないが、P. GUIRAUD および H. YVON による *La Chanson de Roland* の調査結果によると、当時 *ces* は既に被制格複数形を代表する唯一のものとなっていたようである³⁵⁾。*Roland* に比し、100年近くも年代が下る *Lais* の時期では、*ces* 以外の指示形容詞が被制格複数形として使用されることは極めて例外的なケースであろうと推測し得る。しかし単数では、男女両形ともまだ遠近対立を示す機能を保持していて、主観的記述が主流を占める会話体では *cest* と *ceste* が、客観的記述が中心となる物語体の部分では *cel* と *cele* が多く用いられている。

WARTBURG は遠称 *cil* が関係代名詞 *qui* とともに多用されたことが、*cil* を代名詞に、*cist* を形容詞に導いたと指摘している。

Mais dès le 15^e s. nous voyons la langue manifester une préférence pour *cil* pron. et, d'autre part, pour *cist* adj. Cette préférence est due au fait que *cil*, marquant l'éloignement, était naturellement beaucoup plus fréquent avec le pron. rel. *qui*. Grâce à la combinaison *cil qui*, *cil* est devenu pronom, laissant la fonction d'adj. à *cist*.³⁶⁾

また YVON もこれに関連し、つぎのように論じている。

Parmi les articles c'est *cil* dont l'usage se restreint de plus en plus : pour les pronoms nous

avons vu au contraire *cist* en voie de disparition ; il est d'ailleurs dès l'origine moins fréquent que *cil*. Cela tient à ce que celui-ci joue très fréquemment le rôle de nominal devant un nom ou une proposition relative. La grande fréquence de ces emplois a imposé *cil* à la mémoire des locuteurs : c'est, croyons-nous, la cause principale, sinon unique, de la disparition de *cist* comme pronom.³⁷⁾

確かに関係詞節ないしは *de* ~ により限定される *cil* 系代名詞は多く、*Lais* では171例中74例がこの用法に該当する。この点は PRICE もある程度 YVON の見解を是認しているが、それだけが古フランス語の指示詞の体系を崩壊させた原因であるとは考えない³⁸⁾。彼はそれに加えて、形容詞における遠近対立機能の消滅、および中性の代名詞 *ce* がこの対立を示さないことなどが代名詞の対立機能消滅に大きく働いたと考え、つぎのように論ずる。

L'effacement de l'opposition proximité/éloignement chez les adjectifs, et peut-être aussi le fait que le pronom neutre *ce* ne marquait pas cette opposition, en ont provoqué la disparition chez les pronoms masculins et féminins également. Dans le fr. mod. littéraire, ce sont les formes de la série *cil* (*celui, celle, ceux, celles*) qui se sont maintenues, sans doute parce qu'elles étaient d'un emploi très fréquent comme pronoms déterminatifs.³⁹⁾

代名詞の使用に関し、*Marie* における *cil* 系列への著しい偏りを見ると、この PRICE の見解にも若干疑問は残る。*Lais* では171例の *cil* 系代名詞に比し、*cist* 系代名詞の使用は僅か3例に過ぎない。この現象を直ちに遠近対立を示す機能の弱化と結びつけることはできないが、形容詞においては少なくとも単数形で、*cist* 系列、*cil* 系列の頻度が接近していることを考慮すると、*Marie* の場合、対立を示す機能の弱化は、むしろ代名詞において先行しているようにも思えるのである。

また代名詞における遠近対立の弱化を窺わせるものとして、つぎのような用例も認められる。

Lur cunestable unt retenu

E tant des autres chevaliers —

Tuit en chargent lur esquières —

Vint e cinc furent *cil de ça*,

Trente en pristrent de *ceus de la*. (*Eliduc*, vv. 218-222)

指示詞が小辞 *ci* および *là* とともに用いられる時期が、遠近対立を示す機能を喪失した時期と一応考えることができるであろうが、この点から推して上例 *Eliduc*, v. 221 は遠称 *cil* が「こちら」を意味する *ça* とともに用いられており、v. 222 の *ceus de la* とともに近代フランス語の *ceux-ci*, *ceux-là* へと進む一段階を示しているようでもあり、*Marie* における代名詞の対立機能弱化を窺わせる興味深い用例といえよう。

古フランス語の指示詞の体系が崩れた原因としては、この他に、2格体系の崩壊と関連づけながら、一方では *cil* 系指示詞と人称代名詞との間に存在する並行関係 (*lui / celui*,

ele / cele, eus / ceus, etc.) が cil 系列を代名詞に向かわせたとする L. BLUM の説などが注目に値するといえよう⁴⁰⁾。

*
* *

この報告では12世紀末の *Lais* における指示詞の用法を検討し、その体系が崩壊して行く過程に目を向けてみたが、時代、地域、作者により、さまざまな様相を呈する古フランス語の *syntaxe* をこのささやかな調査で規定することは勿論不可能なことである。ここでは *Lais* に見られる指示詞の使用の特徴を以下に列挙することで結論としたい。

1. 使用されている指示詞は *cist* 系列と *cil* 系列に分離することができる。
2. *cist* 系指示詞は、その殆どが形容詞として用いられているが、*cil* 系指示詞は *ceus*, *celes* を除き、形容詞としても、また代名詞としても使用されている。*ceus*, *celes* は代名詞としての使用しか認められない。
3. 形容詞については、単数形において *ce* の使用は確認できず、遠近を示す機能はまだ保持されているようであるが、複数形では対立機能は消滅しているものと推測し得る。しかし小辞 *ci* あるいは *là* との併用例は存在しない。
4. 代名詞については、*cil* 系列に使用が著しい偏りを示し、遠近対立を示す機能の弱化が窺える。また関係詞節や前置詞 *de* 以下により意味が限定される用例も顕著である。
5. *cist* 系指示詞は会話体で、*cil* 系指示詞は物語体で多用されている。
6. 指示詞の格体系は比較的健在であり、*cist* に代わる *cest* の使用が稀に見られるに過ぎない。

[使用テキスト]

Marie de FRANCE, *Lais*, edited by Alfred EWERT, Basil Blackwell, Oxford, 1963.

2-3 前過去形について

近代フランス語における動詞の時称体系は整然としていて、各時称が有する機能も比較的明確に規定されている。しかしながら古フランス語の場合、動詞時称の機能を厳密に定めることが困難で、特に過去時称(単純過去、半過去、複合過去、大過去、前過去)に関しては、それぞれの差異を明瞭にし難い面がある。作者が過去に属する事柄を直説法を用

いて記述する際、上記5つの過去時称に現在形 (présent historique) をも交えて文章を綴っているが、時称の選択に関してはかなり恣意的な面も認められる⁴¹⁾。とりわけ大過去形と前過去形のニュアンスは、その境界が不明瞭で、今日の用法とは異なった様相を呈する。この点について DARMESTETER はつぎのように述べている。

This somewhat subtle distinction was also almost unknown until the 13th century; the special function of the 2nd pluperfect was not yet fully established, and it was constantly used instead of the 1st pluperfect.⁴²⁾

またこれに関連する FOULET の見解は以下のものである。

Ici encore il faut donc se garder de trop subtiliser : on ne se trompe guère à déclarer que le *plus-que-parfait* et le *passé antérieur* sont équivalents.⁴³⁾

ここでは Marie de FRANCE の *Lais* に現れる前過去形を大過去形と比較しながら考察することにより、作者が前過去形をどのように使用しているかを検討してみたい。なお当報告では *Lais* の Prologue および前半6編の物語 (*Guigemar, Equitan, Le Fresne, Bisclavret, Lanval, Les Deus Amanz*) を調査の対象とした。

*
* *

『フランス文法事典』によると、「前過去は大過去のように継続・反覆・習慣を表したり、描写に用いられることはない。行為の結果としての状態も表さない。(・・・)しかも、過去の行為の直前に完了した行為は大過去でも表されるから、前過去の使用は著しく制限されている。(・・・)過去の行為の遙か以前に完了した行為を前過去で表すこともできるが、一般には大過去が用いられる」⁴⁴⁾とある。前過去の用法がこのように狭い範囲に限定されるに至る過程、すなわち大過去との競合から分離に至る過程を2. 3の著書を引用しながら辿ってみると、まず BRUNOT はつぎのように論じている。

Pour l'antériorité dans le passé, le français a deux temps composés, le passé dit antérieur et le plus-que-parfait. En a. f. le premier était de beaucoup le plus fréquent.⁴⁵⁾

BRUNOT は古フランス語においては前過去形が遙かに頻度が高いと述べているが、半過去の発達に伴い、その複合時制である大過去も次第に前過去の領域を侵蝕していくのである。

Le développement du plus-que-parfait en AF est parallèle à celui de l'imparfait. Il apparaît surtout à partir de la fin du XII^e siècle. En MF il finira par l'emporter sur le passé antérieur.⁴⁶⁾ 中期フランス語の時期に大過去形が優勢となるが、これら2つの時称の用法もその頃には近代フランス語の方向へと明らかに向かっていたようである。

En moyen français, les deux temps s'acheminent déjà nettement vers l'emploi que chacun a en langue moderne.⁴⁷⁾

しかし16世紀においてもまだ、今日なら大過去にとって代わられるような若干の前過去

形の使用例が認められるようであり⁴⁸⁾、前過去の用法が確立することにより、大過去との分離が完了するのは古典期以降とみられる。

Depuis l'âge classique, les théoriciens ont essayé de marquer les différences d'emploi entre ces deux formes.⁴⁹⁾

HAASE もこれに関連し以下のように述べている。

Le passé antérieur et le plus-que-parait s'emploient au XVII^e siècle comme aujourd'hui. —

Le passé antérieur ne se substitue plus au plus-que-parfait ; cette construction ancienne tend à disparaître dès le XVI^e siècle.⁵⁰⁾

*
* *

調査の対象とした作品に認められる前過去形は53例、大過去形は34例であるから、前者が後者に比し頻繁に使用されていることが確かめられる。大過去形の使用が半過去形の発達と平行関係にあることは前述したが、半過去形が古フランス語の初期のテキストに稀にしか使用されていない事実に関して、MÉNARD はつぎのように論じている。

Dans les anciens textes l'imparfait est rare : on en compte seulement trois exemples dans les cinq cents premiers vers de la *Chanson de Roland*. Il se développe à la fin du XII^e siècle, et singulièrement dans les romans de Chrétien de Troyes : on dénombre plus de quarante imparfaits dans les cinq cents premiers vers d'*Erec et Enide*.⁵¹⁾

MÉNARD が提示した数値を *Lais* の場合と比較すると、*Lais* においては最初の500行に56例の半過去形が使用されている。この数字はほぼ同時代の Chrétien に比し、Marie の方がいっそう半過去形を頻繁に使用していることを示している。このことから *Lais* の大過去形の使用例34が前過去形の53例に比し、それ程少ないものではないということが推測できよう。

時況節において

Marie の場合、時況節中での前過去形は接続詞 *quant* の後に最も多く見られる。

Quant ceo ot dit, si suspira ; (*Equitan*, v. 89)

Quant il l'urent devant lui mise,

Ne se prist garde en nule guise. (*Bisclairet*, vv. 279-280)

Quant il l'orent bien esgardee

E sa beauté forment loëe,

Ele parla en teu mesure,

Kar de demurer nen ot cure : (*Lanval*, vv. 611-614)

Li damiseus, joius e liez,

Quant ariere fu repetiez,

Ne surjurnat pas en la tere. (*Les Deus Amanz*, vv. 143-145)

更に puis que (= fr. mod., depuis que) の後にも前過去形が用いられている。

Puis que ses dras li ot toluz,

Ne fud en sun país veüz ; (*Bisclavret*, vv. 271-272)

Cunfortez fu par la meschine,

Puis que perdue ot la reine. (*Les Deus Amanz*, vv. 23-24)

Or vus dirai de la meschine :

Puis que sun ami ot perdu,

Unkes si dolente ne fu ; (*Les Deus Amanz*, vv. 220-222)

以上は主節の単純過去形との関連において、それ以前に行われた行為を示す前過去形であり、近代フランス語の用法と近似しているが、すべてが必ずしも主節の動詞が示す動作の直前に完了した行為を表すものとは断定し難い。また主節の動詞の時制は単純過去形に限らず、現在形 (présent historique) や複合過去形との組み合わせも認められる。

[現在形との組み合わせ]

Quant fu venu termes e tens

Kë il aveit cage e sens,

Li reis le adube richement,

Armes li dune a sun talent. (*Gaugemar*, vv. 45-48)

Quant les deus parz fu munté sus,

Pur un petit qu'il ne chiet jus. (*Les Deus Amanz*, vv. 197-198)

[複合過去形との組み合わせ]

Quant la prière out finee,

Ariere sei se est regardee. (*Le Fresne*, vv. 165-166)

Quant le lit orent apresté,

Un covertur unt sus jeté. (*Ibid.*, vv. 397-398)

Quant del manger furent levé,

Sun cheval li unt amené ; (*Lawal*, vv. 189-190)

Quant el l'ot lit de chief en chief,

Ensemble od li l'a retenu

Tant que sun estre ad tut seü. (*Les Deus Amanz*, vv. 130-132)

quant に続く副詞節に大過去形が使用されている例はつぎに示す 1 例のみであり、puis que に続く大過去形は認められないことから、時況節中で過去における antériorité を示す場合は、もっぱら前過去の使用が好まれるようである。

Quant il li aveit tut cunté,

Enquis li ad e demaundé

S'il se despuille u vet vestu. (*Bisclavret*, vv. 67-69)

なお近代フランス語では、*dès que*, *aussitôt que* などに後続する前過去形がよく見られるが、調査したテキストでは *desque*, *si tost cum* に続く時況節中に前過去形が認められず、単純未来、単純過去、前未来といった時称が使用されている。

Mis sire e tut si parentez,
Certes, jamés ne me crerrunt,
Desque ceste aventure orrunt ; (*Le Fresne*, vv. 76-78)
Si tost cum il *vint* al paleis
E le Bisclavret le *aparceut*,
De plain esleis vers lui curut ; (*Bisclavret*, vv. 196-198)
Si tost cum il *pot* aver aise,
Tute sa tere li rendi ; (*Ibid.*, vv. 302-303)
Par mescines l'ad esforcié,
Un tel beivre li ad baillié,
Ja ne serat tant travaillez
Ne si ataint ne si chargiez,
Ne li refreschist tut le cors,
Neïs les vaines ne les os,
E qu'il nen ait tute vertu,
Si tost cum il l'*avra beü*. (*Les Deus Amanz*, vv. 133-140)

特に上記 *Bisclavret* に見られる 2 つの例は、主節の単純過去形に対して、*si tost cum* 以下がその直前の行為であるにもかかわらず、同様に単純過去形が使用されている。これは時況節の動作を完了のアスペクトで捉えようとする意図がない事例であり、近代フランス語にも時折認め得るものである⁵²⁾。しかし Marie の場合には *desque*, *si tost cum* が単純過去とは結合しても、前過去とは結合しないということから、前過去形と *antériorité immédiate* との関係が今日のフランス語ほど緊密ではないと推測し得る。

独立節・主節において

近代フランス語における前過去形は周知の如く主として従属節中で用いられ、独立節・主節での使用は稀で、一般には *vite*, *bientôt*, *en un moment* など時を示す状況補語を伴い、行為の急速な完了を表すために用いられるに過ぎない。Marie では約半数の前過去形が独立節・主節に使用されているが、行為の急速性を表すような副詞が伴う例はまったく認められない。

Cel jur meïsmè ainz relevee
Fu la dame el vergier alee ; (*Guigemar*, vv. 261-262)
L'abeesse li ot rendu,
E dist coment est avenu,

Quant primes li fu enveice :

Desus le freisne fu cuche ; (*Le Fresne*, vv. 295-298)

A grant merveille l'ot tenu

E mut le tient a grant chierté. (*Bisclavret*, vv. 168-169)

A sun ostel fu revenuz ; (*Lanval*, v. 333)

Atant furent celes venues,

Devant le rei sunt descendues. (*Lanval*, vv. 527-528)

しかし行為の急速性は状況補語によって示されるものであり、前過去それ自体は完了の aspekto を表すのであるから、本質的な機能に差異はないものと考えられよう。ただ近代フランス語においては、過去完了を表すのに多くの場合大過去形を使用し、前過去形の使用が一定の範囲内に制限されているのである。それでは、いずれも過去における完了の aspekto を表す前過去と大過去の本質的な相違はどこに存在するのであろうか。朝倉季雄氏は「大過去形は動作の完了した結果である状態の継続を表すのに対して、前過去形はその状態の開始点を表す・・・」⁵³⁾と説かれる。この点が古フランス語では必ずしも明瞭ではなく、大過去形と前過去形が競合しているのも、そのためのように思える。すなわち状態の継続を表すような前過去形も散見し得るのである。

Les plus bas membres out perduz :

Autrement ne fust pas creüz ; (*Guigemar*, vv. 257-258)

Un cher mantel de blanc hermine,

Covert de purpre alexandrine,

Ot pur le chaut sur li geté ;

Tut ot descobert le costé,

Le vis, le col e la peitrine ; (*Lanval*, vv. 101-105)

Li reis fu del bois repeiriez,

Mut out le jur esté haitiez. (*Ibid.*, vv. 311-312)

半過去形の発達が十分でなかった古フランス語では単純過去形が半過去形の領域をも侵蝕し、ときには状態や継続を表すが⁵⁴⁾、半過去形をかなり頻繁に使用している Marie においても、半過去の機能を有する単純過去形は随所に認められる。

En cel tens ánt Hoilas la tere,

Sovent en peis, sovent en guere. (*Guigemar*, vv. 27-28)

La dame ert bele durement

E de mut bon affeitement,

Gent cors out e bele faiture ; (*Equitan*, vv. 31-33)

Fiz a rei fu de haut parage,

Mes luin ert de sun heritage. (*Lanval*, vv. 27-28)

このような単純過去形と半過去形の用法上の混同が、それぞれの複合時称である前過去

形と大過去形の競合に関連していることは既に FOLET も指摘しているとおりである⁵⁵⁾。

なお調査の対象としたテキストに見られるすべての大過去形の約70%は主節・独立節に用いられているが、これらは近代フランス語の用法と特に顕著な相違はない。

Une pucele a sun servise
Li *aveit* sis sires *bailliee*,
Ki mult ert franche e enseigniee,
Sa niece, fille sa sorur. (*Guigemar*, vv. 246-249)
Si sire *ert mort*, enfant *aveit*
Petit en berz e aleitant. (*Le Fresne*, vv. 194-195)
Cil que li reis ci enveia,
Il sunt venu, si li unt dit
Que a la curt voise sanz respit :
Li reis *l'aveit* par eus *mandé*,
La reine l'out encusé. (*Lancel*, vv. 352-356)

ただ大過去形も前過去形同様、動作を完了のAspectで捉えるところに、その本質的機能が存在するのであるから、他の過去時称で表された動作よりも後に行われた動作を表すこともある。

La nuit, quant tut fu aseri,
Fors de la vile s'en eissi ;
En un grant chemin est entré,
Ki en la forest l'ad mené.
Par mi le bois sa veie tint,
Od tut l'enfant utré en vint ;
Unques del grant chemin ne eissi.
Bien loinz sur destre *aveit oï*
Chiens abaier e coks chanter : (*Le Fresne*, vv. 137-145)
Devers Seigne en la prairie
En la grant gent tut asemblee
Li reis ad sa fille menee.
N'ot drap vestu fors la chemise ;
Entre ses braz *l'aveit cil prise*. (*Les Deus Amanz*, vv. 170-174)

関係詞節において

関係詞節中に見られる前過去形は、今日なら大過去形にとって代わられるべきものであろうが、"ponctuel et perfectif" といった前過去特有のAspectはここでも明瞭に認められ

る。

Cil que le message ot porté
A sun seigneur ad tut cunté. (*Le Fresne*, vv. 57-58)
Nostre fille ai ci coneuë,
Que par ma folie oi perdue; (*Ibid.*, vv. 479-480)
Cil s'en alat ensemble od li,
Pur ki sun seigneur ot trahi. (*Bisclavret*, vv. 307-308)
Mes de ceo dunt il ot parlé
Reconut il la verité,
De l'amur dunt il se vanta; (*Lanval*, vv. 375-377)
Ariere chiet sur l'erbe drue
Delez la bise ke out ferue. (*Guigemar*, vv. 101-102)

関係詞節中に現れる大過去形は前過去形に比し少ないが、主なものを例示してみよう。

Des lais pensai k'oi aveie; (*Prologue*, v. 33)
La dame ad cil dunc espusee,
Que lungement aveit amee. (*Bisclavret*, vv. 133-134)
Le chevaler dunt jeo vus di,
Que tant aveit le rei servi,
Un jur munta sur sun destrer,
Si s'est alez esbaneer. (*Lanval*, vv. 39-42)

*
* *

当報告は調査範囲が限定されていて用例数も少なく、従ってこれをもとに古フランス語全般に通ずるような、なんらかの判断を下すことは避けなければならないであろう。ここでは単に当時の用法の一端を探るべく、Marie de FRANCEにおける前過去形を以下に整理してみよう。

	時況節	独立節・主節	関係詞節	その他 ⁵⁶⁾	Total
前過去形	14	27	9	3	53
大過去形	1	23	5	5	34

まず前過去形と大過去形の使用比率であるが、上表に示すとおり前過去形の使用に偏る傾向が見られる。しかしその比率は約3対2であるから、この時期では大過去形の使用もかなり多くなってきているといえよう。殊に独立節・主節での両時称は殆ど拮抗して使用

されている。しかし従属節で主節に対して *antériorité* を表す場合は前過去形が好まれ、特に時況節では殆ど前過去形が選択される⁵⁷⁾。そして時況節の前過去形に近代フランス語の用法に最も近いものを見出し得る。

また前過去形は *antériorité immédiate* を表すといわれるが、Marie の場合、*quant, puis que* に続く従属節中に前過去形を認め得るとも、*desque, si tost cum* などに続く用例が皆無であり、このことから前過去形が *antériorité immédiate* とはそれ程緊密に結合していないように思える。更に前過去形は独立節・主節で行為の急速な完了を表すともいわれるが、行為の急速性を表す副詞とともに使用された前過去形は認められず、逆に *lung tens, lungement* といった状況補語が伴う例すら見られるのである。

Lung tens l'ot garde e murie

E mut amee e mut cherie. (Le Fresne, vv. 101-102)

Lungement ot od lui esté,

Tant que li chevaler fiufé

A mut grant mal li aturnerent : (Ibid., vv. 313-315)

これによっても Marie の場合は、前過去形と行為の急速性とは関係が稀薄であるといえよう。

Marie における前過去形は上述したとおり、近代フランス語の用法とは若干異なった傾向を呈するのであるが、動作を完了の aspekto で捉えるという前過去形の本質的な機能は失われておらず、古フランス語の特徴が顕著に現れているといえよう。どちらも動作を完了の aspekto で捉えるところに、大過去形との混同が生じているのであろうが、助動詞として用いる単純過去と半過去の混同（単純過去による半過去領域の侵蝕）を考慮に入れば、当然の現象であるともいえよう。最後に会話体に見られる前過去形は 1 例のみであることから、作者はこの時称を主として物語体の部分に使用していることが確かめられる。

[使用テキスト]

Marie de FRANCE, *Lais*, edited by Alfred EWERT, Basil Blackwell, Oxford, 1963.

2-4 過去分詞の一致

近代フランス語の過去分詞の一致に関しては、代名詞の *en*、集合名詞（量の名詞）+ *de* + 名詞などが直接補語となる場合や、*croire*, *dire*, *trouver* などが直接補語の属詞を伴う場合において、一致、無変化の両例が認められるなど特別なケースが若干存在することは事実であるが⁵⁸⁾、その規則は概ね明確に規定されていて、問題を提起するような事例に出会うことは稀であるといえよう。しかし古フランス語についていうと問題は複雑で、Gérard MOIGNET もこのことに関連しつぎのように述べている。

Là où le participe passé est introduit par un auxiliaire, l'accord se fait ou non, selon des règles difficiles à déterminer.⁵⁹⁾

MOIGNET がいう「確定し難い規則」とはいかなるものであろうか。当報告では Marie de FRANCE の *Lais* に見られる過去分詞の用例を調査し、それらの一致の状況が12世紀ではどのようなものであったのか、また「確定し難い規則」をどの程度まで確定に近づけるのかを考察してみたい。なお古フランス語では、非人称構文における過去分詞は通常無変化であるため⁶⁰⁾、当報告においては考察の対象から除外した⁶¹⁾。また、過去分詞が付加形容詞および同格形容詞として使用されている事例も調査対象から除外した。

ESTREとともに

古フランス語においても近代フランス語と同様に、*estre* が助動詞として使用されるのは、一部の自動詞の完了相、他動詞の受動相、および代名動詞の完了相であるが、いずれの場合にも過去分詞の語尾が主語の性・数・格と一致するのが原則である⁶²⁾。格体系の存在する古フランス語では過去分詞も形容詞と同様に格変化をするので、この場合、主語が男性単数形であれば、その指標となる *-s*（または *-z*）が過去分詞に付加され、男性複数形では過去分詞が無変化となる。この格の一致といった現象が近代フランス語と最も異なる点であろう。ところで Marie における過去分詞の使用の状況を検討してみると、語尾の一致または不一致に関連があることが予想される要因がいくつか考えられる。その第一は押韻との関連であり、第二は語順との関連であり、第三は格体系の崩壊現象との関連である。それぞれの要因を上記の順序に従って考察していくこととする。

(1) 押韻との関連

作品は8音綴で平韻が用いられており、この形式は殆ど一貫して遵守されている。そこで *estre* とともに使用されている過去分詞の位置を調べてみると、598例中439例が、すなわち 3/4 近くが行末に位置していることがわかる。このことは過去分詞の語尾が押韻と重要な関連性を持っていることを示すものであろう。

a) 行末における一致の例

Quant ele est en la neif *entree*,

Devant le lit est *arestee*; (*Guigemar*, vv. 293-294)

Li produm esteit sus levez :

Pur deduire fu fors alez. (*Equitan*, vv. 277-278)

b) 行末における不一致の例

L'abbessse le comaundat

Que devaunt li seit *aporité*

Tut issi cum il fu trové. (*Le Fresne*, vv. 216-218)

Il est devant le rei *venu* ; (*Lamul*, v. 359)

c) 行末以外の位置における一致の例

Mut fu *preisez* par sa prüesce,

Par sun sen e par sa largesce ; (*Eliduc*, vv. 547-548)

L'aventure vus en dirai

E la cité vus numerai

U il fu *nez* e cum ot nun. (*Chaitivel*, vv. 3-5)

d) 行末以外の位置における不一致の例

Delez li s'est *cuché* al lit ; (*Yonec*, v. 166)

Quant les deus parz fu *munté* sus,

Pur un petit qu'il ne chiet jus. (*Les Deus Amanz*, vv. 197-198)

598例が上述の (a) ~ (d) にどのように分散しているかを数値で示すと以下のようになる。

a) 行末における一致 : 408例

b) 行末における不一致 : 31例

c) 行末以外の位置における一致 : 103例

d) 行末以外の位置における不一致 : 56例

上記の結果から過去分詞は行末では439例中408例、すなわち93%が主語に一致しているのに比し、逆に行末以外の位置では159例中103例、65%しか一致していないことが判明する。これは行末には押韻の必要性が存在することで、作者や copiste たちが特に過去分詞の語尾に注意を怠らなかつたことによるものではないかと思われる。

(2) 語順との関連

Philippe MÉNARD は *estre* とともに用いられる過去分詞の用法に関してつぎのような見解を述べている。

Il peut arriver que le participe jeté en tête reste invariable, soit pour des raisons métriques, soit parce que le sujet n'est pas encore présent à l'esprit au moment où le participe est énoncé.⁶³⁾

ここで主語、助動詞 *estre*、および過去分詞がどのような順序で並び得るかを示せば、多用な語順が存在する古フランス語においてはつぎのような語順を想定することができるであろう。この場合、状況補語など文の他の要素は一応考慮しないこととする。

- | | |
|------------------|-----------------|
| I. 主語—助動詞—過去分詞 | II. 主語—過去分詞—助動詞 |
| III. 助動詞—過去分詞—主語 | IV. 助動詞—主語—過去分詞 |
| V. 過去分詞—主語—助動詞 | VI. 過去分詞—助動詞—主語 |
| VII. 助動詞—過去分詞 | VIII. 過去分詞—助動詞 |

上記 8 種類の語順中、V の語順は調査対象には存在しない。また VII および VIII は、古フランス語では頻繁に認められる主語が言外に存在する文である。

- I. *Li reis s'en est turné atant.* (*Bislauret*, v. 161)
- II. *Le covertur tut sabelin*
Vols fu du purpre alexandrin. (*Guigemar*, vv. 181-182)
- III. *La fu ravi li dameiseaus.* (*Lamal*, v. 644)
- IV. *La fu la dame enclose e mise.* (*Guigemar*, v. 245)
- VI. *Escrit i est le nun sun pere*
E l'aventure de sa mere. (*Milun*, vv. 79-80)
- VII. *En sa cuntrec en est alez;* (*Cheurefoil*, v. 15)
- VIII. *Drescie s'est, cclui apele.* (*Eliduc*, v. 500)

そこで 598 例の過去分詞がどのような語順の中で使用されているかを示せば以下のようになる。

	I	II	III	IV	VI	VII	VIII	Total
一致の例	210	5	7	43	2	221	23	511
不一致の例	36	3	5	2	2	25	14	87
不一致の占める比率 %	14.6	37.5	41.7	4.4	50.0	10.2	37.8	14.5

(表 2—4.1)

前述の MÉNARD の見解は、VI、VIII の語順で過去分詞が無変化になり得ることを指摘したものであろうが、*Lais* においては僅少例ながら II、III、VI、VIII の語順において、すなわち主語が後置される構文、および過去分詞が助動詞に先行する構文で不一致となる傾向が顕著に認められる。

(3) 格体系の混乱との関連

Lucien FOULET は *estre* とともに用いられる過去分詞が主語に一致しない事例として、「屈折の誤り」を指摘している⁶⁴⁾、MOIGNET もまた同様のことを述べている⁶⁵⁾。格体系の混乱が始まる時期は地域によりかなり異なっているようであり、確定することは困難であるが、アングロ・ノルマン方言においては大陸の諸方言に先んじて混乱が始まり、13 世紀では既にその崩壊は完全なものになっていたといわれる⁶⁶⁾。調査の対象としたテキストもアングロ・ノルマン方言の写本をもとに校訂されたものであり、かなりの格の乱れが散見し得る。これを過去分詞について検討してみると、男性単数形ではその指標となる

-s (または -z) の脱落、男性複数形では逆に -s (または -z) の付加、すなわち主格形に替わる被制格形の使用が問題となる。

[男性単数形一致の例]

Li sires fu matin *levez*;

De alcr en bois s'est *aturnez*. (*Yonec*, vv. 53-54)

[男性単数形不一致の例]

Milun i est *alé* primers,

Que mut esteit bons chevalers. (*Milun*, vv. 391-392)

[男性複数形一致の例]

Al jur quant tuz furent *venu*,

Li damisels primer i fu ;

Sun beivre n'i ublia mie. (*Les Deus Amanz*, vv. 167-169)

[男性複数形不一致の例]

Mut se covrirent e garderent

Qu'il ne feussent *aparceüz*

Ne *desturbez* ne *mescreüz*. (*Laiistic*, vv. 30-32)

上記の例でも確認し得るとおり、当報告において男性形の一致例として扱うものは近代フランス語の観点からすれば不一致であり、逆に不一致の例として提示するものが近代の統語法では一致していることになる。しかし女性形においては近代フランス語と同様に性・数の一致のみが問題となる。

[女性単数形一致の例]

Asise se est devant le lit ;

E il l'*apele*, si li dit :

'*Amie*, u est ma dame *alee*?'

Pur quei est el si tost *levee*? (*Guigemar*, vv. 439-442)

[女性単数形不一致の例]

La dameisele prist l'enfant,

De la chambre s'en ist atant.

La nuit, quant tut fu aseri,

Fors de la vile s'en cissi ;

En un grant chemin est *entré*,

Ki en la forest l'ad mené. (*Le Fresne*, vv. 135-140)

[女性複数形一致の例]

Atant furent celes *venues*,

Devant le rei sunt *descendues*. (*Lanval*, vv. 527-528)

estre とともに使用されている過去分詞を性・数別に分類し、一致・不一致を比較する

と次に示す表 2-4.2 のようになるが、この結果を見ると、男性単数形および男性複数形での不一致が多く割合を占めていて、数の上でも女性形での不一致を圧倒していることが窺える。これは前述したとおり、格体系の混乱を如実に示すものであり、当時のアングロ・ノルマン方言の特徴といえよう。一方、女性形においては、単数形で語尾 *-e* の脱落による不一致が若干認められるが、複数形での不一致は皆無であり、比較的良好に一致していることが確認できる。

	<i>m. s.</i>	<i>f. s.</i>	<i>m. pl.</i>	<i>f. pl.</i>	Total
一致の例	291	140	70	10	511
不一致の例	58	11	18	0	87
不一致の占める比率%	16.6	7.3	20.5	0	14.5

(表 2-4.2)

AVOIR とともに

avoir とともに用いられる過去分詞に関しては、現在の一致の規則が定式化されたのは 16 世紀であるといわれている。詩人の MAROT が被制辞と過去分詞の位置関係を基準にして語尾の一致を決定すべきであると主張したことは周知の事実であろう⁶⁷⁾。MAROT の主張に異議を唱えた文法学者もいたし、実際には、この規則も当初はあまり拘束力を持たなかったようであるが、結局はこれが時代の流れとともに一般化していくこととなる⁶⁸⁾。

古フランス語においてはどのような状況であったのだろうか。これに関する MOIGNET の見解の要旨は以下のようなものである⁶⁹⁾。

- a) 主語とは一致しない。
- b) 目的語の位置に関係なく目的語に一致する。しかし特に目的語が後置される場合に無変化の例も見られる。また目的語が前置される場合でさえ無変化の例が認められる。
- c) *avoir* を助動詞にとる自動詞の過去分詞は無変化。

上記の (b) に関しては幾分歯切れの悪さが感じられるが、このあたりが MOIGNET のいう「確定し難い規則」に当たるのであろうか。

また MÉNARD は動詞 *avoir*、過去分詞、被制辞の 3 要素がどのように連続するかでいくつかの *séquence* (要素連続) を設定し、各 *séquence* における過去分詞一致の状況を以下のように分析している⁷⁰⁾。

Séquence 1 : 過去分詞 + 助動詞 + 被制辞

過去分詞は通常は被制辞に一致するが、ときには無変化。

Séquence 2 : 過去分詞 + 被制辞 + 助動詞、または被制辞 + 過去分詞 + 助動詞

詩作上の許容例を除き、過去分詞は被制辞に一致。

Séquence 3 : 被制辞 + 助動詞 + 過去分詞

過去分詞は通常は被制辞に一致し、無変化は稀。ただし韻律上の理由で無変化の場合もある。

Séquence 4 : 助動詞+被制辞+過去分詞

過去分詞は散文では常に被制辞に一致し、韻文でも多くの場合一致するが、韻律上の理由により例外もある。

Séquence 5 : 助動詞+過去分詞+被制辞

過去分詞は韻律上の理由で時折一致。しかし非常に早期より無変化の強い傾向が認められる。

MÉNARD は Séquence 5 の場合を除き、一致の傾向が強いと見ているようであるが、*Lais* においてはどのような状況になっているのであろうか。MOIGNET および MÉNARD の見解を参考にしつつ、主として語順との関連から考察することとする。

(1) 被制辞が過去分詞に対して前置

a) 被制辞が名詞の場合

被制辞が男性複数形および女性単・複数形の場合について74例の過去分詞を調査すると、無変化は6例に過ぎないことから、高い比率の過去分詞の一致が確認できる⁷¹⁾。無変化の例が僅少であるため即断はできないが、過去分詞と被制辞の位置する行が異なっていて、両要素が幾分なりとも分離したような様相を呈する構文で、また被制辞に限定詞が伴わない場合に過去分詞が無変化になる傾向が若干認められるようである。

Les traïturs ki l'encuserent
E empeïrent e medlerent
Aveit jelt fors del país
E en eissil a tuz jurs mis. (Eliduc, vv. 561-564)
Li reis ad plegges demandé. (Lanval, v. 397)
Quant il furent bien arivé,
Le pont mist jus, ancre ad geté. (Eliduc, vv. 869-870)

逆に被制辞と過去分詞が位置的に近いとき、また被制辞が所有形容詞や定冠詞で限定されているときには、過去分詞は被制辞に極めてよく一致することが確かめられる。

Quant il ad la parole oïe,
Duement la dame mercie : (Guigemar, vv. 359-360)
Yweins i est a lui alez,
Ses cumpainuns i ad menez. (Lanval, vv. 517-518)

なお特殊な例として、前置されている被制辞が男性単数形であるにもかかわらず、過去分詞に *-z* が付加されている例が認められる。これなども一種の格体系の混乱を示すものであろう。

Sun cunestable ad apelez
E hastivement comandez⁷²⁾

Que cunduit li appareillast

E ke le barun amenast, (*Eliduc*, vv. 121-124)

b) 被制辞が代名詞の場合

被制辞が男性複数形および女性単・複数形の場合について調査すると、96例の過去分詞は82例が一致していて、無変化は14例のみである。そして特に被制辞が関係代名詞の場合は12例中11例の一致が認められる。

[一致の例] : Il les unt prises par les mains ; (*Laual*, v. 251)

Pur ceo que tant vus ai amez,

Voil que mis doels seit remembrez ; (*Chaitivel*, vv. 201-202)

L'aventure ke avez oiez

Veraie fu, n'en dutez mie. (*Bisclartre*, vv. 315-316)

[無変化の例] : Treis jurs les unt tenu sur tere. (*Les Deus Amanz*, v. 235)

'Beaus fiz,' fet ele, 'avez oi

Cum Deus nus ad mené ici ! (*Yonec*, vv. 527-528)

Des lais pensai k'oi aveie ; (*Prologue*, v. 33)

ここでも特殊なケースとして、前置されている代名詞が男性単数形であるにもかかわらず、過去分詞に-zが付加された事例が2例認められる。

Le travers del bois est alez

Un vert chemin ki l' ad menez

Fors a la laundé ; en la plaigne (*Guigemar*, vv. 145-147)

Quant il fu venuz en eez,

A chevaler l' unt adubez. (*Yonec*, vv. 463-464)

(2) 被制辞が過去分詞に対して後置

ここでも被制辞が男性複数形と女性単・複数形の場合についてのみ比較してみると、一致が16例、無変化が17例で拮抗した数値を提示する⁷³⁾。この用例の総数から判断し得ることには限度があるが、いくつかの特徴的な現象をあげれば以下になるであろう。

過去分詞が助動詞と被制辞に先行する場合は7例中5例が一致し、特に〔過去分詞—被制辞—助動詞〕の語順ではすべてが一致で、〔過去分詞—助動詞—被制辞〕の語順では3例中2例が無変化となっている。

[一致の例] : Gardee l' ad a grant honur,

Mes tuz jurs la requist de amur. (*Guigemar*, vv. 833-834)

Cunfortez fu par la meschine,

Puis que perdue ot la reine. (*Les Deus Amanz*, vv. 23-24)

[無変化の例] : Discoveri ot la drüerie. (*Laual*, v. 336)

Dit vus en ai la verité

Del lai que j'ai ici cunté. (*Cheurefoil*, vv. 117-118)

所有形容詞で限定された被制辞が過去分詞の直後に置かれると、過去分詞は被制辞に一致する（例外は下記 *Eliduc*, v. 775 の 1 例のみ）。

Il s'esteit bien aparceüz

Qu'il aveit *perdue s'amie*; (*Lanval*, vv. 334-335)

Cil aveit tuz *changî ses dras*; (*Eliduc*, v. 775)

被制辞と過去分詞の行が異なる場合、過去分詞は無変化。

Quant li sires fu repeirez,

Que gueres n'esteit esluignez,

Cele li ad *dît e mustré*

Del chevalier *la verité*; (*Yonec*, vv. 279-282)

(3) 主語との一致

MOIGNET は「avoir とともに用いられる過去分詞は主語とは一致しない」⁷⁴⁾と述べている。事実 *Lais* に見られる殆どすべての過去分詞は主語とは一致していない。しかし、MOIGNET のこの見解とは異なる例外が若干例認められる。

Dormie aveit après mangier,

Si s'est alec esbanier,

Ensemblè od li la meschine. (*Guigemar*, vv. 263-265)

Li sires lur ad *otriez*. (*Yonec*, v. 494)

下記のように同じ動詞が他の箇所では無変化で用いられていることから判断すれば、上記の一致例などは作者による誤りか、copiste の誤写によるものとも考えられる。

'Deu,' fet ele, 'tant ai *dormi*!' (*Eliduc*, v. 1066)

Eliduc li ad *otrié*

E bonement *cungé doné*; (*Eliduc*, vv. 1131-1132)

(4) 不定法構文

過去分詞に不定詞が後続する場合、過去分詞の一致については規則は定まっていないといわれている⁷⁵⁾。このような場合、*Lais* においては殆どの過去分詞は無変化であるが、用例数が不十分で判断を下すことは困難であろう。あくまでも推測の域を出るものではないが、faire の過去分詞に不定詞が後続する場合についてのみ報告するにとどめる。

被制辞が不定法の直接目的語である場合は、前置・後置に関係なく過去分詞は無変化である。

Puis fist la chasse ensecler,

Tuz jurs l'ad *fet* od lui *porter*. (*Lailstic*, vv. 155-156)

Il ad *fet* *aporter* ses dras,

Un lit li funt ignelepas; (*Eliduc*, vv. 931-932)

被制辞が不定法の動作主である場合は、一致と無変化がともに認められる。

Puis l'ad *fete* de lui *partir*. (*Yonec*, v. 440)

La viellë ad fet lever sus

E après lui fermer les hus. (*Yonec*, vv. 55-56)

*
* *

古フランス語における過去分詞の一致の問題は複雑で、規則を確定することが困難な状況にある事実を確認したが、調査の対象とした *Lais* については、少なくともつぎのように結論づけることができるであろう。

まず *estre* とともに使用される過去分詞の語尾は格体系の混乱現象と最も深く関わっているといえる。主格に替わる被制格の使用は言語の近代への歩みを示す一つの過程であるが、これが同時に語尾の不一致と結合しているため、このテキストではかなりの混乱が認められるのである。不一致の例の87%が男性形によって占められていることがこの要因の大きさを証明するものであろう。またテキストが韻文であるため押韻の問題が微妙に関連していることも見逃せない。それは過去分詞が多く集中する行末において不一致の比率が低く、逆に行末以外の位置で高くなるという結果に見られるように、押韻の必要性が存在する行末の語尾にはよりいっそうの注意がおよんでいるものと推測し得る。語順との関連性は収集した用例数から即断はできないが、相対的に古フランス語では頻度の低い語順、すなわち主語の後置される語順および過去分詞が助動詞に先行する語順で過去分詞が不一致となる傾向があることは否定できない。

つぎに、*avoir* とともに使用される過去分詞の語尾については語順との関連が最も緊密である。すなわち被制辞が過去分詞に対して前置されると、88%が一致する。勿論この数値は男性単数形の一致例を除外したものである。しかし後置の場合は一致の例と無変化の例が相半ばする。こういった語順の要因に微妙に関わる複合的な要因が被制辞と過去分詞の間隔の大小、および被制辞に伴う限定要素の有無とその種類である。絶対的則則は存在しないことは当然であるが、この作品における一般的な傾向として、被制辞と過去分詞の間に文の他要素が介在し、その間隔が開けば開くほど過去分詞が無変化になる比率が高まるようであり、また一方、被制辞に対する定冠詞や所有形容詞の付加により、その限定の度合いが強まれば強まるほど、一致の比率が高くなるように思われる。

[使用テキスト]

Marie de FRANCE, *Lais*, edited by Alfred EWERT, Basil Blackwell, Oxford, 1963.

[第II部 註]

- 1) F. BRUNOT, *La Pensée et la langue*, 3^e éd., Paris, Masson, 1953, p. 494.
- 2) F. BRUNOT, *Ibid.*, pp. 494-495.
- 3) F. BRUNOT, *Ibid.*, p. 495.
- 4) F. BRUNOT, *Ibid.*, p. 496.
- 5) cf. W. von WARTBURG, *Évolution et structure de la langue française*, 7^e éd., Berne, A. Francke, 1965, p. 133.
- 6) 当報告では否定の副詞 *ne* が動詞や他の補足辞とともに否定表現を構成する場合についてのみ考察を行った。従って *non* および肯定文中に見られる *aucun, jamés, unques, nient* などは調査の対象から除外した。
- 7) *ne* < *lat. nec* は *Lais* に169例使用されている。
- 8) なお J. RYCHNER 校訂による "C. F. M. A." のテキストでは、会話体につきのような *pas* が認められるが、当報告で使用した EWERT の版ではこれが *nent* になっている。

Dame, fet il, *pas ne* vus ret / De mesprisun ne de mesfet, (*Eliduc*, vv. 727-728)
- 9) cf. Ph. MÉNARD, *Manuel d'ancien français*, 2^e éd., Bordeaux, SOBODI, 1968, p. 102.
- 10) *nient* については、*neent, nient, nent* と綴られる事例も認められる。
- 11) cf. G. PRICE, *The French language: present and past*, First published 1971 by Edward Arnold Ltd., London, p. 252.
- 12) *mes* については、*meis* あるいは *mais* の形で現れることもある。
- 13) *ne...mes* の否定に *unques* が伴う場合は、*unques, mes* がともに動詞および *ne* に対して前置されることが多い。
- 14) *jamés* は *jamais* と綴られることがある。
- 15) *unques* については、*unkes, unke, unc* などの形も使用される。
- 16) *gueres* は *guaires* と綴られることもある。
- 17) F. BRUNOT, *Histoire de la langue française*, 3^e éd., Paris, Armand Colin, 1924, Tome I, p. 258.
- 18) cf. A. DARMESTETER, *A Historical French Grammar*, London, MacMillan, 1934, p. 819.
- 19) cf. M. GREVISSE, *Le Bon Usage*, 8^e éd., Gembloux, J. Duculot, S.A., 1964, § 876.
- 20) cf. Oëz, seignurs, ke dit Marie, / Ki en sun tens *pas ne* s'oblie. (*Guigemar*, vv. 3-4)

Un en firent, ceo oi cunter, / Ki *ne fet mie* a ubliër, / D'Equitan que mut fu curteis, / Sire de Nauns, jostis' e reis. (*Equitan*, vv. 9-12)
- 21) この用例は主格の関係代名詞 *ki* が省略されているものと考えられる。
- 22) cf. M. GREVISSE, *op. cit.*, § 876.
- 23) cf. H. YVON, *Romania*, tome LXXX, 1959, pp. 63-78, tome LXXXI, 1960, pp. 99-111, pp. 296-307.
- 24) 遠称、近称は単に空間的な遠近を指示するだけではなく、時間的な、また心理的な遠近をも指示する。

- 25) 古フランス語の指示詞には、cist 系列 cil 系列とも icist, icest, icil, icel, etc. といった形態のものも見られるが、当報告では cist / icist, cil / icil, etc. を区別せずに取り扱った。
- 26) cf. G. MOIGNET, *Grammaire de l'ancien français*, Paris, Klincksieck, 1973, p. 153.
- 27) 主格の cist は単数・複数とも15世紀にはもはや使用されなくなるが、cil は celui に代わるものとして17世紀初頭まで存続する。cf. F. BRUNOT et Ch. BRUNEAU, *Précis de grammaire historique de la langue française*, Masson, et Cie, 1969, pp. 201-202.
- 28) cf. G. PRICE, *op. cit.*, p. 124.
- 29) cf. G. PRICE, 'La transformation du système français des démonstratifs' *Zeitschrift für romanische Philologie* 85, 1969, pp. 496-497.
- 30) cf. G. PRICE, *Ibid.*, p. 502.
- 31) この6例の中には、cist に代わり使用されている cest (主格に代わる被制格の使用) 3例も含まれる。
- 32) Kr. NYROP, *Grammaire historique, de la langue française*, Tome II, Copenhagen, Gyldendal, 1968, p. 419.
- 33) cf. G. PRICE, *op. cit.*, p. 494.
- 34) G. PRICE, *Ibid.*, p. 494.
- 35) cf. P. GUIRAUD, 'L'assiette du nom dans la Chanson de Roland, II. --- Le démonstratif' *Romania* 88, 1967, p. 62 : *cez* est l'unique adjectif aux cas-régime pluriels, il représente donc à la fois le pluriel de *cel* et de *cest*, celui de *cele* et de *ceste*.
cf. H. YVON, 'Étude de syntaxe historique --- cil et cist, articles démonstratifs ---', *Romania* 72, 1951, p. 153.
- 36) W. von WARTBURG, *op. cit.*, p. 133.
- 37) H. YVON, 'Essai de syntaxe historique --- cil et cist, pronoms démonstratifs ---', *Romania* 73, 1952, p. 461.
- 38) cf. G. PRICE, *op. cit.*, p. 503.
- 39) G. PRICE, *Ibid.*, p. 505.
- 40) cf. G. PRICE, *Ibid.*, p. 492.
- 41) cf. Kr. NYROP, *Grammaire historique de la langue française*, Copenhagen, Leipzig-Londres-New York-Paris, 1930, Tome VI, p. 287, p. 292.
- 42) A. DARMESTETER, *A Historical French Grammar*, London, MacMillan, 1922, p. 756.
- 43) L. FOULET, *Petite syntaxe de l'ancien français*, 3^e éd., Paris, Champion, 1966, § 327.
- 44) 朝倉季雄著、『フランス文法事典』、白水社、1955, p. 265.
- 45) F. BRUNOT, *op. cit.*, p. 764.
- 46) Ph. MÉNARD, *Manuel du français du moyen âge*, 1. *Syntaxe de l'ancien français*, Bordeaux, SOBODI, 1973, p. 142.
- 47) F. BRUNOT, *op. cit.*, p. 764.

48) cf. G. GOUGENHEIM, *Grammaire de la langue française du 16^e siècle*, nouvelle éd., Paris, Picard, 1973, p.135.

Dans certaines phrases, le passé antérieur serait aujourd'hui remplacé par le plus-que-parfait:
Il lui percea une bosse chancreuse qui le martyrisoit depuis le temps qu'ilz eurent passé Ancenis (Rabelais, *Gargantua*, 38); *Il n'eust achevé ce mot quand Panurge (...)* dist (Id., V, 18).

49) F. BRUNOT, *op. cit.*, p. 764.

50) A. HAASE, *Syntaxe française du XVII^e siècle*, 4^e éd., Paris, Delagrave, 1935, § 65.

51) Ph. MÉNARD, *op. cit.*, p. 139.

52) cf. 朝倉季雄編、『フランス語学文庫 8、動詞 I』、白水社、1964, p. 96.

53) 朝倉季雄編、*Ibid.*, p.122.

54) cf. L. FOULET, *op. cit.* § 326.

55) cf. L. FOULET, *Ibid.*, § 327.

56) 当報告では時況節、独立節・主節、関係詞節に見られる用例を検討したが、これらの節以外にも、名詞節その他に若干の前過去形、大過去形が認められる。それらは以下のとおりである。

前過去形：名詞節 1 例 (*Guigemar*, v. 603)、結果節 1 例 (*Bisclavret*, v. 143)、

原因節 1 例 (*Larwal*, v. 306)。

大過去形：名詞節 4 例 (*Le Fresne*, v. 82, v. 516, *Bisclavret*, v. 267, *Larwal*, v. 335)、

条件節 1 例 (*Equitan*, v. 125)。

57) ここでは大過去形との選択において前過去形が好まれるということであり、時況節の動作が主節に対して時間的に先行していても、継起的動作としての単純過去形も認められる。

Quant j'eo oī la destinee, / Hastivement del bois eissi. (*Guigemar*, vv. 326-327)

E quant de paumeisun leva, / Pur sun seignur tost enveia; (*Le Fresne*, vv. 453-454)

58) cf. M. GREVISSE, *op. cit.*, § 784-§ 798.

59) G. MOIGNET, *Grammaire de l'ancien français*, Paris, Klincksieck, 1973, p. 205.

60) cf. Ph. MÉNARD, *Syntaxe de l'ancien français*, Bordeaux, Éditions Bière, 1988, p. 176, p. 180.

61) 古フランス語ではときに 1 個の助動詞に、通常別々の異なった助動詞をとる 2 個の過去分詞が後続することがあるが、この場合も特殊な事例として第 2 の過去分詞は考察の対象から割愛した。

62) cf. G. MOIGNET, *op. cit.*, p. 205.

63) Ph. MÉNARD, *op. cit.*, p. 176.

64) cf. L. FOULET, *op. cit.*, § 143.

65) cf. G. MOIGNET, *op. cit.*, p. 205.

66) cf. M. K. POPE, *From Latin to Modern French with especial consideration of Anglo-Norman, Phonology and morphology*, Manchester University Press, 1973, § 1240.

67) cf. G. GOUGENHEIM, *op. cit.*, pp. 251-252.

68) F. BRUNOT, *op. cit.*, pp. 325-326.

68) cf. G. MOIGNET, *op. cit.*, pp. 206-207.

70) cf. Ph. MÉNARD, *op. cit.*, pp. 177-179.

71) 被制辞が並置されると、古フランス語では通常最も近いものに過去分詞が一致するので、つぎのような用例は当報告では男性単数の一致例として処理した。

Le drap e l'anel ai trové. (Le Fresne, v. 478)

S'onur e sun bien ad perdu, (Milun, v. 58)

また被制辞が、量の副詞+複数名詞で構成されていると、古フランス語では過去分詞が無変化の場合と、複数名詞との一致の例が見られるようであるが、当報告では下記のような該当例を考察の対象から割愛した。

Ainz que nul le sachet u oie, / Avrunt il mut de lur pruz fait. (Guigenar, vv. 524-525)

72) 過去分詞 *comandez* の直接目的は後続の名詞節であるから、この場合は間接目的かあるいは言外の主語に一致している特殊な事例で、*apelez* との押韻の必要性により生じたものであろう。

73) 被制辞が男性複数形の場合、*-s* でおわる過去分詞 (*mis, pris* など) については一致・無変化に分類することが不可能であるため、下記のような例は考察の対象から除外した。

De Eliduc forment se pleigneit, / Kar il quidout e si cremeit / Quë il eit mis en abandon / Ses chevaliers par traïsun. (Eliduc, vv. 229-232)

74) G. MOIGNET, *op. cit.*, p. 206.

75) cf. Ph. MÉNARD, *op. cit.*, p. 179.

第三部 文体・意味論的考察

3-1 Tutoiement と Vouvoiement

— Tiens ! C'est vous !

— Oui, c'est moi ! ... je voudrais, Rodolphe, vous demander un conseil.

— Vous n'avez pas changé, vous êtes toujours charmante!¹⁾

上記の会話は *Madame Bovary* 第3部第8章で、金策に奔走する主人公 Emma が、かつての愛人 Rodolphe を訪ねる場面の冒頭で交わされるやりとりであるが、この後 Rodolphe は Emma のもとを去ったことを弁解し、Emma は別離の苦しみを告白する。別れなかつた方がよかっただろうという彼女に対して、「うん... そうかも知れません！」と男が答えたとき、Emma はやにわに "Tu crois?" といいながら相手に近づき、溜め息まじりに "O Rodolphe ! si tu savais ! ... je t'ai bien aimé !" とつけ加える。Rodolphe も Emma の眼に浮かぶ涙を認めて、"Mais tu as pleuré ! Pourquoi?" と問うが、このやりとりで気づくことは、3年間の空白を経て再会した男女が *vous* を用いて会話を開始し、ややあって *tutoiement* に変わる点であろう。この変化は、一度は別れた2人が話している間に互いに打ち解け、かつて親密であったときと同じような心理状態になったことを示しているものと思える。

近代フランス語における *vous* から *tu*、あるいは *tu* から *vous* への転換は FLAUBERT の例に見る如く、発話者の意図や感情の変化をもって多くの場合説明がつくのであるが、古フランス語の場合は、必ずしも簡単には解決できないものを含んでいるようである。Lucien FOULET はこれに関して、"Ce qui surprend vraiment, c'est la facilité avec laquelle on passe du *tu* au *vous* et du *vous* au *tu*. (...) on n'attend pas qu'un jour, qu'une heure soit écoulée, c'est dans la même conversation, parfois dans la même phrase qu'on passe du *tu* au *vous* ou du *vous* au *tu*; pour un peu, on mettrait le pronom au singulier et le verbe au pluriel, ou inversement."²⁾ と述べている。FOULET 以外にも、この問題に触れている専門書は多く見られるが、その中のいくつかを紹介してみよう。

En anc. fr., on passait couramment — et sans aucune raison d'ordre affectif — du *tu* au *vous* et vice versa³⁾ (Maurice GREVISSE)

Vous est employé pour *tu* dès les plus anciens textes français. Toutefois, il faut remarquer que la vieille langue passe avec beaucoup plus d'aisance que la langue moderne, dans le même dialogue, du *vous* au *tu* et du *tu* au *vous*; ⁴⁾ (Arsène DARMESTETER)

Le mélange du *tu* et du *vous* « de politesse » n'est pas rare, même au cours de la même phrase :⁵⁾ (Gérard MOIGNET)

上記のような指摘以外にも、古フランス語のこの現象に言及する研究者は多数認められるが、現在までのところ、まだ問題は決定的には解明されていない。

当報告では12世紀末の *Marie de FRANCE* をとりあげ、*Lais* に見られる直接話法をすべて抽出し、*tutoiement* と *vouvoiement* がどのように使用されているか、また *tu* と *vous* が混在する

のはどのような場合かを調査し、あわせて混在の要因なども考察してみたい。もっともこの混在といった現象はかなり広範囲におよぶものであり、Marie の場合のみを調査することで、いまだ未解決の問題に大胆な結論を下すことはできないであろう。この報告は当時の状況の一端に探りを入れることで、今後の発展に期待するものである。

*
* *

1人の相手に対して語りかけるときに用いられる動詞の形態は、ラテン語では通常2人称単数形であったことはいうまでもない。しかしロマンス諸言語では、これがさまざまに変化したことを Kr. NYROP はつぎのように述べている。

Cet état de choses ne s'est pas conservé dans les langues romanes ; il a été modifié de plusieurs manières, et on a eu recours non seulement à la deuxième personne du pluriel, mais aussi à la troisième personne du singulier.⁶⁾

2人称複数形を1人の相手に対しても使用するようになる時期はかなり早く、Ferdinand BRUNOT によると、それは5世紀に遡る。

Pour témoigner du respect, on fait la substitution du pronom pluriel au pronom singulier de la même personne. (...) Cette 2^e personne plurielle est plus ancienne que le français. Au V^e s. de notre ère, les auteurs latins la considèrent comm une marque de respect.⁷⁾

フランス語においても既に *La Vie de Saint Alexis* に *tu* と *vous* の交替は認められるが、中世全般を通じてこの2つの代名詞が特に厳密な区別もなく用いられたことは、中期フランス語の *syntaxe* を記述した Rosalyn GARDNER および Marion GREENE の文法書からも窺い知ることができる。

In the fourteenth and fifteenth centuries *tu* and *vous* (singular) were used interchangeably. Some writers were apparently indifferent ; others would show a preference for one of the two forms but with no distinction made in their use.⁸⁾

文学作品で *tu* の使用が衰微し、*vous de politesse* が優位を示すようになるのは17世紀である。これには宮廷における風習が影響しているものといわれるが⁹⁾、同時にこの頃より *tu* および *vous de politesse* の機能も次第に明確化し、今日のような区別が確立していったものと思える。後の大革命の時代に *tutoiement* が平等性を象徴するものとなり、公民精神の現われとして一時期これを広めようとする動きもあったが、大きな変革をもたらすには至らなかった¹⁰⁾。

中世のフランス語における *tu* と *vous* の混在に多数の語学者が注目したことは前述したとおりであるが、この不可解な現象を前にして、要因を探求し解決を試みようとしたものは決して多くはない。Franz LEBSANFT はこの問題の研究を推し進めた稀少な研究者の1人であると思えるが、彼はこの分野に関する研究の経緯を "*Romania*" で詳述しているので、混在の問題についての主なる見解をいくつか紹介してみよう¹¹⁾。

まず第一に混在を論理的にも言語的にも「誤り」とする見方がある。これは Adolfo MUSSAFIA の見解であるが、彼はテキスト校訂者たちの修正を認めようとする立場にいたよ

うである。

第二の見解は単なる「誤り」ではなく「許容の範囲内での誤り」いわゆるレトリックでいう "licentia" に属するものであるとする Hugo ANDRESEN の考え方である。

Gaston PARIS は ANDRESEN の見解を否定し、混在を古フランス語における 1 つの事実とする見方を主張する。後に Victor SCHLIEBITZ も「当時のフランス語の状態」ということで混在を説明し、*tu* と *vous* による新しい体系が *tu* のみによる古い体系に対して完全には勝利していなかったと主張する。また後年 F. BAKOS もこの見解を踏襲することとなる。

*
* *

Marie の *Lais* に見られるすべての直接話法のうち、当報告で問題となる 2 人称形式（動詞、人称代名詞、所有詞）を含む文例が存在する個所を分類すると以下のようになる。

vouvoiement (*vous de politesse*) を含む個所：94例

tutoiement を含む個所：14例

tutoiement と vouvoiement (*vous de politesse*) が混在する個所：7例

なお上記の数値には、作者から読者（聞き手）への語りかけの部分や複数の人物を想定して使用されている 2 人称形式の文例は含まれていない。また発話が始まれば、それが終了するまでにいくつ文が存在しようとも、同一人物の発言であれば、これを 1 例として数えたものである。

Vouvoiement の優勢

Lais に見られる会話文は vouvoiement が中心をなし、tutoiement は僅少であることが前記の分類により判明したが、vouvoiement を含む文例は以下に示す94個所に認められる。

Prologue : vv. 43-56, *Guigemar* : vv. 311-336, 337-358, 445-453, 455-459, 501-506, 509-512, 513-526, 546-552, 553-556, 557-562, 668-673, 727-734, 791-794, 807-808, 816-819, 822-824, 836, 838-845, 847-852. *Equitan* : vv. 117-148, 150-176, 213-220, 222-228, 241-260, 269. *Le Fresne* : vv. 45-48, 107-116, 197-202, 277-288, 331-342, 422-426, 431-434, 461-464, 465-484, 490. *Bisclavret* : vv. 32-36, 39-41, 42-52, 53-56, 79-86, 111-116. *Lanval* : vv. 71-76, 110-116, 121-130, 143-150, 159-170, 263-268, 269-274, 277-286, 291-302, 363-370, 519-523. *Les Deus Amanz* : vv. 85-116, 185-187, 200. *Yonec* : vv. 121-134, 145-164, 177-179, 199-210, 243-252, 319-322, 401-409, 410-413, 527-532. *Laiistic* : vv. 105-110. *Milun* : vv. 67-86, 213-216, 427-430, 447-468, 499-502. *Chaitivel* : vv. 189-192, 193-204, 207-228. *Chevefoil* : vv. 77-78. *Eliduc* : vv. 163-164, 355-364, 367-377, 379-381, 421-430, 433-436, 450-454, 493-496, 519-530, 532-536, 633-640, 669-678, 679-682, 685-696, 727-739, 831-840, 843-846, 938-950, 1085-1102.

上記の個所に見られる vouvoiement は、その殆どが領主、騎士、貴婦人など王侯貴族の間で交わされる会話に認められるものであり、こういった人物たちが属するいわゆる上流階級においては、王が臣下の騎士に対するときも、夫婦や親子の間においてさえも、特別な

状況以外では通常 *vous* を用いて会話が進められる。

[騎士 → 貴婦人]

'Dame,' fet il, 'Jeo meorc pur *us* ;
Mis quors en est mut anguissus ;
Si *us* ne me *volez* guarir,
Dunc m'estuet il en fin murir.
Jo *us* requeor de drüerie ;
Bele, ne me *escundiez* mie !' (*Guigemar*, vv. 501-506)

[王 → 臣下の騎士]

'Vassal, *us* me *avez* mut mesfait !
Trop *comengastes* vilein plait
De mei hunir e aviler
E la reine lendengier.
Vanté *us estes* de folie :
Trop par est noble *vostre* amie,
Quant plus est bele sa meschine
E plus vaillanz que la reine.' (*Lancel*, vv. 363-370)

[夫 → 妻]

'Dame,' fet il, 'u *estes us* ?
Venez avant ! *Parlez* a nus !
J'ai le laüstic englué,
Pur quei *us avez* tant veillé.
Desor *poëz* gisir en peis :
Il ne *us* esveillerat meis.' (*Laüstic*, vv. 105-110)

[母 → 息子]

'Beaus fiz,' fet ele, '*avez* oi
Cum Deus nus ad mené ici !
C'est *vostre* pere que ici gist,
Que cist villarz a tort ocist.
Or *us* comant e rent s'espee :
Jeo l'ai asez lung tens garde.' (*Yonec*, vv. 527-532)

[父 → 娘]

'Dameisele, a cest chevaler
Us *dertiez* ben aquinter
E fere lui mut grant honur ;
Entre cinc cenz nen ad meilleur.' (*Eliduc*, vv. 493-496)

Tutoiement の使用

Lais における tutoiement は14箇所（次ページ表3—1.1参照）認められるが、vouvoiementに比し明らかに使用の状況が限定されていることが窺える。すなわち tutoiement の多くは、呪い、祈り、命令、感嘆、歎喜、憤慨など、ある種の精神的動揺を伴う状況において出現する傾向があるといえよう。

[下位の人物への命令]

従僕や召使への命令には tutoiement が頻繁に認められる。

'Amis,' fait il, 'va tost poignaut !

Fai mes compaignuns retourner ;

Kar jo voldrai od eus parler.' (*Guigemar*, vv. 134-136)

[感嘆・歎喜・憐憫]

'Tu es ma fille, bele amie !

De la pité kë ele en a

Ariere cheit, si se paura. (*Le Fresne*, vv. 450-452)

'E Deu !' fait il, 'cum sui gariz !

Par fei, amis, tu es mi fiz.

Pur *teï* trover e pur *teï* quere

Eissi uan fors de ma tere,' (*Milun*, vv. 473-476)

上記の2例はいずれも、出生直後に手放したわが子に長い年月を経て偶然めぐり会った母親および父親が感情をあらわに再会の喜びを表明する場面の tutoiement である。

[呪い・憤慨]

'Oï, lase ! jo sui ocise !

E tu, vassal, ki m'as nafree,

Tel seit la *tue* destinee :

Jamais n'*aies* tu medecine ! (*Guigemar*, vv. 106-109)

'Tu *paroles*, fet ele, 'en gas !

(...)

Jamés par *teï* ne par autrui,

De si que jeco paroge a lui,

Ne li vodrai rien demander ; (*Eliduc*, vv. 437-445)

上記 *Eliduc* の用例は *vous* を用いて会話を進めていた同一人物に対して、強い心理的動揺から突然 tutoiement へと変化する *Lais* においては稀少な例である。

[神への祈願]

'Deus,' fait ele, 'par *tun* seint nun,

Sire, si *ze* vient a pleisir,

Cest enfant *garde* de perir.' (*Le Fresne*, vv. 162-164)

	titre	vers	locuteur → allocataire	remarque
1	<i>Guigemar</i>	106-122	手負いの鹿 → Guigemar	騎士への呪詛、命令
2	<i>Guigemar</i>	134-136	Guigemar → 従僕	騎士から従僕への命令
3	<i>Le Fresne</i>	162-164	貴婦人の侍女 → 神	神への祈願
4	<i>Le Fresne</i>	420-421	Fresne の母 → 召使	貴婦人から召使への命令
5	<i>Le Fresne</i>	450	Fresne の母 → Fresne	わが子に再会したときの歓喜
6	<i>Lawal</i>	535-537	妖精の使者 → 王	王への命令と伝言
7	<i>Milun</i>	169-174	Milun → Milun の楯持ち	騎士から楯持ちへの命令
8	<i>Milun</i>	182-190	Milun の楯持ち → 城の門番	獵師を装う楯持ちの命令
9	<i>Milun</i>	192-196	城の門番 → Milun の楯持ち	依頼に対する回答
10	<i>Milun</i>	210-212	城主の奥方 → 従僕	貴婦人から従僕への命令
11	<i>Milun</i>	435-446	Milun → Milun の息子	命令、質問、感嘆
12	<i>Milun</i>	473-476	Milun → Milun の息子	わが子に再会したときの歓喜
13	<i>Eliduc</i>	437-448	Guiliadun → 召使	憤慨、動揺
14	<i>Eliduc</i>	1021-1028	Guildeftec → 従僕	貴婦人から従僕への質問

(表 3—1.1)

Tutoiement と Vouvoiement の混在

中世のフランス語に見られる特異な現象としてのいわゆる混在例は、Marie の場合下記のとおり僅少 7 例に過ぎない。ここでの共通性はやはり命令法の使用であり、すべての個所にそれが認められる。

	titre	vers	locuteur → allocataire	remarque
1	<i>Bisclavret</i>	71	Bisclavret の妻 → 夫	妻から夫への命令、詰問
2	<i>Bisclavret</i>	240-260	王の側近の賢者 → 王	命令、進言
3	<i>Bisclavret</i>	283-292	王の側近の賢者 → 王	命令、進言
4	<i>Lawal</i>	491-494	妖精の使者たち → 王	命令、伝言
5	<i>Lawal</i>	615-624	妖精 (貴婦人) → 王	事実関係の提示、命令
6	<i>Milun</i>	36-42	Milun → 領主の娘からの使者	騎士からの命令、依頼
7	<i>Eliduc</i>	1055-1056	Guildeftec → 従僕	貴婦人から従僕への命令

(表 3—1.2)

'Di mei, pur Deu, u sunt vos dras.' (*Bisclavret*, v. 71)

'Sire, ne fetes mie bien :
 Cist nel fereit sur nule rien,
 Que devant *vous* ses dras reveste
 Ne mut la semblance de beste.
 Ne savez mie que ceo munte :
 Mut durement en ad grant hunte.
 En *tes* chambres le *fai* mener
 E la despoille od lui porter ; (*Ibid.*, vv. 283-290)
 'Amis,' fet il, 'ore *entremet*
 Que a m'amie puisse parler
 E de nostre conseil celer.
 Mun anel de or li *porterez*
 E de meie part li *direz* :
 Quant li perra, si *vien* pur mei,
 E jeo irai ensemble od *teï*. (*Milun*, v. 36-42)
 La dame l'ad aparceüe ;
 Al vadlet crie : '*Retien* la !
 Getez, franc humme, mar se ira !' (*Eliduc*, vv. 1054-1056)

LEBSANFT は、「Le mélange du *tu* et du *vous*, on le sait bien, n'apparaît pas chez tous les auteurs avec la même fréquence.¹²⁾」と述べているが、Marie における 7 例という混在例が多いか少ないかは他の作者との比較の問題であり、即断はできない。しかしこの 7 例という数値は、*Lais* に見られる 2 人称形式を含む直接話法 115 例中の 6% に過ぎないことから、Marie の直接話法の中では頻度は低いといえるであろう。

混在が出現するのは Philippe MÉNARD も指摘するとおり¹³⁾、作者の繊細さの問題でもあるが、LEBSANFT は方言、特に graphie の問題もまた混在の危険性を増す要素となると論じている¹⁴⁾。動詞の 2 人称単数形と同複数形の区別が明確な方言については問題は少ないが、これが曖昧な方言に関しては copiste がいかに反応したか、また近代の刊行者たちが写本をどう解釈したかが大いに問題となる。これら如何で逆に混在が増加することにもなりかねない。混在を惹起する危険性がある場合として LEBSANFT は、特に 2 人称単数および複数の活用語尾が *-s* [s] と *-z* [ts] でしか対立していない場合を指摘する。北部方言でこの [ts] が [s] に変化したとき¹⁵⁾、*-z* と表記されていたものが *-s* に変わることによって単数・複数による区別を失う。また [ts] が [s] に変化した後も copiste が *-z* の表記を放棄せず、しかも [s] を表記するにあたり、なんら語源を考慮せず *-s* または *-z* を恣意的に使用するとき、混在の危険性はいっそう大きくなるが、こういった要因に基づく混在は殊にアングロ・ノルマン方言に起こるといわれている¹⁶⁾。また 2 人称単数命令形語末に見られる類推による *-s* (*s analogique*) も混乱の原因となるが、これは特に複数命令形語末にも *-s* の表記が現れるテキストで曖昧性を惹起する。このように音韻発達など言語上の進展や graphie の習慣も *tu* と

vous の混在を助長したと LEBSANFT は論じている¹⁷⁾。

Lais においては、音韻発達に基づく *graphie* の混乱に起因すると判断し得る混在例は存在しないが、写本により異なった解釈が可能となる個所が 2 例認められる。まず *Lawal*, vv. 491-494 について、H 写本に基づく A. EWERT 校訂のテキストはつぎの如く混在を提示している。

'Reis, *fai les chambres delivrer*

E de pailles encurtiner,

U ma dame puist descendre :

Ensemble od *us* veut ostel prendre.' (*Lawal*, vv. 491-494)

しかし v. 491 について、C 写本および P 写本は *faites chambres delivrer* といった variante を、S 写本は *fetes nos chambres livrer* といった variante を提示していることから¹⁸⁾、これらの写本においては混在ではなく、*vous de politese* の使用と解釈し得るであろう。また逆に *Lawal*, vv. 535-537 については、EWERT 校訂版および P 写本が *tutoiement* を提示しているのに対し、C, S 両写本では混在が認められる¹⁹⁾。このようにいくつかの写本を比較検討すると、*copiste* たちが混在の問題に関連し異なった反応を示すことがあり得る事実が窺える。

*
* *

Lais における直接話法を分析し検討を加えてきたが、以上の調査結果をもとに大略つぎのようなことがいえるのではないだろうか。

まず *tutoiement* が使用される状況は限られており、発話者に精神的な高揚ないしは緊張が認められるとき、すなわち命令、感嘆、感動、興奮など強いインパクトを受けたときに出現する傾向がある。また *Lais* においては稀ではあるが、平民たちの交わす会話や、上位の人物が下位の人物に語りかけるときなどでも *tutoiement* が使用されることが既に指摘されていることから²⁰⁾、発話者が精神的弛緩状態にあるときにも *tu* が出現する傾向があるものと推測し得る。

こういった緊張と弛緩の間、すなわちある種の自制が伴った精神状態においては *vouvoiement* が多用されるようであり、*Lais* においてもそれは極めて広範囲に認められる。これはこの作品が貴族社会での出来事を主たる題材としていて、この階級に属する人物たちの会話が主流をなすためであろう。この社会での会話は、その中での身分の上下には殆ど関係なく、通常 *vous* を用いて進められており、概ね一種の自制を伴ったものである様子が窺える。

tu と *vous* の混在については、Marie の場合、該当例が僅少で、調査範囲の拡大を要する問題ではあるが、次ページの図に示す如く発話者の心理に自制と緊張が、または自制と弛緩が微妙に交錯する状況において出現するものではないだろうか。勿論混在の要因としては LEBSANFT も指摘するとおり、音韻発達やそれに伴う *graphie* の変遷、また *copiste* の筆写の状況、校訂者の写本解釈なども看過すべきではないが、同時に、当時の言語においては *tu*

と *vous* の使用に関して明確な区別が確立しておらず、作者により下図において斜線で示した混在部分が微妙に変化していたものと思える。Marie の場合は、あるいは当報告で使用した EWERT 校訂のテキストの場合は、この混在の部分が比較的小さいと結論し得る。

弛緩 ←	自制	→ 緊張
tu	vous de politesse	tu

[使用テキスト]

Marie de FRANCE, *Lais*, edited by Alfred EWERT, Basil Blackwell, Oxford, 1963.

3—2 品質形容詞 "vermeil" について

われわれ人間は自然界に存在する事物をどのような色彩として捉えているのか、またその色彩をどのような語を用いていい表すのかは民族間で異なるようである。身近な例では、日本人が交通信号において「青」と表現するところのものを西欧人は "green" "vert" などの語を用いていい表す。また子供に太陽の絵を描かせると、日本の子供は多くの場合それを赤く塗りつぶすが、西欧の子供たちは黄色を用いて彩色するようである。このように事物の色彩の認識や表現の仕方は文化的背景に応じて微妙に異なる興味深い問題である。また同一民族に限定した場合でも、時間の流れの中で、色彩の認識や表現方法には変化はなかったであろうかという新たな問題も生じてくる。A. J. GREIMAS 編 *Dictionnaire de l'ancien français* の **bloi, blo, blef, blave** の項には、つぎのような記述が見られる。

Anc. formes du mot *bleu* qui ne renvoient pas à une teinte précise d'aujourd'hui. Souvent *blond, pâle, bleu, verdâtre*, etc.

bloi が必ずしも今日の *bleu* に正確に一致する色彩ではないことを上記の定義から推測し得るのであるが、当報告においては、古フランス語で色彩の「赤」を表現するときに頻繁に使用される形容詞である "vermeil" をとりあげ、それが Marie de FRANCE の *Lais* においてどのように用いられているのか、またこの形容詞が皮膚の色調、特に顔色を描写するときに使用される事例を考察し、それが「赤い」という表現に対してわれわれが持つイメージに

どの程度符合するものかを検討してみたい。

まず *vermeil* の語義であるが、前述の GREIMAS の辞書には rouge, rose といった語義が提示されているように、通常この形容詞は赤あるいはもう少し淡いピンク系の色調を指すものと思える。*Lais* においては5例のみ認められる用例中1例は傷口から流れ出る鮮血を形容するために使用されている。

(1) L'une le fiert par mi le cors,

Li sanc *vermeil* en eissi fors. (*Yonec*, vv. 311-312)

vermeil のこのような使用例は古フランス語においてはかなり頻繁に認められるものであり、次例(2), (3)についても、類似のものといえよう。

(2) Veez m'espee ki d'or est enherdie,

Si la tramist li amiralz de Primes.

Jo vos plevis qu'en *vermeil* sanc ert mise, (*La Chanson de Roland*, vv. 966-968)

(3) Li rois choisi el lit le sanc,

Vermel en furent li drap blanc, (*BÉROUL, Tristan*, vv. 767-768)

これらの例においては *vermeil* が鮮紅色ないしは深紅色といったかなり濃い色調の赤を示しているものと思える。

Lais に見られる *vermeil* のつぎなる使用例は野に咲く花の色彩を描写するためのものである。

(4) Od ses denz ad prise une flur,

Tute de *vermeille* colur; (*Eliuic*, vv. 1047-1048)

しかしこの使用例においては、花の種類が明示されていないこと、またたとえ花の名称がわかっている同一種の植物が、その個体に応じて種々の色調の花弁を持つということもあり得るゆえ、このような事例から、その正確な色合いを推測することは困難であるといえよう。

Lais における *vermeil* の他の使用例はいずれも女性の顔、あるいは皮膚の色を形容するために用いられているものである。

(5) De ceo li semblot grant merveille

K'il la veeit blanche e *vermeille*;

Unkes la colur ne perdi

Fors un petit que ele enpali. (*Eliuic*, vv. 971-974)

上記は仮死状態にある若い女性の皮膚の色艶を描写するものであるが、いくらか蒼ざめてはいるものの、依然としてその肌は少し赤みを帯びていて、この人物が完全に死んではいないことを示す場面である。ここでの *vermeil* は濃い赤色ではなく、淡い薄紅色を表示するものであろう。このようにこの形容詞が顔色や皮膚の色調を描写するのに用いられている文例は Marie de FRANCE 以外にも散見し得る。

(6) Plus ot que n'est la flors de lis

cler et blanc le front et le vis ;
sor la color, par grant mervoille,
d'une fresche color *vermoille*,
que Nature li ot donee,
estoit sa face anluminee. (*Erec et Enide*, vv. 427-432)

- (7) La face avoit, con une pome,
vermeille, et blanche tot entor ; (*Le Roman de la Rose*, vv. 802-803)

Lais に見られるつぎの 2 例も *vermeil* が女性の顔の色を描写するのに用いられているものであるが、これらについては若干の検討を要するであろう。

- (8) La dame volt turner en fuie ;
Si ele ad poür n'est mervoille ;
Tute en fu sa face *vermeille*. (*Guigemar*, vv. 270-272)

- (9) La dame oï cele mervoille,
De poür fu tute *vermeille* ;
De l'aventure se esfrea. (*Bisclavret*, vv. 97-99)

上記 (8), (9) はいずれもケルト伝説に由来する「驚異」と深く関る場面であるが、(8) は漕ぎ手の乗っていない船が港に漂着するのを見て、恐れを抱いた奥方が逃げ出そうとする場面であり、(9) は夫が狼男に変身することを初めて知った妻が恐怖に恐れおののく場面である。両例とも顔の色が *vermeil* になるとの記述が認められるが、これらは (1)~(7) で見てきた事例とは様相が異なるように思える。恐怖による顔面の紅潮はいかにも奇妙な現象のように思えるが、これは *Lais* に特有の表現であろうか。古フランス語の辞書としては権威のある TOBLER-LOMMATZSCH による *Altfanzösisches Wörterbuch* の *vermeil* の項には、*rot vor Angst* といった語義の提示の後に上掲 (8), (9) の用例が引用されているのであるが、BÉROUL の *Tristan* にも類似の文例が認められる。

- (10) Tristan, du cri qu'il ot, s'esvelle,
Tote la face avoit *vermeille* ;
Esfreez s'est, saut sus ses piez,
L'espee prent com home iriez,
Regarde el brant, l'osche ne voit ; (BÉROUL, *Tristan*, vv. 2077-2081)

顔や皮膚の色調は感情・情動の変化に応じて、いかに変化するのであろうか。ダーウィンはその著『人間と動物の表情』で各種の表情を記述しているが、安田一郎著『感情の心理学』から、それに関連する部分を引用してみよう。

彼（ダーウィン）は怒りの表情についてはつぎの特徴を挙げた。顔は赤くなるか紫色になり、前頭部と頸部の静脈が怒張する。しかし蒼白になることもある。胸はふくらみ、鼻孔は広がり、震える。口はかたく結ばれ、[中略]

これに対して、恐れるときには、目と口は大きく開かれ、眉は釣り上げられる。恐れている人は最初は彫像のように、身動きせず息をつめて立つか、見つからないよう

にしているかのように、うずくまる。心臓ははげしく鼓動し、皮膚は蒼白になる。これは皮膚の小動脈が収縮するためである²¹⁾。

このように恐怖に際しては、顔面が蒼白になるというのが一般的な現象であろう。しかし上記(8)、(9)の文例から判断すると、*Lais*に登場する女性たちはそのようには反応しないのであろうか。それとも *vermeil* がここでは(1)~(7)で見た色調とは異なった特別な色合いを示すのであろうか。顔色の冴えない様子を描写するときによく使用される形容詞は *pale* であるが、*Marie* にもこの語は時折認められる。

(11) *Pale le vit, mort le quida*; (*Guigemar*, v. 281)

(12) *Un poi de rasuagement*

Li tolist auques la dolor

Dunt il ot pale la colur. (*Ibid.*, vv. 422-424)

(13) *La dame fu pensive e pale.* (*Ibid.*, v. 764)

(14) *Desur sun vis chei paumee,*

Tute pale, desculturee. (*Eliiduc*, vv. 853-854)

上記4例以外にも、精神的な動揺に伴う顔面蒼白といった現象を観察し得る文例が2例認められるが、それらは以下のようなものである。

(15) *Palir la fist e suspirer,*

Mes nel volt mettré a reison,

Qu'il ne li turt a mesprisun. (*Eliiduc*, vv. 306-308)

(16) *Ainz qu'il li eüst tut mustré*

Ne cungé pris ne demandé,

Se pauma ele de dolor

E perdi tute sa culur. (*Ibid.*, vv. 659-662)

(11)~(16)の用例を検討すると、*Marie* においては、顔面蒼白といった身体的変化は恐怖よりも、むしろ苦悩や不安といった感情とより密接に結合しているように思える。

古来、人間は言葉を用いて意思の疎通を図り社会生活を営んできたのであるが、同時にまた表情によっても意思や感情が交換されてきたのも事実であろう。表情は感情の窓口のようなものであり、われわれは対話者の表情から、その人の感情を読み取ろうとする傾向がある。しかし残念ながら表情と感情の関係を取り扱った研究はそれほど多くはないようである。少々古い資料ではあるが、安井 洋著『表情と感情の研究』はこの問題を迫及した数少ない貴重な研究であろう。同書は表情を解釈するにあたり、感情の種類を以下のように大別している。

情緒なるものは之れを快方向の情緒と不快方向の情緒とに分かつて考へるべきもので、快方向には喜悅の情緒があり、不快方向には悲哀、忿怒、恐怖の三つの情緒があることになるのである。さて此の不快方向の三つの情緒について考へて見れば、此等は常に混合して存在する傾きがある²²⁾。

また同書は恐怖に際しての皮膚、殊に顔面の蒼白といった現象についてはつぎのように

説明している。

皮膚の蒼白は皮膚に於ける抹消血管の収縮によつて起るのであるが、其の結果として大量の血液を心臓に向かつて駆逐し、機械的に心動を亢進せしめ、血管収縮の影響を蒙らざる神経系統や筋肉に向かつて多量の血液を充溢せしむることになるのである。神経系統や筋肉に充血すれば其の機能の奮起を促し身体の収縮を破つて活動に転せしむることになる。即ち此の現象は恐怖に続いて起るべき闘争又は逃走の準備としての適応と看做すべきものである²⁹⁾。

以上の如くこの書物も基本的にはダーウィンの説を踏襲するものであると思えるが、恐怖の感情は単純なものではなく、それは殆ど常にさまざまな他の感情を伴って表出されるものであるといった点は注目に値するであろう。最近の研究では、赤外線サーモグラフィを使用して被験者の顔面の皮膚温度が快・不快の感情とどのような相関関係があるかを調べようとするものもあるようだが、まだ一貫した結果は得られていないようであり、表情のうちでも最も人間的な赤面をはじめとする顔色の変化と感情の関連については、心理生理学的研究が今後取り組むべき課題の一つであるらしい³⁰⁾。

人が恐怖を感じると交感神経が刺激され、副腎からはアドレナリンが分泌し、血流や心拍数が増加し、皮膚に粟立を起こして顔面が蒼白になるというのが一般的な現象ではあるが、人間の情緒は複雑なメカニズムに支配されていて、恐怖といっても常に恐怖の感情だけが表出するのではなく、大抵の場合は忿怒や悲哀、あるいは別のなんらかの感情がそれに伴っているものであり、このことは(10)に引用した文例からも推測し得るものであろう。発達した近代文学、とりわけ小説芸術の分野においては、登場人物の心の動揺は精緻な心理分析により詳細に追及されるのは通例のことであり、近代フランス語では顔面紅潮といった現象が恐怖や不安などの感情とともに現れるような表現もしばしばあるようだ。

(17) Mais Gertrude était devenue toute rouge et une sorte de terreur se manifestait sur son visage.

(Ponson du TERRAIL, *Rocamboles*, t.1(2), p. 349)

(18) Et moi-même, m'étant regardé dans le miroir, je vis que, jusqu'à mes oreilles et jusqu'au bout de mon nez, tout était rouge. Alors je fus effrayé ; mais au lieu de pâlir je devins encore plus rouge, et... (ERCKMANN-CHATRAIN, *Le Conscrit de 1813*, p. 49)

しかし中世文学においては、特に韻文による物語などは韻律上の制約もあり、人物の心理描写は現代の散文小説に比較すれば、必ずしも微に入り細を穿つといった程度にまでは至らないこともあり得る。従って(8)については、嫉妬深い老齢の夫に厳重に監視され、城中で幽閉同然の状態にある奥方が正体不明の船を認めて驚き、未知の人物に直面するかも知れないことへの羞恥心や、逃走することによって何かに頼ろうとする気持ちも伴う状況であろう。恐怖の中にも肉体の奮起を促す生理作用が無意識に働き、それが複雑な心理状態と互いに影響しあえば、顔面紅潮といった現象を引き起こすことも考えられる。(9)の場合も、夫の野獣への変身といった真相を知り驚愕する妻であるが、彼女の恐怖の感情の裏には結婚したことへの後悔、自らの境遇を顧みての羞恥、また自分を騙してきた夫に対す

る憎悪や怒りなど複雑な感情が交錯していると解釈することも可能である。羞恥や怒りには顔面を紅潮させる生理現象が伴うものであり、恐怖とともにそういった感情が表出されれば、場合によっては顔面の紅潮といった現象もあり得ると判断すべきであろう。

Marie の *Lais* に見られる 2 例の vermeil [用例 (8), (9)] は、複雑な人間の感情と、それに伴う生理現象という未解決の問題を含んでいるが、言葉の上には現れてこないような微妙な情緒の綾が *poür* (恐怖) といいた語の背後に、素朴な詩句の行間に隠されているものと考えらるなら、やはり顔面の紅潮時に認められる皮膚の赤みを帯びた色彩を表示しているものといえよう。

[使用テキスト・辞書]

Marie de FRANCE, *Lais*, edited by A. EWERT, Basil Blackwell, Oxford, 1963.

BÉROUL, *The Romance of Tristan*, edited by A. EWERT, Basil Blackwell, Oxford, 1971.

La Chanson de Roland, edited by F. WHITEHEAD, Basil, Blackwell, Oxford, 1970.

Chrétien de TROYES, *Erec et Enide*, publié par M. ROQUES, Coll. "C. F. M. A. 80", Honoré Champion, Paris, 1973.

Guillaume de LORRIS et Jean de MEUN, *Le Roman de la Rose*, Tome I, publié par F. LECOY, Coll. "C. F. M. A. 92", Honoré Champion, Paris, 1970.

DISCOTEXT 1, Textes Littéraires Français 1827-1923, CNRS-INaLF, Hachette Supérieur.

A. J. GREIMAS, *Dictionnaire de l'ancien français jusqu'au milieu du XIVe siècle*, Larousse.

TOBLER-LOMMATZSCH, *Altfranzösisches Wörterbuch*, Franz Steiner.

3-3 愛の葛藤の記述について

フランス中世文学のジャンルのひとつに *lais* が存在することは周知のとおりであるが、その始祖ともいわれる Marie de FRANCE の *Lais* ではさまざまな形態の愛がテーマとなっていて、現代に生きるわれわれにとってもいろいろと考えさせられる興味深い題材が取り扱われている。この作者の *Lais* に見られる愛の問題に関しては、過去にも極めて頻繁に論じられてはきたが、ここでまた改めてこの問題について論及するのは、Marie においては愛が最も重要なテーマであり、この課題を除外してこの作家について語ることはできないであろうと思えるからに他ならない。当報告においては、*Lais* における愛の葛藤の記述に認められる

古代作家、特に OVIDIUS の影響について考察するとともに、OVIDIUS を模倣しながらも他の多くの作品にも影響をおよぼしたといわれる *Le Roman d'Eneas* にも触れ、その記述と *Lais* の関連性についても検討を進めてみたい。

*
* *

Chrétien de TROYES は Arthur 王にまつわる種々の逸話を巧妙に展開して物語を組み立て、読者を引き付け導いていく見事な語り手であるが、これらはすべて作者自身が創出したものではなく、登場人物、出来事、主題、驚異などの多くは民間伝承やケルト伝説にその源泉を辿ることができる。このように中世の物語作家には多少なりとも無意識の、あるいは意識的ななんらかの模倣ないしは外部からの影響が認められるものである。Chrétien とほぼ同時代に作品を書いたであろうと考えられる Marie de FRANCE は *Lais* の *Prologue* において、ブルターニュに伝わる *lais* が「忘れ去られるに忍びず、それらを韻文の物語に」翻案する旨を明記している。従って Marie の場合は外部からの影響というよりも、むしろ自ら積極的にケルトの伝承を取り入れ、その流布に努めていることになるであろう。

Plusurs en ai oi conter,
Nes voil laisser nē oblier;
Rimez en ai e fait ditié,
Soventes fiez en ai veillié. (*Prologue*, vv.39-42)

また Marie は *Lais* を構成する 12 編の物語の殆どのものについても、冒頭または結末の部分で、その話の出所や背景となる場所などを明示するとともに、時にはブルターニュのことばによる元々のタイトルも紹介している。

Issi avient cum dit vus ai.
Li Bretun en firent un lai,
D'Equitan, cument il fina
E la dame que tant l'ama. (*Equitan*, vv.311-314)
Quant de lais faire m'entremet,
Ne voil ublier Bisclavret:
Bisclavret ad nun en bretan,
Garwaf l'apelent li Norman. (*Bisclavret*, vv.1-4)
Une aventure vus dirai,
Dunt li Bretun firent un lai;
Laüstic ad nun, ceo m'est vis,
Si l'apelent en lur païs;
Ceo est russignol en franceis
E nihtegale en dreit engleis.
En Seint Mallo en la cuntree

Ot une vile renuee. (*Lais*, vv.1-8)

Lais に見られるケルト的な要素としては、人間のことばを話す白い牝鹿、異界との境界を示す水の流れ、狼に変身する騎士、騎士を愛する妖精、鷹に変身して貴婦人に会いにくる騎士などを挙げるができるが、これらに類似するものは、ほぼ同時代の作者不詳の *Lais*²⁵⁾ にも認めることができる。

中世文学の作者たちは自説を展開するにつれ、頻りに聖書のことばや人物を引用したり、先立つ時代の作家や学者を引き合いに出すことがある。Chrétien は *Perceval* の冒頭で聖パウロに触れ²⁶⁾、Marie は *Lais* の *Prologue* で PRISCIANUS を引用しているのはその一例である。

Custume fu as anciens,
Ceo testimoine Preciens,
Es livres ke jadis feseient
Assez oscurement diseient
Pur ceus ki a venir esteient
E ki aprendre les deveient,
K'i peüssent gloser la lettre

E de lur sen le surplus mettre. (*Prologue*, vv.9-16)

このような引用は、すでに世に知られた人物の名前やことばで自らの作品を肉付けし、これを補強するための一種のレトリックとでもいうべきものであろう。

上記のように出典が明示されていて、明らかに異質な要素の意図的な導入が見取れる場合とは違って、古代作家の表現形式が巧みに取り入れられ、それが作品の所々に形を変え姿を現す場合がある。Pierre-Yves BADEL は中世文学作品の恋愛の苦悩の描写に見られる OVIDIUS の影響をつぎのように指摘している。

Enéas adapte Virgile, mais c'est à Ovide qu'il doit la peinture des tourments de l'amour. Chez Enéas, Didon et Lavine l'amour se trahit par des symptômes analogues. Comme une maladie il donne de la fièvre et des frissons, il fait rougir ou pâlir, pleurer et soupirer, crier et geindre, il ôte l'appétit comme le sommeil. Il suscite des délires et des rêves érotiques. Une telle imagerie a rencontré un grand succès chez les poètes lyriques et les romanciers du Moyen Age, qui l'empruntent à *Enéas* ou directement à *l'Art d'aimer* et aux *Héroïdes* d'Ovide.²⁷⁾

恋の苦しみは治療の対象となる一種の病であるとする考え方に中世の多くの作家たちは影響されたようで、さまざまな形態の恋愛をテーマに作品を綴った Marie もその例外ではない。こういった OVIDIUS の影響は Marie の場合、*Guigemar*、*Equitan*、*Lamal*、*Eliduc* といった物語にもっとも顕著に現れている。

*
* *

森の奥深く狩猟に出た騎士 Guigemar は一頭の白い牝鹿を射止めるが、放った矢が跳ね返ってきて自らの大腿部を貫通し重傷を負う。瀕死の牝鹿は Guigemar に向かって呪いのこ

とばを発し、彼への愛ゆえに苦しむ女性が現れて、傷の手当てをしない限りは、どんな医者も、いかなる薬も彼を癒すことはできないという。深手に苦しみながらも港まで辿りついた Guigemar を一艘の立派な船が見知らぬ土地に運んで行く。漂着した町を治める領主は老齢の嫉妬深い人物で、若くて美しく気品のある妻を娶ってはいたが、彼女を塔に幽閉し、常に監視の元に置いていた。幸運にもその奥方に保護され、傷の手当てを受けた Guigemar は一命を取りとめる。過去にはどのような女性に対してもまったく関心を示さなかった Guigemar ではあったが、美しい奥方に彼の心は動揺し、もはや傷の痛みすら感じない。彼は溜息をつき、奥方の姿が目に見えれば夜は不眠に苛まれる。

De sa plaie nul mal ne sent;
Mut suspire anguissement. (*Guigemar*, vv.383-384)
Tute la nuit ad si veillé
E suspiré e travaillé;
En sun queor alot recordant
Les paroles e le semblant,
Les oilz vairs e la bele buche,
Dunt la dolur al quor li tuche. (*Ibid.*, vv.411-416)

他方、奥方も Guigemar への愛に苦しみ、眠れぬ夜に呻吟する。

Par matinet einz l'ajurnee
Esteit la dame sus levee;
Veillé aveit, de ceo se pleint;
Ceo fet amur que la destreint. (*Ibid.*, vv.427-430)

Guigemar と奥方の人目を忍ぶ恋はある日嫉妬深い領主の差し向けた陰険な侍従により暴露され、二人の仲は引き裂かれる。Guigemar は国外に退去させられるが、彼の奥方に対する恋情はますます募るばかりである。

Li chevaler suspire e plure,
La dame regretout sovent
E prie Deu omnipotent
Qu'il li dunast hastive mort
E que jamés ne vienge a port,
S'il ne repeot aver s'amie,
K'il desirat plus que sa vie. (*Ibid.*, vv.622-628)

苦しみながらも二人の愛は成就し、この物語は幸福な結末を迎えることになるが、悲劇的に終わる *Equitan* の記述においても *OVIDIUS* の影響が認められる。

臣下として仕える家令の美しい妻に思いを寄せる領主の *Equitan* は道ならぬ恋の苦しみに悩まされ、夜は不眠が襲い、出るのはただ溜息ばかりといった状態が続く。

N'i ad mestier sens ne cointise;
Pur la dame l'ad si suspris,

Tut en est murnes e pensis.
 Or l'i estut del tut entendre,
 Ne se purrat niënt defendre:
 La nuit ne dort ne ne respouse,
 Mes sei meïsmes blasme e chose. (*Equitan*, vv.58-64)
 Quant ceo ot dit, si suspira;
 Enprès se jut e si pensa. (*Ibid.*, vv.89-90)

Equitanの執拗な懇願に家令の妻もついに屈服し、不倫の関係は暫く継続するが、こうなると二人にとっては家令が邪魔な存在となる。家令殺害を企む二人は熱湯の浴槽に過って彼が入ってしまうよう計画するが、逆に自分たちがその煮えたぎる湯に入り絶命する結果に終わる。

Marieの手になる12編の物語の中でArthur王伝説に由来するものは*Lanval*のみであるが、騎士と妖精の恋が描かれているこの物語においてもOvidiusの影響が顕著に認められる。

Arthur王の宮廷では不遇な騎士のLanvalは、ある日気晴らしに馬で出かけるが、偶然にも見知らぬ二人の女性に見事な造りの天幕へと案内され、そこで絶世の美女(妖精)に出会い求愛される。思いがけずも舞い込んできた幸運に有頂天となったLanvalは妖精との恋に耽るが、不幸はその後にやってくる。二人の関係は絶対に口外してはならないとの約束に反して、彼は王妃からの誘いを断るため困らずも妖精との恋を漏らしてしまう。禁忌を破り恋人との密会が不可能になったLanvalの苦悩を描写するのに作者はかなりの行数を費やしている。

En une chambre fu tut sulz,
 Pensis esteit e anguissus;
 S'amie apele mut sovent,
 Mes ceo ne li valut neent.
 Il se pleigneit e suspirot,
 D'ures en autres se pasmot;
 Puis li crie cent feiz merci
 Que ele parolt a sun ami.
 Sun quor e sa buche maudit;
 C'est merveille k'il ne s'ocit.
 Il ne seit tant crier ne braire
 Ne debate ne sei detraire
 Que ele en veulle merci avoir
 Sul tant que la puisse veoir. (*Lanval*, vv.337-350)

王妃を侮辱した罪状で訴えられたLanvalは法廷で窮地に陥るが、ついに彼の願いが通じたのか、宮廷に白馬に跨った妖精が現れ彼を救出する。Lanvalは恋人に連れられAvalonへと立ち去る。つまりこの世ではなく、死の世界において初めてLanvalは幸福を見出すこと

になる。

Ovidrus の影響が濃厚に認められる 4 つ目の物語は、12 の物語中最長の *Eliduc* である。

Eliduc は武勇に優れた騎士で、王の信頼も篤く貞淑な妻とともに平穩に過ごしていたが、彼の順境を羨む他人の妬みを買ひ、不当な中傷の犠牲となって国外退去を余儀なくされる。彼は妻を国に残して海を渡り、エクセター近辺のある領地に傭兵として身を落ち着けるが、その地の戦闘で自軍を指揮して勲功を立て、王の絶大なる信望を獲得する。そんな勇ましい武将に王の一人娘 *Guilliadon* はすっかり魅惑され、恋の炎を燃えたぎらせる。

La pucele ki l'ot veü
Vodra de lui fere sun dru.
Unques mes tant nul ne preisa;
Si ele peot, sil retendra.
Tute la nuit veillat issi,
Ne resposa ne ne dormi. (*Eliduc*, vv.327-332)

Guilliadon は相手に思いを伝えるべく従者に贈答品を届けさせるが、心は千路に乱れて落ち着きがない。

Lasse, cum est mis quors suspris
Pur un humme de autre país!
Ne sai s'il est de haute gent,
Si s'en irat hastivement;
Jeo remeindrai cume dolente. (*Ibid.*, vv.387-391)

一方、*Eliduc* も *Guilliadon* に会って以来すっかりその美しさの虜となり、彼女の姿が脳裡について離れない。しかし国に残してきた妻との約束を思うと安易に相手の愛を受け入れることもできず、彼はジレンマに陥る。

Unques n'ot joie ne delit,
Fors tant cum il pensa de li.
Mut se tencit a maubailli;
Kar a sa femme aveit premis,
Ainz qu'il turnast de sun país,
Quë il n'amereit si li nun.
Ore est sis quors en grant prisun.
Sa l'ëauté voleit garder;
Mes ne s'en peot nient oster
Quë il nen eimt la dameisele,
Guilliadun, que tant fu bele,
De li veer e de parler
E de baiser e de acoler;
Mes ja ne li querra amur

Ke li aturt a deshonur,
Tant pur sa femme garder fei,
Tant pur ceo qu'il est od le rei.
En grant peine fu Elidus. (*Ibid.*, vv.460-477)

*
* *

上述の4編に見られる恋愛葛藤の描写にはいくつかの共通点が認められる。それはまず男女のどちらかが相手を熟視し、その容貌の美しさに魅惑されると、恋の神 (Amur) がその人物を刺激することにより恋情が燃え上がるといった点に見られる。

Mes *amur* l'ot feru al vif;
Ja ert sis quors en grant estrif,
Kar la dame l'ad si nafré,
Tut ad sun país ublié. (*Gingemar.*, vv.379-382)
Mut la trova curteise e sage,
Bele de cors e de visage,
De bel semblant e enveisie;
Amurs l'ad mis a sa maisnie.
Une seete ad vers lui traite,
Que mut grant plaie li ad faite,
El quor li ad lancia e mise; (*Equitan*, vv.51-57)
Il l'esgarda, si la vit bele;
Amurs le puint de l'estencele,
Que sun quor alume e esprent. (*Lanval*, vv.117-119)
Icele l'ad mut esgardé,
Sun vis, sun cors e sun semblant;
Dit en lui n'at mesavenant,
Forment le prise en sun curage.
Amurs i lance sun message,
Que la somunt de lui amer;
Palir la fist e suspirer, (*Ehidus*, vv.300-306)

恋愛は Amour が放つ矢が命中することによって始まるとする記述は *Eneas* にも認められるが、その源泉は OVIDIUS など、遠くラテン語の詩作品にまで遡ることがすでに指摘されている。

Dans le roman d'*Eneas*, l'amour est l'oeuvre de l'Amour et l'Amour est un dieu. Il est représenté comme un archer dont les flèches font naître la passion. Cette manière de l'imaginer est constante dans la poésie érotique des latins, dans Catulle, Tibulle et Propertius comme dans Ovide.²⁸⁾

またAmourの持つ矢には2種類あり、先端が金のは情熱を掻き立て、鉛のものは恋の邪魔立てをする。

li un des darz est d'or en som,
qui fet amer, l'autre est de plom,
qui fet amer diversement. (*Eneas*, vv.7979-7981)

*Eneas*では上記のような記述が、8161-9行および8953行でも繰り返される。そしてその源泉はやはりOVIDIUSの*Métamorphoses*に求めることができる²⁹⁾。また*Eneas*に見られるAmourには自ら放った矢による傷を時には癒す行為も認められる³⁰⁾。しかし*Lais*の作者は、Amourの2種類の矢や傷の治療行為には言及していない。

一度火がつくと、その後はBODELも指摘するとおり、恋する人物は溜息をつき、顔は蒼ざめ、不眠に苛まれ、嘆き、悲しみ、時には叫び声を発し、一時の安らぎも得ることはできない。恋愛の苦悩がこのように病的な兆候を呈することについては、作者のMarieも作中でそれに触れ、恋は体内に負った傷で外部からは見えないが、長く尾を引く病であると述べている。

Amur est plaie dedenz cors,
E si ne piert nient defors.
Ceo est un mal que lunges tient,
Pur ceo que de nature vient; (*Gingemar*, vv.483-486)

*Eneas*に見られる恋愛葛藤の病的兆候についてはすでにEdmond FARALも指摘するところであるが、その様相は*Lais*の記述よりもいっそう誇張された感がある。

Une des singularités les plus notables d'*Eneas* est la description, souvent reprise, des effets de l'amour. Celui qui aime change de couleur et pâlit; il tremble, frémit, tressaille; il souffle, il bâille; il a froid et il transpire; il se pâme; il se «demente», soupire, pleure, geint, sanglote, se plaint, crie, vocifère; il perd le boire et le manger; il «se travaille» et songe; il veille, s'étire et se retourne sur son lit; il se démène, se «degete»; il est comme en rage.³¹⁾

恋する人物が上記のような兆候を呈する記述を*Eneas*に求めるなら枚挙に暇がないであろうが、敢えて若干の事例を示すなら、以下のような文例を挙げることができるであろう。

El lo regardoit par dotçor
si com la destreingnot Amor;
Amor la point, Amor l'argüe,
sovant sospire et color mue. (*Eneas*, vv.1201-1204)
Ne fust por rien qu'ele dormist;
tornot et retornot sovant,
ele se pasme et s'estant,
sofle, sospire et baaille,
molt se demeine et travaille,
tramble, fremist et si tressalt,

li cuers li mant et se li falt. (*Ibid.*, vv.1228-1234)

Ele comance a tressüer,
a refroidir et a trambler,
sovant se pasme et tressalt,
sanglot, fremist, li cuers li falt,
degiete soi, soffe, baaille:
bien l'a Amors mise an sa taille!
Crie et plore et gient et brait;
ne set ancor qui ce li fet,

qui son corage li comuet. (*Ibid.*, vv.8073-8081)

病的な症状を呈する恋の苦悩の描写については、作者が当時の医学書を利用したとする仮説が提示されたこともあったが³²⁾、このような記述はすでに OVIDIUS などのラテン語詩作品に認められるものである。OVIDIUS は恋愛に病 (*malum, morbus*) といった名称を付与し、恋する者、すなわち病人 (*aeger, languidus*) たちから情念を取り除くことが彼らを治療する (*sanare, curare*) ことであり、それには治療薬 (*remedia, medicinam*) の投与が必要であるとも述べている³³⁾。Eneas の作者が OVIDIUS から受け継いだものはこのような愛の概念だけではなく、このラテン詩人に見られる恋愛葛藤の描写に関する種々の要素をも継承したことはすでに Edmond FARAL が双方の作品を照合することにより明らかにしているので、ここではそれを割愛する。

Marie に見られる恋愛葛藤の描写は直接 OVIDIUS の記述に影響されたものか、あるいは Eneas を経由して受け継がれたものかは定かではない。ただ Marie が恐らく OVIDIUS を読んでいたであろう形跡は Guigemar に見られるつぎのような詩句にも認めることができる。

La chambre ert peinte tut entour:

Venus, la deuesse d'amur,
Fu tresbien mise en la peinture,
Les traiz mustrez e la nature
Cument hom deit amur tenir
E léalment e bien servir;
Le livre Ovide³⁴⁾, ou il enseine
Coment chascun s'amur estreine,
En un fu ardent le gettout
E tuz iceus escumengout
Ki ja mais cel livre lirreient

Ne sun enseignement fereient (*Guigemar*, vv.233-244)

また *Lais* には Eneas の詩句に見られる類似の表現が何箇所か認められることから、Marie は Eneas も恐らく知っていたであろうと推測し得る。

Lais

Un aigle d'or ot desus mis;
 De cel ne sai dire le pris,
 Ne des cordes ne des peissuns
 Que del tref tienent les giruns;
 (*Lanval*, vv.87-90)

Pur force e pur meintinement
 La dame en voil fere present,
 Que jeo ne scie desturbez,
 En cest pais achaisunez.
 (*Milun*, vv.187-190)

Le Roman d'Eneas

une aigle d'or ot an son mis
 que l'an veoit par lo pais.
 (vv.7321-7322)

Por force et por maintenant
 li envoia riche present,
 une corone et un mantel
 et un esceptre et un anel
 (vv.3133-3136)

*
 * *

本稿は、Marie de FRANCE の *Lais* に見られる恋愛葛藤の描写に OVIDIUS の影響がどの程度認められるかといった問題を中心に、OVIDIUS を模倣しながらも他の多くの作品にも影響をおよぼしたといわれる *Eneas* の記述にも触れ、相互の関連性についても考察したものである。*Eneas* や *Lais* が書かれた12世紀後半はいわゆる roman と称する俗語（フランス語）の物語が隆盛を迎える時期で、初期の作品はいずれも古代の出来事に題材を得た翻案であった。*Le Roman d'Alexandre* (1130-1190年) は Pseudo-Callisthène が源泉であり、*Le Roman de Thèbes* (1155年頃) は STATIUS の *Thébaïde* をモデルとし、*Le Roman d'Eneas* (1160年頃) は VERGILIUS の *Enéide* を翻案したものであり、Benoît de SAINTE-MAURE の *Le Roman de Troie* (1172年以前) はラテン語の資料をもとにトロイ戦争を物語にした作品で、WACE の *Le Roman de Brut* (1155年) も主として Geoffroy de MONMOUTH の *Historia regum Britanniae* の翻案である³⁵⁾。つまり roman とは元来ラテン語から俗語のロマン語（フランス語）に翻訳した作品であったが、これが後に意味が拡大し、このことばで書かれた物語を指し示すに至ったことは周知のとおりである。Marie の *Lais* も源泉こそ上記の諸作品とは異なるにせよ、ブルターニュに伝わる歌謡作品の *lais* を俗語に翻案したという点においては時流に沿ったものであったといえよう。

このような時代背景を考慮するなら、*Eneas* は直接のモデルである VERGILIUS の影響をもっとも強く受けているのではないかと考えられるが、この翻案は原作からかなりかけ離れたものとなっている。翻案者は原作を思い切って削除し、合理化すべき点は合理化していわば接木の台木をつくりあげ、それに時代の趣向に合致した OVIDIUS の恋愛の理論を接穂として挿入したのである³⁶⁾。OVIDIUS は12世紀では一般に修辞法の手本とすべき詩人と見なされており、人々は好んでその巧みな筆法を学んだといわれる³⁷⁾。従って *Eneas* の翻案者のみならず、他の多くの作家にも強い影響を与えたということは疑う余地がない。また一方 *Eneas* が大きな成功を収めたことで、これを模倣する作品がその後に出し、多くの作

家は源泉の OVIDIUS にまで遡ることなく、*Eneas* を模倣するにとどめた³⁸⁾。その結果 OVIDIUS は間接的にもフランス中世文学に影響をおよぼしたといえる。

Marie の *Lais* に見られる恋愛葛藤の描写は直接 OVIDIUS の影響によるものか、または *Eneas* を経由して受け継がれたものかは当報告の資料だけでは即断できないであろう。しかし *Eneas* の成立時期が1160年前後で、*Lais* が編まれたのが1170年前後といった年号も考慮に入れて判断するなら、Marie も当時の他の作家たちと同様に *Eneas* の強い影響下にあったことは否定できないであろう。

[使用テキスト]

Marie de FRANCE, *Lais*, edited by Alfred EWERT, Oxford, Basil Blackwell, 1963.

Le Roman d'Eneas, édité par J.-J. SALVERDA DE GRAVE, "C. F. M. A.", Paris, Champion, Tome I, 1964, Tome II 1929.

[第三部 註]

- 1) G. FLAUBERT, *Madame Bovary*, Paris, Garnier Frères, 1966, p. 287.
- 2) L. FOULET, *Petite syntaxe de l'ancien français*, 3^e éd., Paris, Champion, 1966, § 289.
- 3) M. GREVISSE, *Le Bon usage*, 12^e éd., refondue par A. GOOSE, Paris-Gembloux, Duculot, 1986, § 631.
- 4) A. DARMESTETER, *Cours de grammaire historique de la langue française*, 4^e partie : *Syntaxe*, 6^e éd., Paris, Delagrave, p. 55.
- 5) G. MOIGNET, *Grammaire de l'ancien français, Morphologie — Syntaxe*, Paris, Klincksieck, 1973, p. 263.
- 6) Kt. NYROP, *Grammaire historique de la langue française*, Tome V, Copenhague, Gyldendalske Boghandl Nordisk Forlag, 1925, p. 229.
- 7) F. BRUNOT, *La Pensée et la langue*, 3^e éd., Paris, Masson, 1953, p. 271.
- 8) R. GARDNER & M. A. GREENE, *A brief description of Middle French syntax*, Chapel Hill, The University of North Carolina Press, 1958, p. 90.
- 9) cf. Kt. NYROP, *op. cit.*, p. 283.
- 10) cf. F. BRUNOT, *op. cit.*, p. 272.
- 11) cf. F. LEBSANFT, *Le problème du mélange du "tu" et du "vous" en ancien français* in *Romania*, Tome 108, Paris, Société des amis de la Roumanie, 1987, pp. 4-9.
- 12) F. LEBSANFT, *Ibid.*, p. 9.
- 13) cf. Ph. MÉNARD, *Manuel du français du moyen âge, 1. syntaxe de l'ancien français*, nouvelle éd., Bordeaux, SOBODI, 1973, p. 76.
- 14) cf. F. LEBSANFT, *op. cit.*, p.9.
- 15) cf. M. K. POPE, *From Latin to Modern French with especial consideration of Anglo-Norman, Phonology and morphology*, Manchester University Press, 1973, § 194, § 195.
- 16) cf. F. LEBSANFT, *op. cit.*, p. 11.
- 17) cf. F. LEBSANFT, *Ibid.*, p. 19.
- 18) cf. *Les Lais de Marie de FRANCE*, publié par Jean RYCHNER, "C. F. M. A. 93", Paris, Champion, 1971, p. 217.
- 19) cf. *Ibid.*, p. 218.
- 20) cf. Ph. MÉNARD, *op. cit.*, p.76. G. MOIGET, *op. cit.*, p. 262.
- 21) 安田一郎著、『感情の心理学 — 脳と情動 一』、青土社、1993年2月発行、pp. 162-163.
- 22) 安井 洋著、『表情と感情の研究』、南江堂書店、昭和5年6月発行、p. 4.
- 23) 安井 洋著、同上書、p. 64.
- 24) 吉川左紀子、益谷 真、中村 真共編、『顔と心 — 顔の心理学入門 一』、サイエンス社、1993年9月発行、p. 161 参照。
- 25) cf. Prudence Mary d'OHARA TOBIN, *Les lais anonymes des XII^e et XIII^e siècles*, Genève, Droz,

1976.

- 26) cf. *Les romans de Chrétien de TROYES, V. Le conte du Graal*, "C. F. M. A.", Paris, Champion, 1983, vv. 47-50.
- 27) Pierre-Yves BADEL, *Introduction à la vie littéraire du Moyen Age*, Paris, Dunod, 1997, p. 117.
- 28) Edmond FARAL, «Ovide et quelques romans français du XIIe siècle», dans *Recherches sur les sources latines des contes et romans courtois du Moyen Age*, Paris, Champion, 1983, p. 143.
- 29) cf. Edmond FARAL, *Ibid.*, p. 144.
- 30) cf. Edmond FARAL, *Ibid.*, pp. 144-145.
- 31) Edmond FARAL, *Ibid.*, pp. 133-134.
- 32) cf. Edmond FARAL, *Ibid.*, p. 135.
- 33) cf. Edmond FARAL, *Ibid.*, p. 135.
- 34) この書物は *Remedia Amoris* であると思える。
- 35) cf. Michel ZINK, *Introduction à la littérature française du Moyen Age*, Le Livre de Poche, Librairie Générale Française, 1993, pp. 61-65.
- 36) cf. 三木 治、『中世フランス文学の研究』、「エネアス物語」、三木 治先生著作刊行会、昭和52年、p. 38.
- 37) cf. Edmond FARAL, *op. cit.*, pp. 150-151.
- 38) cf. Edmond FARAL, *Ibid.*, p. 155.

結語

1515年に即位した François 1世は学者や芸術家を庇護しフランスにおけるルネッサンスの発展に寄与した国王として知られる。またこの時代にはユマニストと呼ばれる人文学者たちが自国語の重要性を認め、ラテン語に代わりフランス語が公文書においても使用される機会が次第に増大していく。これに伴い幾種類かの文法書やフランス語辞典も刊行され、カトリック教会の妨害にもかかわらず、聖書や学術書が仏訳されたりもする。後に国際的な言語として外交の表舞台に登場する近代フランス語は、このように16世紀から徐々にその成立の準備がなされていたといえよう。古典主義時代以降の優れた作家のいわゆる名文は、表現や用語の細部に至るまで配慮が行き届いていて見事に構成されており、まさしくフランスの宮殿建築に見られるような美しさが存在する。しかしながら中世に目を転ずるならば言語の機相は一変する。音韻、形態、統語などの方野にも統一性は見出し難い。そこにはテキストの数だけ文法が存在するといっても過言ではないであろう。もっとも歴史学者は西ローマ帝国の滅亡(476年)からコンスタンティノーブル陥落(1453年)に至る約千年間を中世とするのであるから、それを一括して論議すること自体に無理があるといえよう。この小論は中世という長い期間の極めて限定された一時期におけるフランス語の状況に探りを入れようとするものである。

本論はまず構文に関する分析から考察を始めたが、名詞や形容詞に格体系が存在する古フランス語においては、かなり自由な語順が許容される。使用される語順の類型には頻度差が認められるものの、格体系の混乱現象と語順選択の相関関係は稀薄であるとの結果が得られた。また主語の有無が語順を決定する一要因でもあるが、*Lais*においては主語人称代名詞が特に物語体の部分で不在の傾向が顕著に認められる。更には3人称で不在が多く、1・2人称単数で使用が頻繁で、独立節・主節におけるよりも従属節での頻度が高い。

付加形容詞の位置に関しては、使用頻度の高い形容詞ほど前置使用への偏りが認められるが、これらも他の付加形容詞と併用されると後置に回る傾向がある。後置を好む形容詞は種々の意味分野に広く分布していて、それらには名詞を詳細に定義づける機能を認めることができる。疑問文における非強勢代名詞の位置については、制作時期が古いテキストほど動詞に対して後置されることが頻繁で、13世紀頃を分岐点として徐々に前置例が増加し始める。一般的には、文頭に副詞などが存在する場合は12世紀以前の作品でも前置が好まれるようであり、かかる要素が文頭に不在の場合は、[動詞 - 非強勢代名詞 - 主語]または[主語 - 非強勢代名詞 - 動詞]といった語順が多く使用されることが確かめられる。

*Lais*と*Fables*において、接続詞"Si"により導入される条件文を分析すると、同一作家の手になる両作品も極めて対照的な相違を提示する。すなわち主として王侯貴族の宮廷生活を題材とする*Lais*では、前提節と帰結節に接続法半過去を使用した伝統的な旧タイプの条件文が多く用いられており、イソップに由来する寓話集の*Fables*では新しいタイプの条件文が多用されている事実が判明する。

否定表現の形式は多様性に富むが、*Lais*に見られる否定文を分析した結果、近代フランス

語で最も広く使用される *ne... pas* による否定は全体の6%にも達せず、また1例しか認められない *ne... point* による否定も極めて稀な存在であることが確かめられる。*ne* に付加される補足辞は *pas, mie, nient, nul, ja, jamés, unques* 等、多数使用されていて、その頻度はかなり平均化している。否定の諸形式の中で最も好まれるタイプは *ne* の単独否定であり、全体の約半数におよぶ。

指示詞は近称の *cist* 系列と遠称の *cil* 系列に区分し得るが、*Lais* においては、*cist* 系指示詞は殆どが形容詞として用いられており、*cil* 系指示詞は *ceus, celes* が代名詞として、それ以外は形容詞としてもまた代名詞としても使用されている。指示形容詞については、単数形で遠近対立の機能は保持されているが、複数形では消滅しているものと推測し得る。指示代名詞については、使用が *cil* 系列に著しく偏っていて、遠近対立機能の弱화가窺える。また *cist* 系指示詞は会話体で、*cil* 系指示詞は物語体で多用されている。

前過去形と大過去形の機能に関する微妙な差異は見出しにくい、*Lais* においては時況節で主節の行為に対する先行性を示す前過去形が頻繁に認められる。しかし近代フランス語と異なり、それが直前の先行性であるとは限らず、むしろ直前性との関係は稀薄である。また独立節・主節における前過去形の用法も行為の急速性とは結びついていないことが確認できる。

estre とともに使用される過去分詞の語尾は格体系の混乱現象と緊密に関連していて、主語の性・数・格に一致しない過去分詞の多くは男性単数形によって占められている。またこの問題は押韻とも関連しており、行末では不一致の比率が低く、行末以外の位置では逆に高くなる。*avoir* とともに使用される過去分詞の語尾は、語順に深く関連している。すなわち被制辞が過去分詞に対して前置されると一致の比率が高くなり、後置されると一致・不一致が拮抗する。更に被制辞と過去分詞の間に文の他要素が介在し、その間隔が開くほど不一致の比率が高くなり、被制辞に対する限定の度合いが強くなるほど一致の比率が高まるようである。

近代フランス語における *tutoiement* と *vouvoiement* は対話者との親密度に応じて使い分けられるが、*Lais* における直接話法を分析すると、*tu* は限られた状況でしか使用されないことが判明する。それは「命令」「感嘆」「感動」「興奮」など発話者が精神的緊張状態にあるとき、下位の人物に対する語りかけや平民同士の打ち解けた会話など、精神的弛緩状態にあるときなどに出現しやすい傾向がある。ある種の自制を伴った精神状態では *vous de politesse* が多用されるようであり、*Lais* においてもこれが広範囲に認められる。同一の相手に対する *tu* と *vous de politesse* の混在は調査対象では僅少であるが、これは発話者の心理に自制と緊張が、または自制と弛緩が微妙に交錯する状況において出現するものではないかと推測し得る。

品質形容詞 "vermeil" は多くの場合、文脈から鮮紅色あるいは薄紅色といった色調を表すものと判断し得るが、*Lais* においてはこの形容詞が恐怖におののく女性の顔の色を形容するために使用されている事例が2箇所存在し、いささか他の使用例とは異なった様相を提示している。人が恐怖を覚えると、通常は顔面が蒼白になるのが生理的には自然な現象であ

ろう。しかし人間の情緒は複雑な感情に支配されていて、恐怖にも大抵の場合は忿怒や悲哀あるいは別のなんらかの感情がそれに伴うものであるようだ。従ってこの2例の *vermeil* もことばの上には現れてこないような微妙な感情の綾が恐怖の背後に隠されているものと理解するならば、やはり顔面の紅潮時に認められる皮膚の赤みを帯びた色調を表示しているものと思われる。

古代作家 OVIDIUS の影響は Marie の場合、*Guigemar*, *Equitan*, *Lawal*, *Eliduc* といった物語の恋愛葛藤の描写に最も顕著に現れている。愛の神の放つ矢に命中した人物は愛する相手のことを思いながら溜息をつき、顔色は蒼ざめ、不眠に苛まれ、嘆き悲しみ、一時の安らぎも得ることはできない。*Lais* におけるこのような記述は直接 OVIDIUS に由来するものか、あるいは OVIDIUS の影響を受けながらも他の作家たちにも影響をおよぼしたといわれる *Le Roman d'Eneas* (作者不詳) を経由したものであるかは即断できない。しかし作品の成立時期も考慮に入れるならば、Marie も当時の他の作家たちと同様に *Le Roman d'Eneas* の強い影響下にあったことは否定できないであろう。

本研究は主として12世紀末の Marie de FRANCE の言語を実証的に分析したものであり、調査対象は決して広いとはいえず、未解決の問題も多く残されている。Marie は *Lais* 以外にも *Fables* や *Espurgatoire Saint Patriz* をも書いたであろうことは既述したとおりであるが、当論文は1-5で *Fables* も分析対象に含めたとはいえ、殆どは作者の最も重要な作品である *Lais* の言語的分析に終始したことも事実である。従って *Fables* や *Espurgatoire Saint Patriz* にも考察の範囲を拡大することは今後の課題としなければならないであろう。限定された時期における狭い範囲の研究ではあるが、当時の言語の状況の一端を幾分なりとも知ることができたと考えている。

